長野県埋蔵文化財センター年報 7

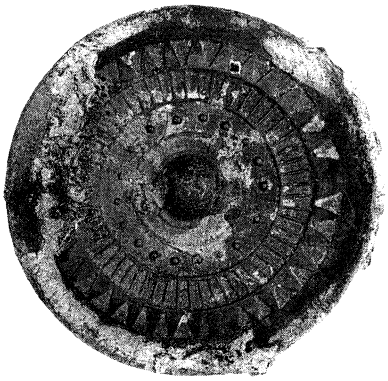
1990

財団法人

長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター年報7

1990



財団法人

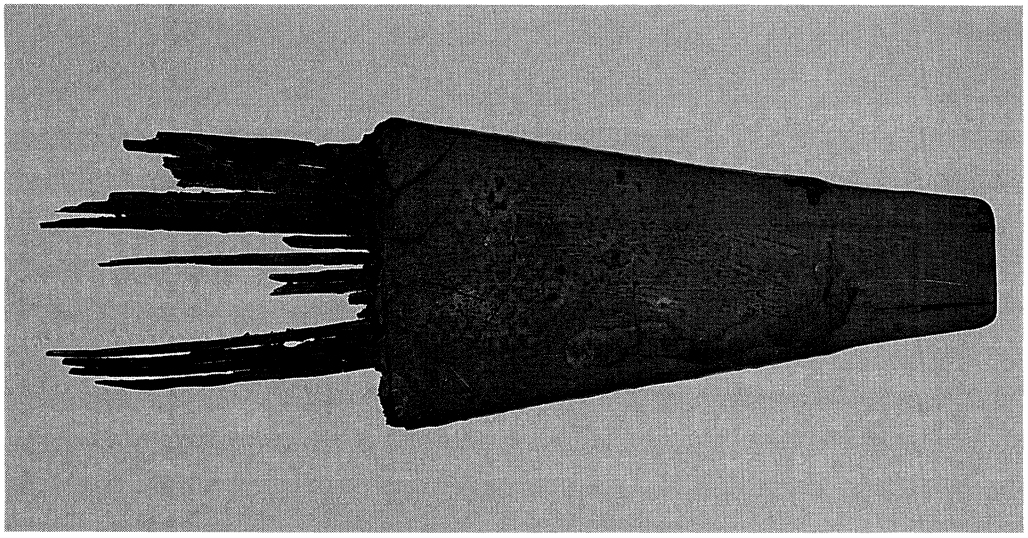
長野県埋蔵文化財センター

1　大星山古墳群の全景（左から３・２・１号墳，右端４号墳）

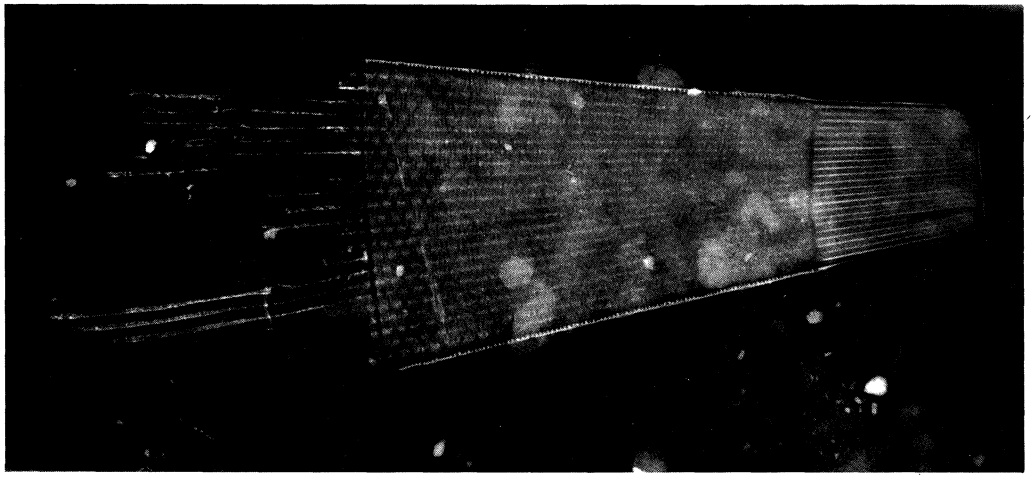
2　春山Ｂ遺跡②－１・②－２区の全景（弥生後期）

3　村東山手遺跡の 8 号敷石住居跡（縄文後期）

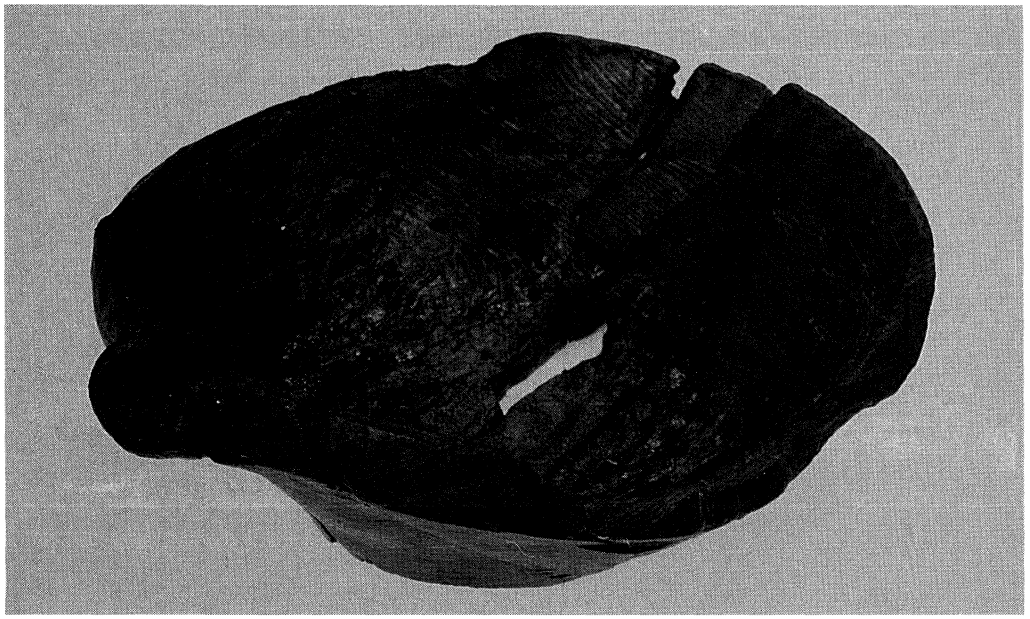
4　春山 B 遺跡②－ 2 区の大型住居跡（弥生後期）



5　松原遺跡河川跡出土の漆塗櫛（弥生中期）



6　同レントゲン写真



7　春山Ｂ遺跡30号住居跡出土の漆塗片口鉢（弥生後期）

8　篠ノ井遺跡の大型住居跡（弥生後期）

9　篠ノ井遺跡の土坑墓（古墳前期）

10　川田条里遺跡Ｄ地区の水田跡（弥生後期）

11　川田条里遺跡Ａ地区の水田跡（古墳後期）

序

㈶長野県埋蔵文化財センターは，発足以来９年目を迎え，節目の年となりました。

本年度は「長野調査事務所」と「佐久調査事務所」の２所体制で事業を進めてまいりました。

長野調査事務所では，前年度に引き続き長野自動車道関連の東筑摩郡坂北村，更埴市，長野市の５遺跡，上信越自動車道関係では長野市域で10遺跡の発掘調査を実施しました。佐久調査事務所でも佐久市内の３遺跡の発掘調査を行いました。

整理作業は，東筑摩郡明科町所在の北村遺跡と佐久市内の22遺跡について実施し，特に「佐久市内その２」とした21遺跡については，報告書の刊行作業も合わせて行い，発掘調査の成果を公表することができました。

個々の遺跡の調査成果については，本文中で細かくふれておりますが，沖積地に立地する縄文時代から平安時代にかけての数々の大集落遺跡の調査を実施，地域の歴史を解明するうえで貴重な発見となり大いに学会から注目されるところとなりました。

前年度から継続調査中の篠ノ井，松原，榎田，川田条里遺跡，本年度から開始した春山Ｂ遺跡をはじめとする弥生時代の集落跡，水田域は生活構造を明確にする資料を提供しました。

本年度の調査で最も注目されたのは，松原遺跡で発見された縄文時代の文化層の存在でありました。善光寺平の沖積地では，層としては発見例のないこの時期の調査は注目され長野県遺跡調査指導委員会の先生方をはじめ多くの方々のご指導を得て慎重に調査を進め，多大の成果をおさめることができました。また大星山古墳群の調査も，古墳時代前期のこの地域の歴史を解明する上で重要な発見となりました。

このように多大な成果をあげて本年度の調査も終了しましたが，松原遺跡，榎田遺跡をはじめとする千曲川の沖積地の調査は，通常の遺跡と異なり事前の調査準備をはじめ困難を伴う面が多く，また，何層もの文化層，間層の排土等予想もしない多くの問題が生じてまいりました。このような悪条件が重なり本年度もまた，冬期間の調査を余儀なくされましたが，厳しい工事工程の中で，事態をよく理解し御協力いただいた日本道路公団をはじめとする関係各位，地元の皆様方に深く感謝します。また発掘調査に従事された調査研究員，作業員のみなさんに，敬意を表します。

普及・公開活動としては，現地説明会，現地出土品展，長野市立博物館を会場に本年度の出土品展「善光寺平を掘る」を実施しました。

いずれも早朝より多数の参観をいただきまして，調査研究員一同感激したところであります。このような文化財保護思想の啓蒙活動は，まだ十分とはいえませんが，今後とも「市民により解かりやすく」を目標に努力をつづけていきたいと思います。

刊行にあたり，御協力をいただいた関係各位に対し，深く感謝し今後とも御支援と御指導をお願いいたす次第です。

平成３年３月20日

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長　樋　口　太　郎

目　　次

口絵
序
目次
Ⅰ　発掘調査および整理作業の概要
1　長野自動車道関係…… 1
〔長野調査事務所〕
(1)　発掘調査の概要…… 1　(2)　整理作業の概要…… 3
(3)　北村遺跡の整理作業の概要…… 3
2　上信越自動車道関係…… 4
〔佐久調査事務所〕
(1)　発掘調査の概要…… 4　(2)　整理作業の概要…… 4
3　発掘調査遺跡…… 9
〈長野自動車道〉
(1)　向六工遺跡…… 9　(2)　石川条里遺跡……10
(3)　篠ノ井遺跡群……12　(4)　窪河原遺跡……16
(5)　松原遺跡……18　(6)　北平１・２号塚……32
(7)　村東山手遺跡……33　(8)　大室古墳群……36
(9)　川田条里遺跡……38　(10)　大星山古墳群……48
(11)　春山・春山Ｂ遺跡……52　(12)　北の脇遺跡……57
(13)　前山田遺跡……59　(14)　榎田遺跡……62
〈上信越自動車道〉
（１・２）西赤座遺跡・栗毛坂遺跡……67　(3)長土呂遺跡群……69

Ⅱ　普及・研究活動
1　現地説明会……71
2　展示会……73
3　指導・研究会・学習会……75
4　刊行物……77

Ⅲ　機構・事業の概要
1　機構……78
(1)　組織……78　(2)　事務所……78
2　事業……78

(1) 理事会および会計監査……78 (2) 調査事業……79
(3) 事業費……79 (4) 普及活動……79
(5) 職員の研修……79
平成2年度役員および職員……82

口 絵

1 大星山古墳群の全景 2 春山B遺跡②－1・②－2区の全景
3 村東山手遺跡の8号敷石住居跡 4 春山B遺跡②－2区の大型住居跡
5 松原遺跡河川跡出土の漆塗櫛 6 同レントゲン写真
7 春山B遺跡30号住居跡出土の漆塗片口鉢 8 篠ノ井遺跡の大型住居跡
9 篠ノ井遺跡の土坑墓 10 川田条里遺跡D地区の水田跡
11 川田条里遺跡A地区の水田跡

地図1 長野自動車道・上信越自動車道にかかわる遺跡分布図……6
第1図 向六工遺跡の遺構分布図……9
第2図 縄文早期住居跡……10
第3図 中世土坑……10
第4図 中世火葬施設……10
第5図 ⑫区の江戸時代水田……11
第6図 ⑫区の平安時代水田……11
第7図 ⑫区の古墳時代中期大畦畔芯材……11
第8図 篠ノ井遺跡群の調査概略図……13
第9図 弥生時代後期の大型竪穴住居跡……13
第10図 古墳時代の土坑墓……13
第11図 平安時代の礫床墓……14
第12図 平安時代の畑跡……15
第13図 噴砂跡……15
第14図 窪河原遺跡の全体図……17
第15図 12トレンチの畦畔状遺構……17
第16図 火葬墓（SK40）の集石……17
第17図 馬頭骨（SK17）の埋葬……17
第18図 東側調査区の中世面遺構配置図……17
第19図 松原遺跡の時代と時期……18
第20図 松原遺跡の全体図……20
第21図 縄文時代前期末～中期初頭の全体図……21
第22図 縄文時代中期末～後期前半の全体図……22

第23図　弥生時代中期後半の全体図……25
第24図　弥生時代後期の遺構図……27
第25図　古代～中世の全体図……29
第26図　北平１号塚の全景……32
第27図　北平２号塚の全景……32
第28図　村東山手遺跡の調査範囲と遺構配置図……34
第29図　村東山手遺跡の８号敷石住居跡……35
第30図　８号住居跡出土の注口土器……35
第31図　村東山手遺跡の石棺墓……35
第32図　村東山手遺跡９号敷石住居跡の廃屋墓……35
第33図　村東山手遺跡の奈良時代墳墓……35
第34図　大室24号古墳の横穴式石室……37
第35図　川田条里遺跡の全景……38
第36図　川田条里遺跡の発掘区と土層柱状図……39
第37図　川田条里遺跡Ａ２地区の中世遺構全景……40
第38図　川田条里遺跡Ａ・Ｂ地区の全景……41
第39図　川田条里遺跡Ｂ地区における水田区画の変遷……42
第40図　川田条里遺跡出土の珠文鏡……45
第41図　川田条里遺跡Ｄ地区の方形周溝基……45
第42図　川田条里遺跡出土の木製品実測図……46
第43図　大星山古墳群の全体図……48
第44図　大星山３号墳の石室……49
第45図　大星山３号墳第１主体部出土の器台・鉄鏃……49
第46図　大星山１号墳の石室……49
第47図　大星山４号墳の石室平面図……50
第48図　大星山４号墳の石室……50
第49図　大星山２号墳石棺の遺物出土状態……51
第50図　春山遺跡・春山Ｂ遺跡の発掘区……52
第51図　春山Ｂ遺跡①－２区の遺構分布図……53
第52図　春山Ｂ遺跡②－１・②－２区の遺構分布図……54
第53図　春山Ｂ遺跡住居跡出土の漆塗片口鉢……55
第54図　春山Ｂ遺跡方形周溝墓出土の弥生後期土器……56
第55図　北の脇遺跡の遺構全体図と出土中世陶磁器……58
第56図　前山田遺跡の発掘区全体図……59
第57図　前山田遺跡の人工テラスとテラス上の石垣……60
第58図　太い柱をもつ建物跡……61

第59図　石垣と杭・柱・建築部材……61
第60図　榎田遺跡の調査範囲図……62
第61図　榎田遺跡③－３区第２検出面の遺構配置図……63
第62図　榎田遺跡の竪穴住居跡と掘立柱建物跡……65
第63図　榎田遺跡出土の緑釉陶器椀・饒益神寶・帯金具……66
第64図　栗毛坂遺跡群Ｄ地区の３号住居跡……68
第65図　栗毛坂遺跡群Ｄ地区の遺構配置図……68
第66図　長土呂遺跡群の遺構配置図……70
第67図　長土呂遺跡群の36・49号住居跡実測図……70
第68図　大星山古墳群の現地説明会風景……71
第69図　篠ノ井遺跡の展示会風景……73
第70図　「善光寺平を掘る」展示会風景 …… 74

第１表　平成２年度長野自動車道および上信越自動車道関連事業一覧…… 8
第２表　松原遺跡の時代・時期別遺構一覧……18
第３表　松原遺跡の時代・時期別出土遺物一覧……19

Ⅰ　発掘作業および整理作業の概要

平成２年度は，前年度に引き続き長野自動車道と上信越自動車道関連の発掘調査および整理作業を，長野調査事務所，佐久調査事務所で実施した。

１．長野自動車道関係

〔長野調査事務所〕

(1)　発掘調査の概要

調 査 区 域　東筑摩郡坂北村，長野市，更埴市

調査遺跡数　15遺跡（坂北村向六工，長野市石川条里，篠ノ井，松原，村東山手，大室古墳群，川田条里，春山，春山Ｂ，北の脇，前山田，榎田，大星山古墳群，北平１号・２号塚，更埴市窪ケ河遺跡，ただし大室古墳群は明治大学考古学研究室へ調査委託）

調査総表面積（総延面積）　161,930㎡（総計356,590㎡）。向六工2,800㎡，石川条里1,600㎡（計3,200㎡），篠ノ井2,300㎡（6,500㎡），窪河原5,500㎡，松原31,800㎡（計110,400㎡），村東山手15,500㎡，大室古墳群600㎡，川田条里53,580㎡（計137,840㎡），春山250㎡（計500㎡），春山Ｂ18,200㎡（計28,200㎡），北の脇6,000㎡，前山田2,000㎡，榎田18,800㎡（33,800㎡），大星山古墳群2,000㎡，北平１・２号塚1,000㎡。

調 査 期 間　平成２年４月５日～平成３年２月８日

平成２年度の調査は，坂北村１，更埴市１，長野市13の総数15遺跡で，当初計画14遺跡に対して北平１・２号塚が追加された。

発掘調査は前年度からの引き続きの遺跡が多く，公団との工事工程の調整，発掘協力者（作業員）の募集，調査の準備作業等順調に進み，前年度に比較すればスムーズな状況であったといえよう。

しかしながら遺跡個々では，様々な問題が発生し，関係機関との調整に追われた１年であった。松原遺跡の８層におよぶ文化層の発掘，とりわけ弥生時代中期面の下層２ｍ下から縄文時代後期・中期・中期初頭・前期末の４枚の包含層が発見され，県内の縄文時代の集落立地とは異なり，かつ遺物の分布状態が特異なため，調査方法が確定するまでは試行錯誤を重ねざるを得なかった。地理学的な検討や指導を受けながら，沖積地での埋没地形の把握を含め，縄文時代各時期の住居跡の検出，土壙，土器集中区等の調査は今後の県下の沖積地調査を実施する上で大きな知見を得た。

沖積地で調査を進める上で毎年問題となっているのは，遺跡範囲の確定である。今年度も榎田遺跡では年度途中で，10,000㎡におよぶ遺跡範囲拡大があり，調査計画を変更した。

沖積地での調査では，前年度と同様数多くの調査上の困難点が露呈した。篠ノ井，榎田，

松原の各遺跡をはじめ遺構の密集，重層的な検出等による調査期間の延長，埋没地形の複雑さからくる調査条件の悪化など問題を残している。

沖積地内での調査から得られた大きな成果には，周溝で区画された弥生時代の集落の検出や，集落と墓域，水田域との関係等生活構造全体を考える上で数多くの資料を得たことである。また，篠ノ井遺跡，春山Ｂ遺跡，川田条里遺跡等で数多くの青銅製品が出土した。この中で特に小型の珠文鏡等の鏡類，銅鏃が集落遺跡から発見されたことは，豊かな農耕社会の存在を示しているものと思われる。川田条里遺跡，春山Ｂ遺跡，松原遺跡では，布・臼・弓・舟・農耕具，建築部材等多くの木製品が出土した。漆塗りの片口鉢（春山遺跡出土）は数少ない出土例として注目された。

本調査事務所では，高速道路建設に伴う事前調査を主体としているが，善光寺平をほぼ縦貫する形で実施してきた。農耕社会を基本とする弥生時代～平安時代にかけては，集落跡と水田域，方形周溝墓群（土坑墓）との関係や，各遺跡間との関連について，遺跡立地，集落構造の把握など多くの資料を発掘することができた。単なる自然堤防と，後背湿地との関係以上の構造を明らかにしたと思われる。

いずれにしても善光寺平の沖積地に展開した大集落遺跡の調査は，例えば松原遺跡での弥生時代中期（栗林期）の土器編年や組成，榎田遺跡を始めとする他遺跡との比較の中で再検討を要する状況が生まれてきた。

調査地点が北上し，今まであまり手の入っていなかった善光寺平北部（長野市若穂地区）の調査が急速に進み，川田条里遺跡や榎田遺跡，春山Ｂ遺跡の弥生時代の概略については既にふれたが，大星山古墳群の調査の成果は，今まで更埴市森，長野市川柳等南部地域に集中していた，４世紀末～５世紀代のこの地域では古式に属する古墳の分布観を大きく変える結果となり，古墳時代の善光寺平の政治構造を考える上で貴重な資料を提供した。

榎田遺跡では，古墳時代（５世紀代）の集落が発見され善光寺平では比較的検出例の少ないこの時期の実態が明らかとなった。また平安時代の溝からは，饒益神宝，花柄入りの緑釉陶器，帯金具が出土した。

近年の本調査事務所での大きな成果のひとつに，中世関係の調査の進展がある。

春山城下に形成された堀や柵をめぐらせた建物遺跡群が検出された北の脇遺跡，山の斜面にならぶ五輪塔群や館跡が発見された松原遺跡，河原近くに墓跡が点々と配されていた窪河原遺跡，寺尾城関係の関連施設と思われる，径15mほどの土盛塚で，古銭等の出土により時期がほぼ推定できた北平１号，２号塚の調査は今後のこの時期の調査にあたっての新知見を知った。

昭和63年以来調査を進めてきた善光寺平の沖積地の調査は，ほぼ東西方向に縦貫する形で終了するが，居住域と生産域，墓域が有機的な関連を持って調査され，地域史を変えるいくつかの資料を得ることとなった。

(2) 整理作業の概要

北村遺跡の整理作業も本格的に始まり，遺構関係の記録類の整理，データー処理，遺構図の作成，土器の接合，復元，分類，実測図の作成（一部実測は委託を含む），拓本の作成を進めてきた。また，人骨については，独協医科大学，東京大学に委託して分析を進めてきた。いずれも平成3年度には，データーの集成まで終了する計画である。

本年度発掘調査を実施した各遺跡については，記録類の整理，図面類，写真の整理を行った。また木器，金属器等緊急を要する遺物の保存，整理作業を実施した。

長野調査事務所ではまだ本格的な整理作業には着手していない。未整理の遺跡については平成3年から着手予定であるが，作業棟の整備，倉庫の拡充等多くの条件整備が必要であったが関係者の理解によって前進しつつある。

また数年来，問題となっていた木製品の保存処理についても解決のメドが立ってきた。

善光寺平の大規模遺跡の整理作業は，いずれも数年間の年月を要するものである。長期的な計画のなかで進める必要があると考えている。

(3) 北村遺跡の整理作業の概要

本年度の整理作業は，遺構実測図の整図と遺物の分類・接合・選別・復元および遺物実測図の作成を中心として行った。

遺構図は，個々の遺構間の前後関係を考慮しながら割付図を作成することから始めた。個々の割付図を上下左右にすり合わせ，最終的には3ないし4面の全体図ができることになる。これと並行して行なった個別遺構の整図は，例えば人骨を伴う墓坑の場合，現場で配石の検出状態と配石下部土坑の状態とを2段階に分けて作図し，昨年度はクリーニング後の人骨出土状態図を作成しているため，3者を合成する形で進められた。現在80%が終了している。

遺物は，土器・石器・土製品・石製品ごと大まかに器種別の分類を行なった。土器は，遺構または地区単位に接合を行ない，特徴的なものに限って遺構間の接合も試みた。型式分類のあと，各型式を代表する個体を選別し，実測・拓本などの作業に回している。すでに始めた遺物の実測数は今後，縄紋土器約150点（拓本約3,000点）・古代土器約300点・石器約1,000点・土製品約300点を数える。

人骨の鑑定およびコラーゲン分析・花粉分析・放射性炭素年代測定は現在継続中で，今年度は約半数の試料について成果が出る予定になっている。

明年度は，遺物の実測を完了させ，図面類のレイアウト・トレース・製版と並行させながら，本文の執筆にとりかかる。報告書の刊行は，平成4年度中を予定している。

2．上信越自動車道関係

〔佐久調査事務所〕

(1) 発掘調査の概要

調 査 区 域　佐久市岩村田地区

調査遺跡数　3遺跡（西赤座遺跡・栗毛坂遺跡群・長土呂遺跡群）

調査総面積　18,700㎡

調 査 期 間　平成2年4月9日～同年10月1日

上信越自動車道建設にかかわる発掘調査は，群馬県境から佐久インターチェンジの間に分布する23遺跡の調査を当初計画とし，昭和61年10月から開始している。わずかな残件部分を除いて既に終了していたが，日本道路公団の管理棟建設用地が加わり，本年度はこれにかかわる西赤座遺跡の調査を実施した。また，来年度以降に計画していた佐久インターチェンジ以北の対象遺跡についても，工事工程の急変から一部本年度中の調査を余儀なくされ，栗毛坂遺跡群と長土呂遺跡群の調査を行った。

西赤座遺跡からは，旧水田区画に伴う水路と思われるものを含め，小規模な溝址10本を検出しただけであった。昭和62年度に行った調査結果とあわせて，付近一帯が居住空間外であったと考えられる。栗毛坂遺跡群では，平安時代集落の縁辺部を調査した。竪穴住居跡相互の構築時期にさほど時間差は存在しないが，「田切り（小河川の浸食によって起こる火山灰地特有の谷地形）」に壊されるものとその埋没土中に構築されるものとがあり，当地の自然環境の推移とこれに関連した土地利用のあり方が細密に復原できることとなろう。長土呂遺跡群では，近隣の調査から推測していたが，縄文時代の「陥し穴」群と古墳時代後期後半から平安時代にかけての大集落跡が露呈した。「陥し穴」については，早期に比定可能な石鏃を覆土中に含んでいたことである程度時期を模索することができることとなり，また集落跡については遺構の分布密度と遺物の内容から縁辺部として捉えられ，集落の範囲や構造を検討する上で果たす役割は大きいといえる。そのほか，古墳時代後期後半の畑跡と特異な構造をもつ竪穴住居跡2軒を検出したことも注視されよう。

(2) 整理作業の概要

報告書刊行にむけた本格的な整理を平成元年度から始めている。群馬県境から佐久インターチェンジ間の調査遺跡を対象としており，その内，東端に位置する下茂内遺跡を「佐久市内その1」・木戸平遺跡以西を一括して「佐久市内その2」に収めるよう計画した。

ア　佐久市内その1

これまで，槍先形尖頭器製作跡関係を中心にすすめてきた。本年度は，槍先形尖頭器・スクレイパー・接合資料の実測およびトレースを行ったほか，計量・個体別資料の分類・接合をすすめながら，それぞれのデータを随時コンピューターに入力した。石器の実測はすべて終了し，現在トレース作業に移行している。接合が終了した個体については，写真実測をまじえながら図化作業を継続している。接合作業は，第Ⅰ文化層のブロック間接合まで終了させ，来年度第

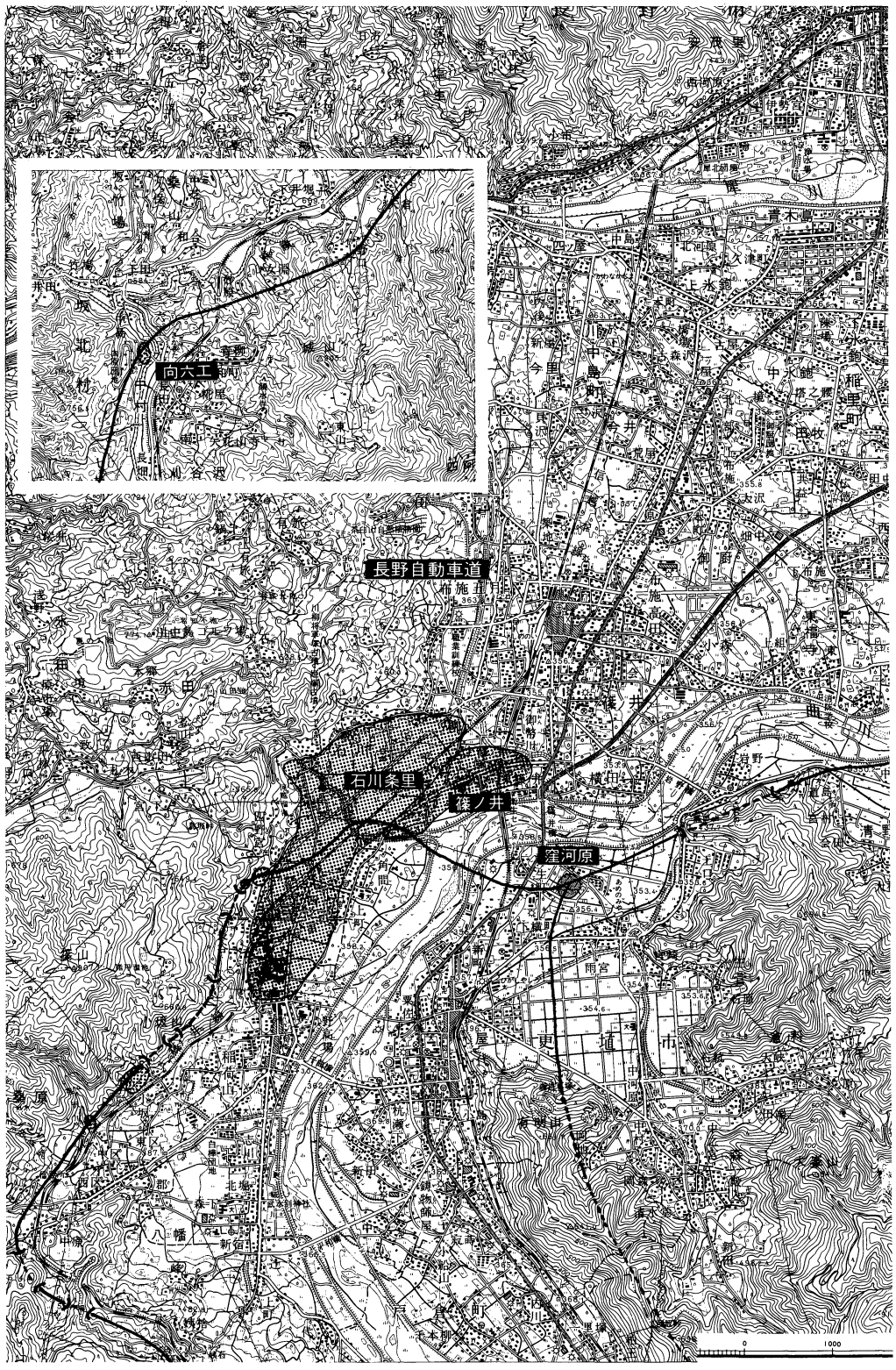
II文化層のブロック間接合を試みて終了する見込みである。分布図などは，文化層ごとにデータが確定したところで作図を行っている。

縄文時代早期以降の整理は，石器を除く遺物実測がほぼ終了するところまでいき，遺構についても二次原図の修正と版下作りに着手した。

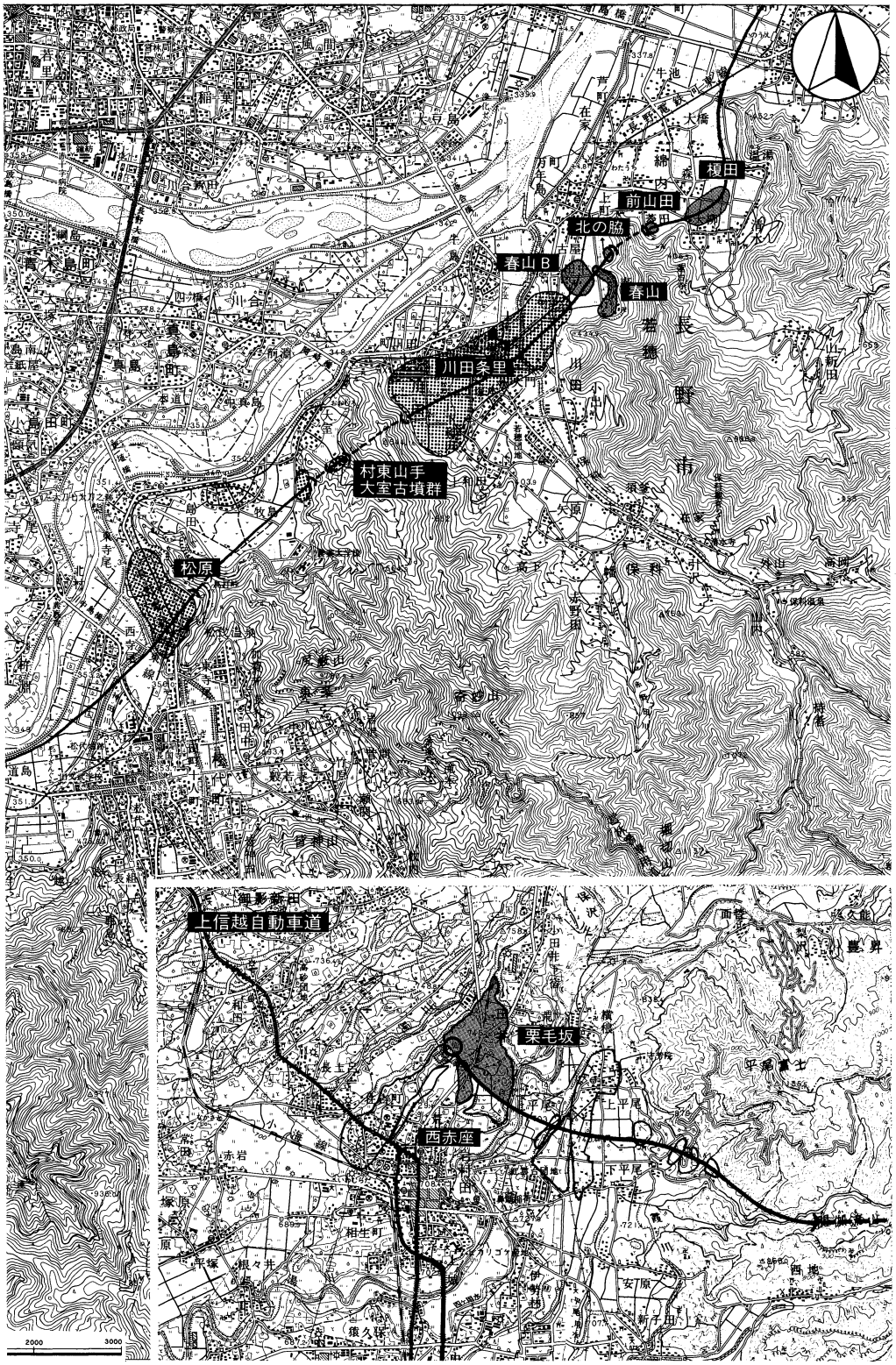
槍先形尖頭器製作にかかわる重要な接合が当初の予想をはるかに上回ったことで，接合および実測作業に時間を費やすことが多く，全体として進行状況は遅れ気味である。来年度中に報告書を刊行する予定でいるが，苦しい状況ながらも，可能な限りのデータ化と各時代・時期ごとのあり方を提示できるよう全力をあげて取り組んでいる。

イ　佐久市内その2

2年間鋭意作業を継続してきた結果，ようやく報告書刊行にこぎ着けた。遺跡の種類や規模が異なる22遺跡を一括したことから，遺跡単位の資料提示と分析が中心となったが，縄文時代から近代にわたる多彩な遺構・遺物を提示することができ，また，分析をとおして新たな展望が開けた分野も少なくない。今後の活用に期待する。



地図１　長野自動車道・上信越自動車道にかかわる遺跡分布図


榎田
前山田
北の脇
春山B
春山
川田条里
村東山手
大室古墳群
松原
上信越自動車道
栗毛坂
西赤座

第Ⅰ表　平成２年度長野自動車道および上信越自動車道関連事業一覧

長野調査事務所　(1)　発掘調査

市町村	遺跡名	発掘調査面積				調査期間	調査日数	作業人数	発掘調査の状況
		調査対象面積	調査実施表面積	調査面	実質延面積				
坂	向六工	14,500	2,800	1	2,800	2．4．5～　9．17	46	558	縄文～近世　住居跡８，土坑65，その他
長野市	石川条里	70,000	1,600	2	3,200	2．9．1～　11．25	72	1,163	弥生～近世　水田跡
	篠ノ井	18,600	2,300	3	6,500	2．4．2～　10．5	119	4,199	弥生～平安　住居跡377，掘立柱建物跡20 土壙963，溝18，墓跡13他
	松原	46,000	31,800	3	110,400	2．4．2～(3)2．8	203	32,418	縄文～中世　住居跡，土壙，掘立柱建物址，井戸，溝， 墓跡
	村東山手	18,000	15,500	1	15,500	2．4．2～　10．12	116	3,233	縄文～平安　住居跡15，土壙80，墓２
	大室古墳群	1,200	600	1	600	2．5．1～　7．20	90	167	古墳４基
	川田条里	104,960	53,580	4	137,840	2．4．2～　12．27	206	16,306	弥生～近世　水田跡，方形周溝墓，建物跡，石列
	春山Ｂ	24,800	18,200	2	28,200	2．4．2～(3)1．11	161	6,564	弥生～中世　住居跡40，掘立柱建物跡５，方形
	春山	500	250	2	500			30	周溝墓18，土坑100，溝52，柵列２，その他
	北ノ脇	6,000	6,000	1	6,000	2．10．8～　12．7	70	1,672	建物跡14，堀跡，溝，土坑
	前山田	3,000	2,000	1	2,000	2．10．8～　12．7	41	1,449	中世　建物跡，杭列他
	榎田	41,800	18,800	2	33,800	2．4．2～(3)2．8	208	15,124	弥生～中世　住居跡，土壙，溝，方形周溝跡
	大星山古墳群	2,000	2,000	1	2,000	2．4．5～　10．5	112	1,151	古墳４基
	北平Ⅰ・2号塚	1,000	1,000	1	1,000	2．12．5～　12．20	7	42	中世の塚２基
更	窪河原	36,000	5,500	1	5,500	2．9．26～　11．30	45	630	中世の墳墓
合計		388,360	161,930		356,590				

(2)　整理作業

市町村	遺跡名	調査面積	整理作業の内容
明科町	北村	21,530	遺物の整理，遺構遺物図の作成

佐久調査事務所　(1)　発掘調査

市町村	遺跡名	発掘調査面積				調査期間	調査日数	作業人数	発掘調査の状況
		調査対象面積	調査実施表面積	調査面	実質延面積				
佐久市	西赤座	2,500	2,500	1	2,500	2．5．17～６．11	14	67	平安時代住居跡
	栗毛坂	5,200	5,200	1	5,200	2．5．21～８．7	45	533	平安　住居跡４，建物跡２，溝５
	長土呂	11,000	11,000	1	12,700	2．4．5～10．1	102	2,104	古墳～平安　住居跡46，建物跡15，溝，土壙
合計		18,700	18,700		20,400				

(2)　整理作業

市町村	遺跡名	調査面積	整理作業の状況
佐久市	下茂内	27,000	遺物の整理，遺構，遺物図の作成等
	木戸平Ａ，吹付，上中原，鶉ヲネ，東林，西林，干草場，城ノ口，東ねぶた，		原稿執筆，報告書の出版
	西ねぶた，大星尻，丸山，丸山Ⅱ，丸山古墳群，北山寺，栗毛坂，坂，西赤座他	227,300	

発掘調査合計	407,060	189,510		375,290	2．4．5～３．2．8			

3　発掘調査遺跡

〈長野自動車道〉

(1)　向六工遺跡

所　在　地：東筑摩郡坂北村字向六工5846ほか

調 査 期 間：平成２年４月４日～４月20日，同年７月24日～９月16日

調 査 面 積：2,800m²（総計14,500m²）

遺跡の立地：東条川に張り出す東向き河岸段丘

時代と時期：縄文時代早期，平安時代，中・近世

遺跡の特徴：縄文時代早期の集落，平安時代の集落，中世の鍛冶跡を伴う集落

主な検出遺構

遺構 / 時期	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	焼土跡	その他
縄　文	2			6	
平　安	5		64		
中世以降	1	1	火葬施設1	12	柵4，集石1

主な出土遺物

土　器：縄文早期土器，土師器，須恵器，灰釉陶器，内

陶磁器　耳鍋，美濃焼，白磁

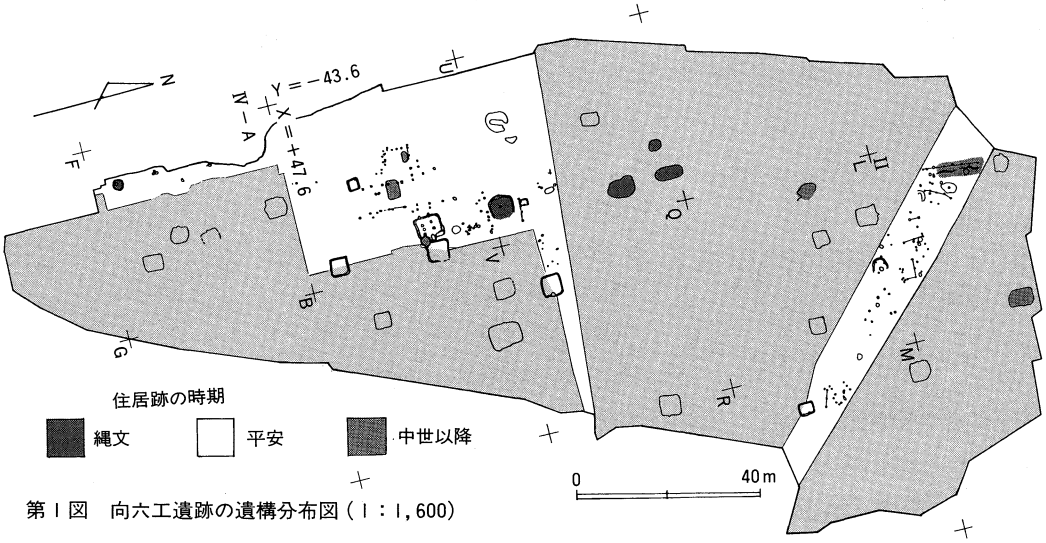
石　器：石鏃，石匙，掻器，磨製石斧，凹石，磨石

土製品：土錘，金属製品：刀子，銭貨

本遺跡は，東条川左岸に台形に張り出す第２段丘面全面に展開し，標高約590～600mの地点である。昨年度とあわせて，20,000m²弱の段丘上の遺跡をほぼ全面調査した。

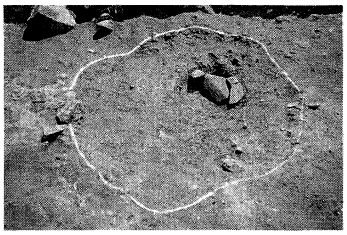
縄文時代　II－U・IV－A区の崖錐堆積に覆われて，26号住居跡と焼土跡６カ所を検出した。住居跡は径2.2mの円形で浅く，中央に炉が掘り込まれ焼土が残る。柱穴は検出できなかった。遺物は条痕文土器，石鏃，石匙，凹石，磨石があり，土器は絡条体圧痕文を施され，縄文が伴う。焼土跡付近には遺物が多く，II－U区では旧流路の窪地に堆積した黒色土中から，多量の黒曜石片が出土した。29号住居跡は径4.8mの隅丸方形で，明確な炉・柱穴は検出できなかった。土器はほとんどないが，床面の一部には黒曜石の砕片が集中していた。

平安時代　昨年度調査中途の３軒を含め，合計19軒となった。調査区全体に散在し，切り合



第１図　向六工遺跡の遺構分布図（１：１,600）

うものはない。28号住居跡は一辺5.5mの方形で東壁中央にカマドをもつ。床面には炭化材が残り，壁面は焼けていた。柱穴は床面に6個あり，東西方向に3個ずつ並ぶ。本址は大形の部類に属すが，柱穴のみつからないもの，壁上から掘り込まれるものなどバラエティーがあり，住居の規模と関連しそうである。本址は光ケ丘1号窯式の灰釉陶器を含み，土錘1点が出土した。筑北では初見である。


第2図　縄文早期住居跡

中　世　II－U地区に遺構が集中した。柵または掘立柱建物跡に伴うらしい1030号土坑は長径約2mの楕円形で，隅から美濃焼丸皿が11枚重ねで出土した。1048号土坑は一辺1.5mの方形，深さ60cmの火葬施設で，東・西壁に突出部をもつ。この間を結んで底面が一段深く掘られ，骨灰・銭貨が遺存していた。壁面は固く焼けている。葬送にかかわる遺構は本遺跡で唯一である。遺跡中央を東西に縦断する道路は岩殿寺の現参道で，この下部も調査したが，伝承の山門にかかわる遺構は確認されなかった。また，昨年度は鍛冶跡と思われる焼土跡が多数確認されたが，今年度調査した焼土跡はさほど強く焼けた状態ではなく，遺物も伴わない。（綿田　弘実）

第3図　中世土坑

第4図　中世火葬施設

(2)　石川条里遺跡（⑫区）

所　在　地：長野市篠ノ井塩崎3845−1番地ほか
調 査 期 間：平成2年9月14日～同年12月7日
調 査 面 積：1,600m²（総計70,000m²）
遺跡の立地：千曲川左岸の自然堤防西側の後背湿地
遺跡の概観：更級郡旧塩崎村の南西部に広がる水田地帯で，篠山山系東麓の鶴前遺跡と自然堤防上の篠ノ井遺跡群の間を占め，生活域と水田域よりなる。

主な検出遺構

遺構／時期	畦畔	杭列	溝	土坑	その他
弥　生	芯材もつもの3	1	1		
古　墳	1			12	
平　安	9		1	1	スキ跡
中・近世	2		1		足　跡

主な出土遺物

土　器：弥生中・後期土器，土師器，須恵器，中・近世陶磁器　陶器
石　器：磨製石庖丁
木製品：鋤，建築材，木簡
金属製品：銭貨，キセル，和鏡
自然遺物：獣骨，モモの種子

今年度の調査区⑫区は，ＪＲ篠ノ井線稲荷山駅の北東側で，古墳時代の祭祀土坑群が検出された微高地の東側に隣接している。このため土層は西から東へわずかに傾斜をもつ。平面的には，江戸・平安・弥生時代後期の3面，畦畔芯材のみの検出は古墳時代中期・弥生時代中期の

2面で，都合5面を調査した。この結果，3カ年で本線部分70,000㎡の調査を終了した。

近世水田跡は，断面観察では微高地上も含めてほぼ全調査区で確認できたが，面的に調査できたのは⑫区のみである。弘化4年（1847）の善光寺地震が原因の洪水によって埋没した水田面で，20m以上間隔をあけた幅40cm・高さ10cm程度の南北方向の畦畔2条を検出した。この畦畔は正確に平行せず，若干曲がっている。またこれに直交し，東西方向に何条も並走する足跡列も検出された。西端では足跡が途絶え，水田区画の境界に当たっている可能性もある。いずれにしても1枚の水田面はかなり広いものとなりそうである。

平安時代水田面は，仁和4年（888）の大洪水で埋没したと考えられる水田面で，大畦畔はかからず，東西・南北に区画された長方形の水田15枚が検出された。東西方向の畦畔には水口があり，田面には足跡と思われる無数の凹凸がある。昨年度調査した⑫区南半から始まり，南西から北東へ畦畔を突っ切って続くスキ状の痕跡もみられる。これと同じ方向に1条，水田区画の畦畔より低く，痕跡的な畦畔が検出された。これは⑫区南半で検出され，水田区画と45°に交わる大畦畔と直交し，古墳時代中期以前の大畦畔・水路とほぼ同方向のため，検討を要する。調査区東辺は坪境に当り，現水路と一致する水路が確認されているが，この氾濫によるためか周辺には砂層がなく，畦畔等は確認できない。

第5図　⑫区の江戸時代水田

第6図　⑫区の平安時代水田

古墳時代中期の大畦畔は部分的に多くの横木を芯材とし，一木鋤1点が出土した。調査区中央部ではこの畦畔の南北に木材が流れたような状態で分布していた。

弥生時代後期の水田面はピートに覆われ，古墳時代の大畦畔の北側に沿って，やはり部分的に芯材を入れた大畦畔が検出された。西半には芯材がないが盛土が残り，東半の横木のない部分にもきわめて細い杭がまばらに打たれていた。大畦畔にほぼ直交・平行する水田区画がみられるが，畦畔はきわめて不明瞭であった。この大畦畔の直下に中期の大畦畔があり，後期に継承されたものと思われる。西半部では横木がかなり深く方向も若干異なるため，2時期に分かれる可能性がある。横木の下部から石庖丁が出土した。

第7図　⑫区の古墳時代中期大畦畔芯材

本調査区は狭い面積ながら条里水田以前の状況を知る上で多くの成果が得られた。（綿田　弘実）

(3) 篠ノ井遺跡群

所　在　地：長野市篠ノ井塩崎字宗旨坊ほか

調査期間：平成２年４月４日～平成２年10月５日

調査面積：約2,300㎡

遺跡の立地：千曲川の自然堤防上

時代と時期：縄文時代晩期，弥生時代中期・後期，古墳時代前期・末期，奈良・平安時代，中世以降

遺跡の特徴：弥生後期後半～古墳前期の集落跡，７世紀後半～10世紀の集落跡を中心とする

主な検出遺構

遺構／時期	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	墓	溝	その他
縄文晩期				1		
弥生中期	377	20	963	12	50	不明３
弥生後期～古墳前期						
７世紀以降奈良・平安						畑跡３
中世以降						

（注＝土坑の中に井戸を含む）

主な出土遺物

土器・陶器：縄文晩期土器，弥生中期土器・後期土器，土師器，須恵器，灰釉・緑釉陶器

石　　器：石鏃，叩き石，打製・磨製石斧，磨製石包丁，砥石

石　製　品：勾玉・管玉

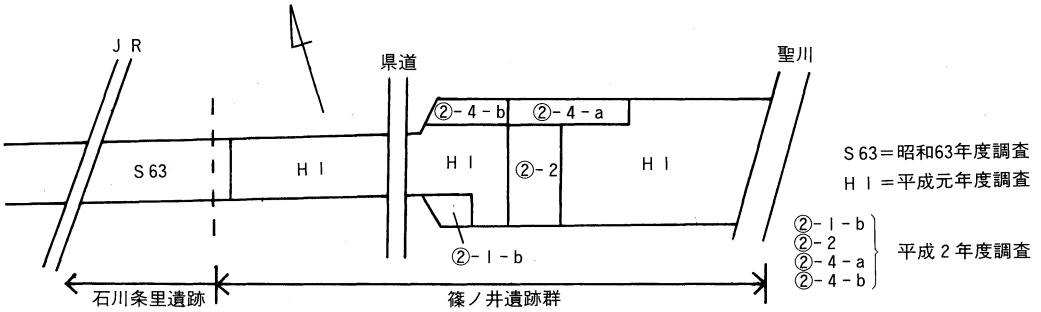
そ　の　他：井戸枠，珠文鏡，銅鏃，銭貨，帯金具，土錘，土製勾玉，ガラス小玉，琥珀玉，人骨，獣骨（馬・牛ほか），ベンガラ等

はじめに　中央道長野線の建設工事に伴う篠ノ井遺跡群の調査は，昭和63年度の石川条里遺跡⑳地区の調査の一環として始まり，平成３年度に若干の面積を残すものの平成２年度をもってそのほとんどの調査を終了した。調査終了後，本格的な整理作業が進められていない状況の中で詳細については述べることはできないが，調査された各時代の代表的なものについて記してみることとする。

縄文時代晩期　今回の調査において確実に縄文時代晩期の遺構と考えられるものには土坑墓ＳＭ7010が検出されている。このＳＭ7010は長径1.3m・短径0.8mのもので，完形の埦型土器と歯が出土している。また直接的には遺構に伴うものではないが，平安時代の竪穴住居跡の埋土中に完形に近い浅鉢型土器があたかも投げこまれたか捨てられたかのような状況で出土している。

弥生時代中期　数件の竪穴住居跡や数基の土坑が検出されている。このうちの土坑ＳＫ8167では偏平片刃石斧と太型蛤刃石斧が並べ置かれたかのような状態で出土している。

弥生時代後期　調査された遺構は弥生時代後期の中でも特に後半頃の時期のものが多いようである。そして昨年・今年と調査された遺構数では平安時代に次ぐものである。遺構として特に注目できるものは長辺約10m・短辺約５mの大型竪穴住居跡の検出であり，この大型竪穴住居跡が２軒調査された。そのうちの竪穴住居ＳＢ7499は南側半分が調査区外となるため全体像がはっきりとしないが，竪穴住居ＳＢ7488は完掘され柱穴・炉・入口施設の調査がなされた。



第８図　篠ノ井遺跡群の調査概略図

第９図　弥生時代後期の大型竪穴住居跡

この２軒は近接して建てられており，同時に存在したとは考えられず，同じ性格・役割を有するものの建てかえであろうことが想定される。このＳＢ7488の埋土中からは弥生時代型の柳葉式的な銅鏃が出土している。この銅鏃と類似型式のものが弥生時代後期の溝の肩部分から出土しており，また昨年度の調査でも同様の銅鏃が出土している。当遺跡では合計３本の銅鏃が出土したことになる。

古墳時代　この時期の遺構については，そのほとんどが前期の竪穴住居跡や土坑であり，中期と考えられる竪穴住居跡は１・２軒，そして後期でも７世紀代と考えられるものが数軒確認されている程度である。

前期の竪穴住居跡は特に今年度の調査区②－４－ａ区や②－４－ｂ区といった調査区の北東部分から北部分にかけての所に多く集中し，弥生時代後期の集落よりもその中心を北側によせるようである。

第10図　古墳時代の土坑墓

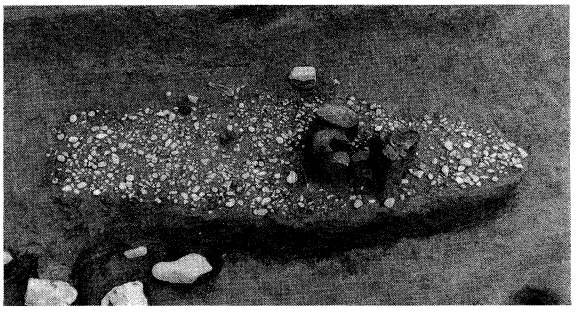
また注目すべきことは，４世紀後半から５世紀前半にかけてのものと考えられる土坑墓ＳＭ7016の検出と，その中に副葬されていた琥珀玉やライトブルーのガラス小玉・碧玉製の大型管玉と珠文鏡の出土であろう。このＳＭ7016は長径2.3m・短径0.9m・深さは現状約0.4mのもので，出土した琥珀玉は直径0.4～1.0cmほどのもので臼玉・ソロバン玉・なつめ玉状をしたものが合計48個以上確認されている。出土状況から，20数個ずつ連ねたものを，布らしきものにつつんで左右の手首あたりに置いたようなものであろうと考えられる。しかしこの件についてはさらに検討が必要であろう。左手首付近から出土した22個の琥珀玉に混じって３個のガラス小玉が出土している。また大型の碧玉製管玉は，首飾りとして用いられた状況で出土してい

る。珠文鏡は直径4.8cmのもので，文様面が伏せられた状況で検出され，その表裏面には木質が付着していた。この木質は鏡を入れた箱の残存であろうと考えられる。木棺の残存らしきものについては，わずかながら確認されているが，現状では木棺墓と断定することはさけておくこととする。なお鏡の文様についてはX線撮影によって確認されたものである。

この頃，篠ノ井遺跡の周辺では，北に川柳将軍塚古墳が造られ，千曲川をはさんで南に森将軍塚古墳が造られている。この2つの古墳はともに100m前後の前方後円墳であり，石室構造・副葬品ともに信州を代表する古墳である。また当遺跡で昨年検出された弥生時代後期から古墳時代前期にかけて使用されていたと考えられる環濠の外側には，1辺10mほどの方形周溝墓や長軸20mほどの前方後方形周溝墓が造られている。これらの周溝墓では鏡や多くの玉類のような副葬品は確認されていない。また昨年度の調査では，調査区の都合上プランの半分程度の調査となってしまったもので，SM7016と類似した土坑墓と考えられる遺構が検出されているが，全容については不明な点が多い。この遺構からは径8.3cmの獣形文鏡や瑪瑙製の勾玉・ライトブルーのガラス小玉・碧玉製の管玉が出土している。これらの副葬品と考えられる物々から時期を断定することは難しいが，SM7016と同時期とも考えられなくはない。このように4世紀後半から5世紀前半頃，篠ノ井ムラを中心に時期を同じくする古墳・周溝墓・土坑墓が存在することが何を意味するものなのか検討を要するところであろう。またSM7016に副葬されていた琥珀玉や珠文鏡がどのような経緯でどのようなルートで搬入されたものなのかを解明することも篠ノ井遺跡群の性格の一端を明確にする重要なポイントとなろう。当遺跡で出土した鏡は，昨年度の重圏文鏡・獣形文鏡，そして今年度の珠文鏡と合計3面となった。

奈良・平安時代　非常に多くの竪穴住居跡や土坑・溝跡などが検出され，特にその大半は平安時代でも9世紀から10世紀にかけてのものである。注目すべきことは昨年度以来のことであるが竪穴住居の密集度であろう。また個別の遺構については，平安時代ではめずらしい礫床墓の検出であり，合計2基を確認しえた。しかしそのうちの礫床墓SM7021は調査区北壁中でのわずかな調査となり，完掘しえたものは礫床墓SM7019のみである。これら2基の礫床墓は平安時代のある時期まで利用されていた大溝が埋まったか，あるいは埋められた後にその埋土を掘り込んでつくられている。北壁での調査となったSM7021からは灰釉の花瓶（けびょう）が埋土中から出土している。

篠ノ井ムラにつくられていた大小の溝については，東西南北につくられ，それぞれの溝が1つの区画を示したり，平行して走る溝と溝との間は道を想定させられる状況もなくはない。また「手洗い場」的な日常用水路的な性格をおびているものでもある。



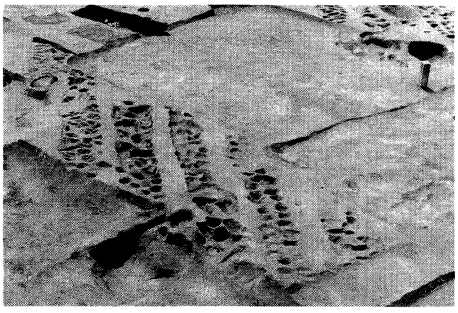
第11図　平安時代の礫床墓

これら平安時代の溝の中で特に溝SD7069を例にとると，SD7069よりも溝幅

は狭くなるが，まったく重なる形で古墳時代前期頃の溝がつくられており，さらにその溝の下にも溝幅を狭くし，まったく重なる弥生時代後期の溝がつくられていた。数百年の間のある時期時期に溝を造っては埋まり造っては埋まりとするくり返しがあったようである。

ＳＤ7069などは平安時代でも早い時期にその機能を失い埋まる，あるいは埋められる結果となるのであるが，その溝の上に，礫床墓のみならず竪穴住居もつくられているのである。

今年度が初めての検出となったものに畑跡がある。平安時代のものと考えられるが，他遺構に切られながらもかろうじて残った部分が３ケ所で確認されている。



第12図　平安時代の畑跡

中世以降　多くの掘立柱跡が検出されているのみである。

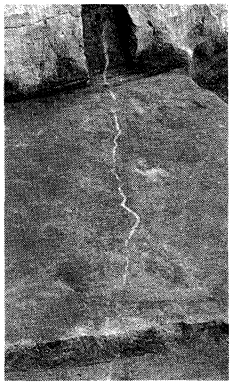
以上時代ごとに遺構を中心に遺物にもふれながらみてきたが，ふれることのできなかった玉類・石鏃，そして墨書や刻書土器についてみてみたい。

玉類については碧玉製を含む管玉や，土製を含む勾玉，そしてガラス小玉等が多く出土しており，また石鏃も黒曜石製のものを中心に縄文時代晩期から弥生時代中期のものであろうと考えられるものが多く出土している。玉類や石鏃は弥生時代や古墳時代の遺構や検出面のみならず，平安時代の竪穴住居跡を中心とする遺構の埋土中に混入した状況での出土をみせている。

墨書・刻書土器については，そのほとんどが平安時代のものである。昨年度も多く出土した「𠀋」が今年度も多く出土し，朱墨で記された「𠂉」，刻書では「更」？と記されたものなどがあった。

篠ノ井遺跡群での噴砂跡について　地震の多い長野県では，沖積地の各地に地震跡が刻まれているはずである。液状化現象による噴砂が県内で確認され，しかも全国最大規模の指摘を受けたのは，篠ノ井遺跡が最初である。

弥生後期～古墳前期におよぶ複合した住居跡の床面を引き裂いて，稲妻状を呈した４cm巾ほどの砂脈が，東北東―西南西方向へ一直線に走る。地表下430cmほどの粗粒砂層から，徐々に亀裂を広げて上昇しており，砂脈の深さは350cm，地表下80cmほどで途切れている。ここが当時の生活面と思われ，９世紀後半ころを中心とした須恵器を含む地層が覆っている。地震跡から地震の発生を，「日本の活断層」（1980）によって検討すると，仁和３年（887）の長野市茶臼山付近を震源とするM7.4の激震があげられる。遺跡周辺には強い地震動が生じていると思われ，この地震によって液状化現象が生じ，噴砂を起こしたものと考える。



第13図　噴砂跡

（関　全寿・西山克己・本田　真）

（4） 窪河原遺跡

所　在　地：更埴市大字雨宮字窪河原

調 査 期 間：平成２年６月６日～６月15日

　　平成２年10月22日～12月25日

調 査 面 積：トレンチ区1,650㎡　調査区3,850㎡（計5,500㎡）

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防上および自然堤防間の低地

時代と時期：平安時代末期，中世，近世

遺跡の特徴：中世の墓域，生産域，居住域，近世の水田など

主な検出遺構

遺構 / 時期	竪穴状遺構	墓	溝	焼土址	畝状遺構	土坑	水田	その他
平安末								遺物分布地点１
中世	2	9	5	15	26	84		炭化物・焼土分布範囲10
近世							1	水路１

主な出土遺物

土器・陶磁器：珠洲焼・常滑焼甕，青磁・白磁碗，山茶碗，かわらけ・すり鉢，近世陶磁器

石　製　品：砥石，火打ち石　鉄　製　品：釘，鏃，鎌　銅　製　品：銭貨ほか

骨 格 製 品：笄（こうがい）　　そ　の　他：人骨，馬骨

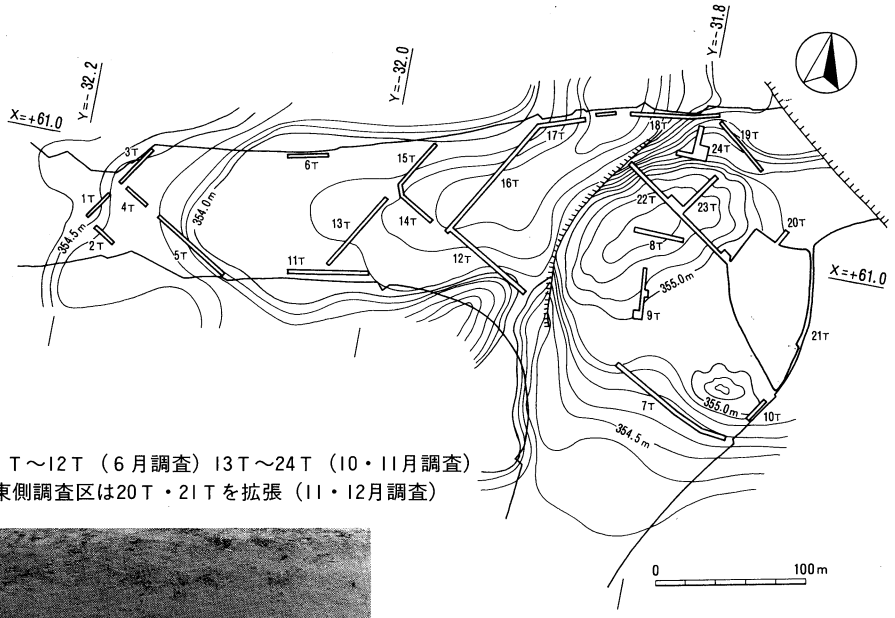
本年度の調査は第14図に示したとおり，東側の微高地上の一部と西側の低地部におよんだ。

低地部では水田土壌の存在や畦畔状遺構が第11～16トレンチで認められ，いずれも洪水砂によって埋没していた。水田面直下の層からは18世紀代と思われる染付け碗の破片が出土している。また，水田面をおおう洪水砂の下部が1847年の善光寺地震の際に起きた？と思われる噴砂によって切られている。以上の点から，この地の水田開発は18世紀後半～19世紀前半にはじまったと考えられる。それ以前の遺構は確認されなかった。

「かないじま」と呼ばれる西側微高地の形成は，基盤の砂礫層中に磨滅した須恵器や黒色土器の破片が混在していることから，平安時代のある時期までは自然堤防の形成段階にあったと考えられる。基盤層直上の砂層上面では12世紀後半と思われる珠洲焼の甕が単独で出土したが，遺構は認められなかった。

13世紀後半～14世紀には安定した自然堤防となり，墓址，竪穴状遺構，畠址などが見つかっている。明確な建物址はなく，村落の中心からは離れた場所であったと予想される。注目されるものでは，焼土址や炭化物の分布が多く認められ，周囲に銭貨や陶磁器片の散乱が見られた点である。焼骨の出土はなく，火葬墓に伴う火葬施設とは考えにくいが，こうした状況での青磁，白磁，銭貨の出土は，この場が特殊な意味を持っていたことを示していよう。

第９・22トレンチからも焼土址や墓址が見つかっており，東側調査区の状況と考え合わせると，これらの遺構は微高地上の広範囲にひろがる可能性が強い。遺跡の性格をとらえる上でも，今後の調査が待たれるところである。　　（寺内隆夫）

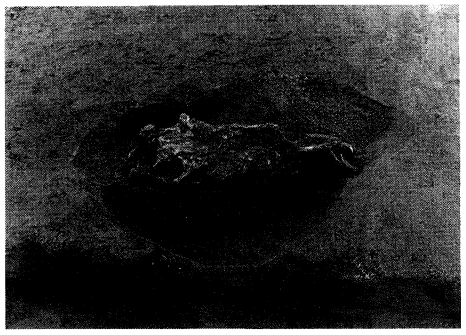


※　1T～12T（6月調査）13T～24T（10・11月調査）
東側調査区は20T・21Tを拡張（11・12月調査）

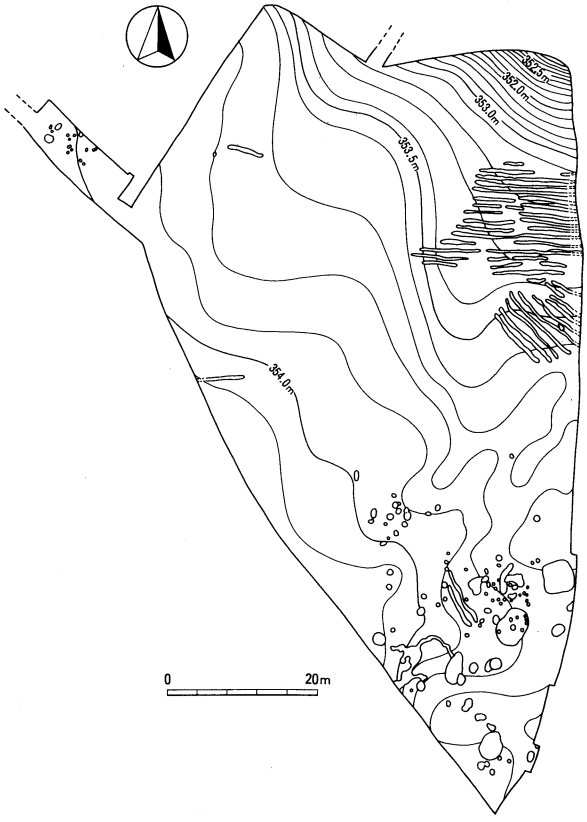
第14図　窪河原遺跡全体図

第15図　12トレンチ畦畔状遺構

第16図　火葬墓（SK40）の集石



第17図　馬頭骨（SK17）の埋葬



第18図　東側調査区の中世面遺構配置図

(5) 松原遺跡

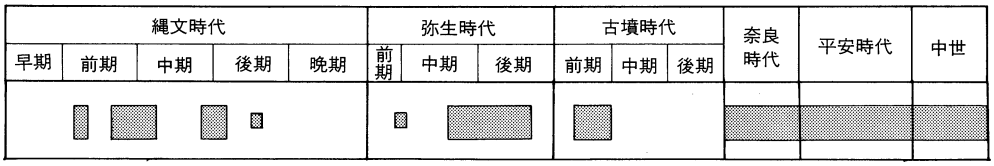
所　在　地：長野市松代東寺尾

調 査 期 間：平成２年３月５日～平成３年２月14日

調 査 面 積：36,800㎡（総計110,110㎡）

遺跡の立地：千曲川の自然堤防上

時代と時期：第19図



第19図　松原遺跡の時代と時期

遺跡の特徴：縄文時代前期から中世まで一貫した集落

主な検出遺構

第２表　松原遺跡の時代・時期別遺構一覧

	中世	奈良・平安時代	古墳時代前期	弥生時代後期	弥生時代中期後半	縄文時代中期後半～後期前半	縄文時代前期末～中期初頭	計
竪穴住居跡	0	436	12	24	239	11	16	738
掘立柱建物跡	14		0	0	0	0	0	14
墓	56（内34火葬墓）		0	0	35	0	0	91
土坑	多数		6	6	多数	72		多数
溝	96		4	0	多数	0		多数
井戸	多数		0	1	0	0	0	多数
焼土址	0	0	0	0	43	93		136
遺物集中区	0	0	0	0	0	29		29

主な出土遺物　（平成元年度を含む）

第３表　松原遺跡の時代・時期別出土遺物一覧

縄文時代前期中葉	土器（有尾式）
縄文時代前期末～中期初頭	土器（諸磯ｂ式，ｃ式，十三菩堤式，五領ケ台式） 石器（石鏃，石錐，石皿，石匙，打製石斧，磨製石斧，砥石，石核，剝片，砕片） 滑石製装飾品
縄文時代中期後半～後期前半	土器（加曽利Ｅ式～堀ノ内式，三十稲場式） 石器（石鏃，打製石斧，剝片，砕片）
縄文時代後期後半	土器（加曽利Ｂ式）
弥生時代中期前半	土器
弥生時代中期後半	土器（栗林式） 石器（磨製石斧，石庖丁，石剣，磨製石鏃，打製石鏃，剝片石器） 木製品（高杯，竪櫛，部材，杭） 玉類（管玉，勾玉） 骨製品及び骨類（腕輪，獣骨） 自然遺物（トチの実，ドングリ，クルミ，桃，自然木）

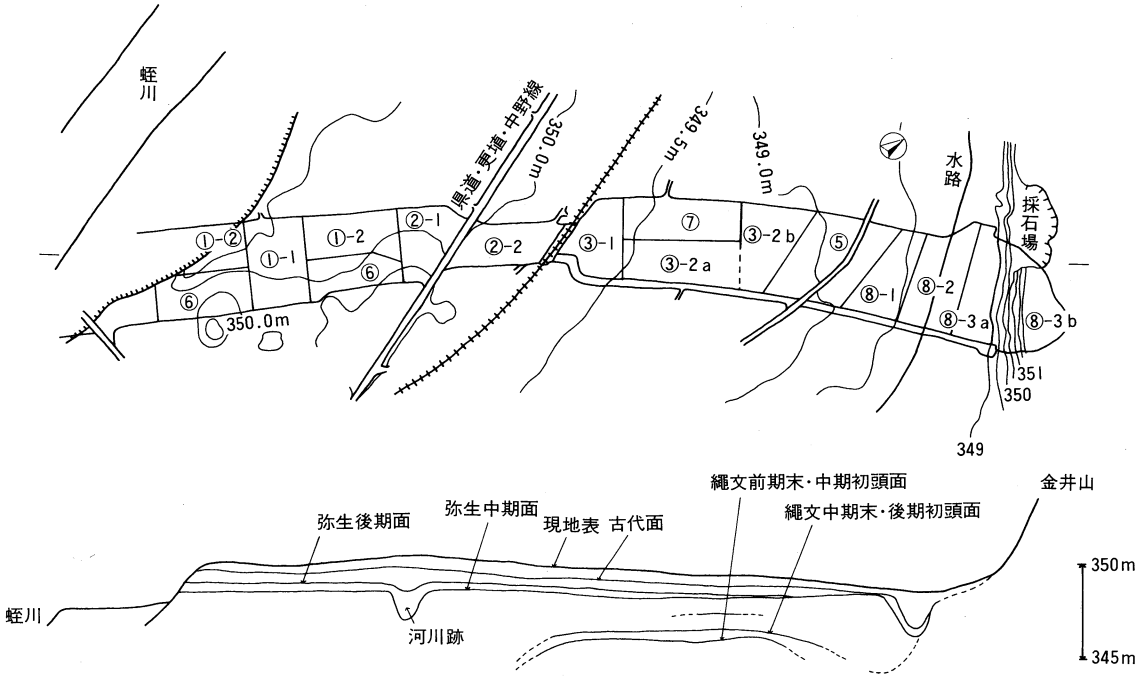
弥生時代後期後半	土器（吉田式，箱清水式），玉類（ガラス小玉，管玉），鉄器（不明）
古墳時代前期	土器（４世紀後半）
奈良・平安時代	土器・陶磁器（８～12世紀，土師器・須恵器，灰釉陶器，緑釉陶器，白磁） 鉄器（鍬，鎌，刀子，紡錘車，斧，馬具，他） 銅製品（帯金具，他） 石製品（砥石，サイコロ，丸鞘） 木製品（人形，斎串，部材，杭，他） 鍛冶関係資料（羽口，鉄滓） 鋳造関係資料（鋳型，坩堝，他） 自然遺物（トチ，ドングリ，桃，クルミ，炭化穀物）
中世	土器・陶磁器（13～16世紀，土器皿・内耳鍋・瀬戸美濃系陶器・常滑，珠洲，青磁，白磁，青白磁，山茶碗） 鉄製品（刀子，ノコギリ，他） 石製品（石臼，石鉢，砥石，他） 木製品（曲物，下駄，部材，杭，他） 漆器（椀）

遺跡は，善光寺平南東部の，北側を金井山，南側を通称愛宕山によって限られた，千曲川右岸の三角形の自然堤防上に位置する。西側は，地蔵峠より流れ出て松代扇状地を形成する蛭川によって削られている。この一帯の標高は350mほどで，平坦な地形である。現在は一面に果樹園，畑地が広がっており，今後上信越自動車道開通に伴って，大規模な開発が及ぶ可能性があり，遺跡の破壊が懸念される。平地に張り出した周囲の尾根の頂部には金井山城，寺尾城などの中世後半期の山城が存在する。また金井山には，大室古墳群金井山支群と呼ばれる古墳（横穴式石室）が10基程度みられる。その内容については，未調査の部分が多くはっきりしない。

今年度の調査で，現地形の確定したのは中世と考えられ，縄文時代以来，大きく地形が変化している。松原遺跡を舞台とした人間活動の歴史は，この地形の変化と大きく関っていたと思われる。本遺跡を評価するうえで地形の変化を把握することが重要な意味をもつと思われる。

調査は，急がれる工事工程との兼ね合いから，異例ともいえる３月５日より開始した。当初３面（古代・中世，弥生後期，弥生中期後半）の調査の予定で開始した。ところが４月18日に③－１地区で，中世井戸跡の断ち割り調査実施中，弥生中期後半面下に２ないし３の縄文時代の面を確認した。また９月になり，金井山西南斜面（⑧－３ａ）で五輪塔を伴う火葬墓群を検出した。このような調査面の倍増，調査区の拡張という事態に直面し，調査計画の変更を余儀なくされた。そのため11月末時点で調査を終了する予定が大きく遅れ，昨年度同様厳冬期の１・２月の調査を実施したが，⑧－３ａ・ｂと⑦区縄文前期末・中期初頭面が来年度に残ることとなった。

基本層序は第20図に示したようである。その分布は第20図に示してある。古い時期からみると，当初巾の狭い千曲川？の自然堤防が形成され，その上に縄文前期末・中期初頭の集落がつくられる。その後徐々に自然堤防の規模は拡大し縄文中期末・後期初頭に再び人間活動がみら



第20図　松原遺跡の全体図

れる。若干の時期をおいて，わずかな人間活動の痕跡が認められるが，大規模な洪水に起因する可能性が高い厚い砂に覆われ，現在に近い地形が形成される。そして弥生中期の大規模な集落が形成される。しかしその時点では，現在みられているような川巾30mを越えるような河川が幾筋か台地を開析して流れている。再び厚い砂に台地全体が覆われ，河川も金井山直下（⑧－3）を流れる1本を除き，埋没してしまう。その上に弥生後期の集落がつくられ，中世までいくつかの断絶は認められるが継続する。このように，地形は千曲川との深い関わりによって形成されたと考えられる。

次に各時代をおって，その内容を概観していきたい。

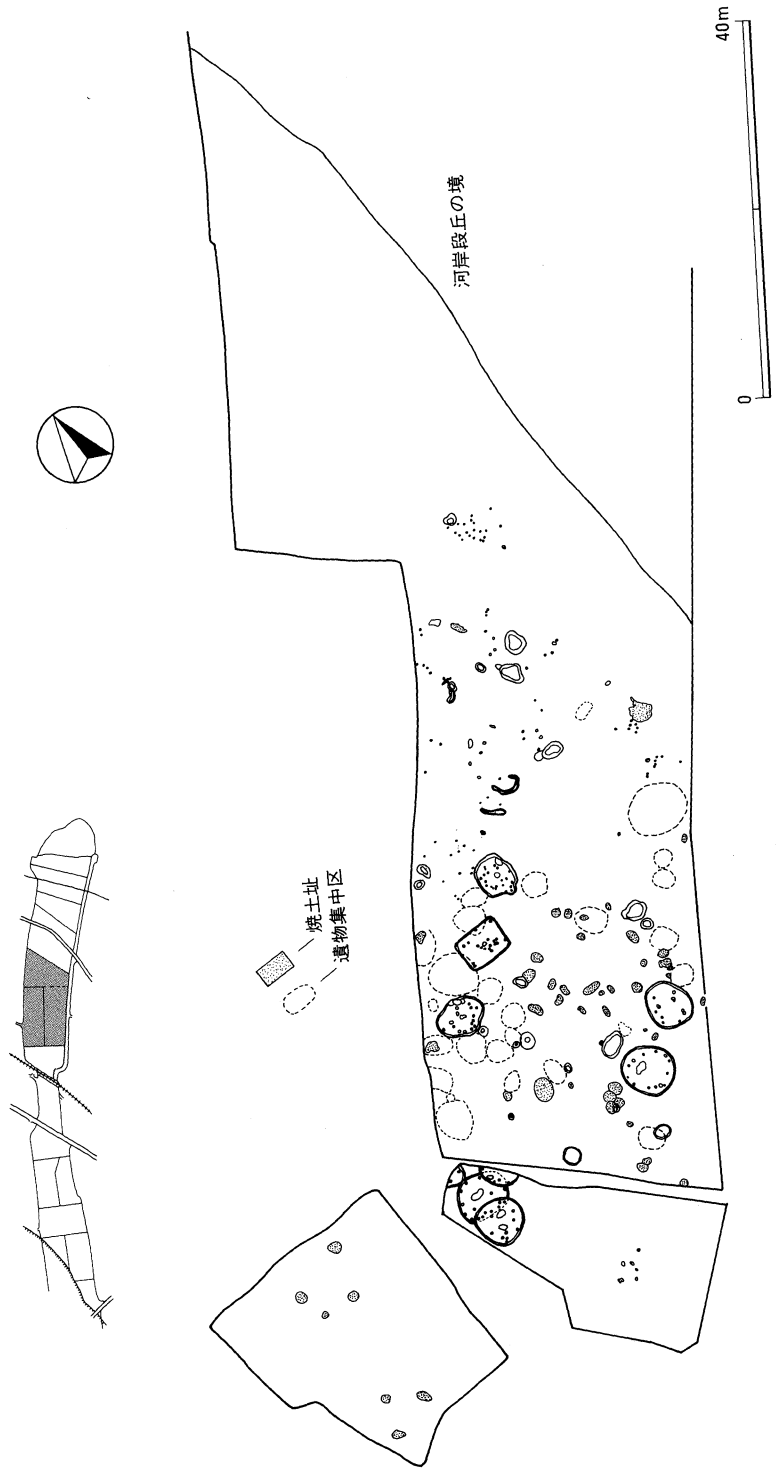
縄文時代前期中葉

⑧－2区の金井山よりに包含層が分布する。河川跡によって削られているため，今年度は狭い範囲の調査にとどまっている。主体は⑧－3区に展開すると思われる。包含層は厚さ30cmほどの間層を挟み上下2層に分けることができる。上層からは諸磯b式の土器を伴う竪穴住居跡，下層からは有尾式の土器が比較的多くみつかっている。来年度の⑧－3区の調査が期待される。

縄文時代前期末・中期初頭

遺構は③－1，③－2，⑦区の小規模な自然堤防上に展開する。内容は竪穴住居跡，土坑，多数の焼土址によって構成される。また黒曜石の石核，剥片の集中が何ケ所か認められ，石器製作址の存在が想定できる。層としては前期末から漸移的に移行する。

遺物としては多数の土器（諸磯c式，十三菩堤式，五領ケ台式）・石器が発見されており，該期の資料のほとんどない善光寺平の空白を補うものとして注目される。来年度⑦区の遺構の



第21図　縄文時代前期末～中期初頭の全体図（1 ：800）

第22図　縄文時代中期末～後期前半全体図（1：800）

集中する部分の調査が残っており，全体像が明らかになると思われる。

縄文時代中期末～後期前半

遺構は前期末・中期初頭期より若干規模の拡大した自然堤防上に立地する。遺構は竪穴住居跡，土坑，焼土址等のほか，多数の柱穴が検出された。それらは小規模な円形配置のほか，長大な二本一組の縦走配置，一本一組の縦走配置などがみられる。それらは相互に関連した意図的な配置と思われる。柱穴のほとんどには杭が打ちこまれたような柱痕が残るものが多い。現在までこのような類例はほとんどみられず，また上部構造が不明のため今後の検討が必要である。遺物は少量である。このほか河川跡埋土より加曽利B式土器が出土している。

弥生時代中期後半

今回対象となった用地内の調査は終了した。隣接地を長野市教育委員会が調査を行った結果，該期の遺構は更に南北に拡大するものと思われる。縄文時代より一貫して居住した小規模の自然堤防は，この時期には千曲川の影響によって埋没し，現地形とほぼ同じ地形となっている。ただ巾30mほどの河川がこの段階には調査区内を蛇行して流れており，遺物が多量に投棄されたり，杭が打たれたりしており，ゴミ捨場など生活に密接に関連した場として利用されていたと思われる。

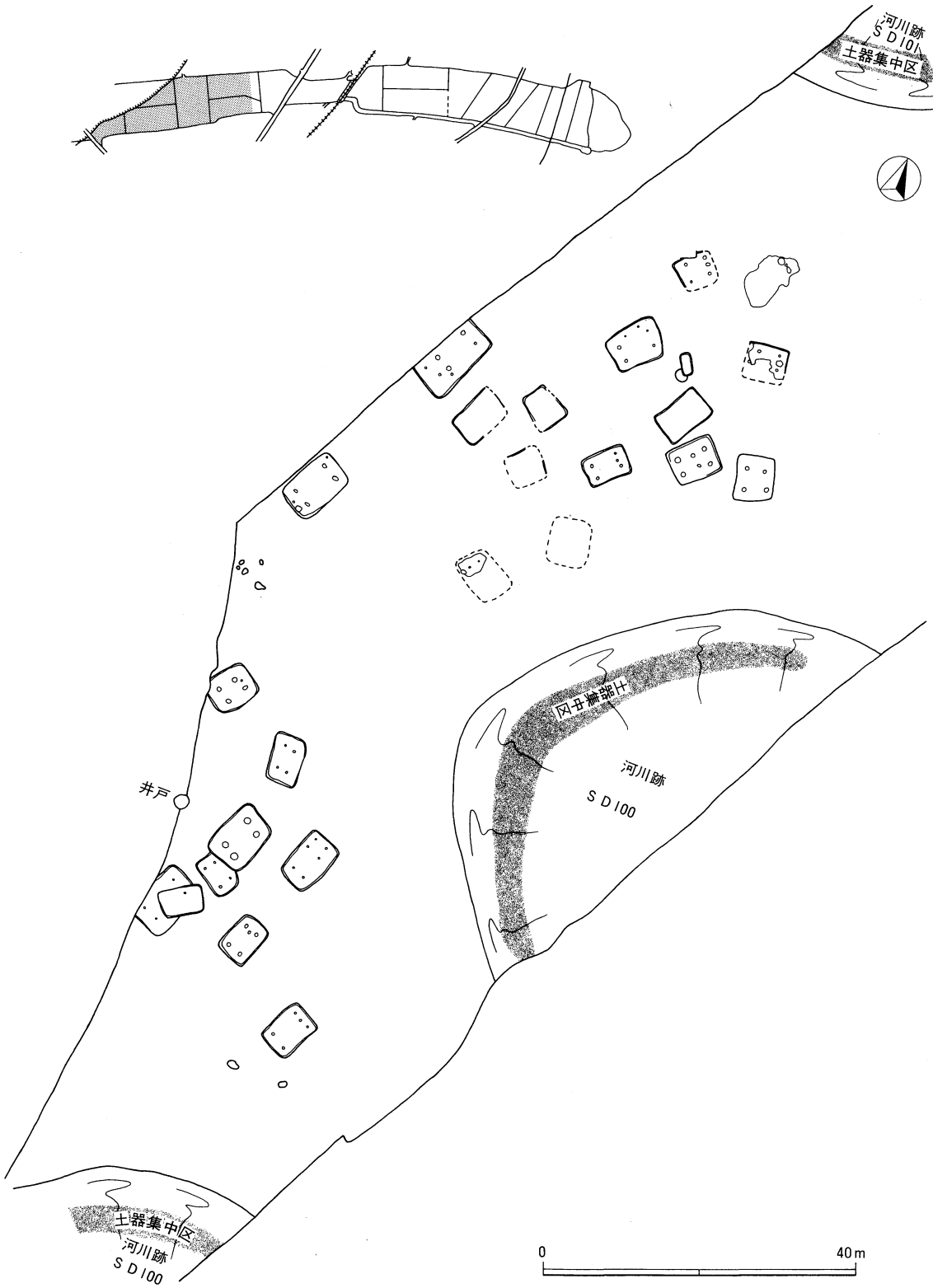
遺構は密度の差はあるが，ほぼ調査区全体に分布する。空白部分は市道63号線の東部分にみられ，ここで集落が大きく区切られた可能性が高く，金井山山麓部分と分かれそうである。集落内は竪穴住居跡，土坑，円形に巡る溝，柱穴，巾の狭い溝などによって構成され環濠あるいは，河川跡などによって囲まれている場合が多い。それらがいくつか重複しており，いくつもの時期に渡って集落がつくられたと思われる。また墓としては，礫床木棺墓，木棺墓，土壙墓があり，それらは溝などの施設で囲まれることはないが，何ケ所かに集中する。竪穴住居跡の形態は円形，隅丸正方形，隅丸長方形，楕円形（小判型）と様々であり，重複関係がみられることから，時期差と考えられる。このほか注意しなければならない遺構として，円形に巡る溝がある。径6～12mで巾30～50cmの溝が円あるいは楕円に巡る。一角に二本単位の柱穴が掘りこまれ，また中央部には炉跡を残す場合が多く，平地住居の可能性がある。

遺物は土器・石器などが多数出土している。土器は人面付土器をはじめとして，多量に出土しており，栗林式から吉田式の間におさまる。該期の資料としては質量ともに充実しており，これからの研究を進めていくうえで重要となろう。石器の特徴としては，磨製石器（石庖丁，石斧，石鏃，石剣）が充実している。該期の石器組成を考えるうえで，貴重な資料となろう。この他木製品として注目すべきものに，河川跡より出土した，朱塗木製高杯と竪櫛がある。特に後者は，ヒゴ状の歯部を紐でとじ朱漆で塗りかためてあり，装飾はみられない（口絵）。

弥生時代後期

台地状を流れている河川は埋没を開始し，凹状になっている。その部分より多数の遺物が出土しており，引き続きゴミ捨場として利用される。遺構の分布は蛭川よりに集中し，調査区南部は長野市教委の調査でも該期の遺構は検出されておらず，調査区北側に集落は展開すると思われる。

第23図　弥生時代中期前半の全体図（1：800）



第24図　弥生時代後期の遺構図（１：600）

集落は竪穴住居跡，土坑，溝，井戸などによって構成される。竪穴住居跡は長辺６～12m，短辺４～６mを測る比較的規模の大きな長方形のプランを呈する。

遺物は箱清水式の土器が多量に出土している。

古墳時代前期

地形は河川跡の埋没は進むが，ほぼ前時代を継承する。埋没した凹地にはやはり多数の土器が投棄される。遺構は竪穴住居跡，土坑，溝がみられ，分布は前時代より東よりになる。竪穴住居跡は一辺４～10mの正方形のプランを呈する。

遺物は４世紀後半の土器が多数河川跡より出土している。中には石田川併行期の小型器台，小型丸底土器，赤塚分類Ｃ類のＳ字甕がある。特に小型器台の量の多さ，赤彩の小型精製土器が多いのが特徴である。

奈良・平安時代

台地上を流れていた河川は，金井山山麓部の一筋を除き埋没が完了し，その上には遺構がみられるようになる。遺構は竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑，井戸，溝，墓などがあり，蛭川辺りから金井山山麓まで，密度の差はあるが切れめなく分布する。空白の時期をおいて８世紀前半に①－２・①－１・⑥区と②－２，③－１区の２ヶ所に集落がつくられはじめる。９世紀にはいり集落は拡大し，蛭川辺りから③－２区まで広がる。10世紀には広がりがピークに達し，ほぼ全域に竪穴住居跡が分布するようになる。11世紀にはいり規模は縮少をはじめ，12世紀代には蛭川よりの①－１・２，⑥区の範囲になる。遺物としては８～12世紀の多量の土器が出土しており，善光寺平の該期の研究を進めるうえで，重要な資料となろう。このほか昨年度出土した鋳造関係資料も注目される。

山麓を流れる河川跡からは，平安時代の土器が多数出土したほか，斎串，人形，曲物などの木製品もみつかっている。遺構としては梁状遺構がある。

中世

耕土直下で検出される。そのため，それ以前の遺構との区別が難しい。遺物の分布などからみてほぼ調査区全体に広がる。遺構としては，掘立柱建物跡，柱穴群，溝，井戸，馬の埋葬遺構，墓などがある。遺物は少ないが，それらの年代をみると，13世紀から15世紀までの巾を持つので，これが集落継続時期と思われる。遺物としては，土器・陶磁器のほかに，井戸の中より曲物，下駄，ノコギリ，刀子などがみつかっている。

今年度新たに調査着手したのが⑧－３Ｂ区である。当初⑧－３Ａ・⑤区などで五輪塔が何点か出土しており，近隣に寺院に関連する遺構の存在は予想されていた。４月当初金井山西北斜面（⑧－３ｂ）を踏査した結果，石垣が何段にもわたり造られていることが確認され，さらに五輪塔も表採された。このことからこの斜面に五輪塔と関連した遺構が存在することを予想して調査にはいった。調査の中で石垣は近世以降の畑作に伴うことがわかった。石垣の中及び裏込めに多数の五輪塔が転用されていた。石垣を除去すると巾の狭い平坦面が人為的に造りだされ，そこに火葬骨の集中が30ケ所以上検出された。それらは蔵骨器などを伴っていないが，円形あるいは方形にかたまっており，曲物や箱などの木製の蔵骨器の存在が予想される。他に石

第25図　古代～中世の全体図（1：800）

室あるいは基壇状の遺構も検出されている。出土した五輪塔の部分は200点を越える。またそのほかに，宝篋印塔，層塔がわずかにみられる。

おわりに

本遺跡は平成元年・2年度に渡り調査を進めてきた，当初予想されなかった縄文時代の生活の痕跡まで確認することができた。来年度の調査をもって終了するが，整理作業の成果が期待される。

(6) 北平１・２号塚

所　在　地：長野市東寺尾
調 査 期 間：平成２年12月５日～平成３年３月　日
調 査 面 積：1,000㎡
遺跡の立地：雨飾山からのびる尾根上
時代と時期：中世
遺跡の特徴：中世の塚，古墳
主な出土遺物：古銭

遺跡は松原遺跡を西に望む，雨飾山からのびる尾根上に存在する。この尾根の西先端には寺尾城，北に分岐する尾根には金井山城が存在する。塚および古墳は，松原遺跡との比高差100mほどで標高450m前後の小さな頂部及び尾根上に位置する。一帯は山林となっており，今回上信越自動車道建設の盛土工事のため削平られることになり，調査を実施することとなった。

調査は当初10月より実施する予定であったが，工事工程の遅れのため12月より実施することになった。途中，降雪や凍結のため調査は困難をきわめ，年内に完了することはできず調査を一時中断し，３月に再開した。今年度対象としたのは塚２基で，山頂の古墳は来年度調査の予定である。

１号塚は尾根の屈曲点に，２号塚は西よりの尾根の平坦部に位置する。調査はトレンチをいれ土層観察の後，面的に下げた。その結果両者ともに構築方法は同じで，方形に整地し，周囲の土を掘り，平らに積み上げたことがわかった。１号塚にはその痕跡が周囲に凹地となっているのが観察できる。内部や表面に施設等は認められなかった。遺物としては，２号塚の盛土の中より洪武通寶が１点出土したのみである。構築時期は室町時代以降と思われ，周囲に存在する金井山城，寺尾城との関連が考えられる。　（原　明芳）

第26図　北平１号塚の全景

第27図　北平２号塚の全景

(7) 村東山手遺跡（むらひがしやまて）

所　在　地：長野市松代町大室字村東山手

調 査 期 間：平成２年４月５日～同年10月12日

調 査 面 積：15,500㎡

時代と時期：縄文草創期～中世

遺跡の立地：奇妙山西麓の崖錐末端

遺跡の特徴：縄文中期末から後期前半の集落

主な検出遺構

遺構／時期	竪穴住居跡	土坑	配石	焼土跡	墳墓	溝	土器集中
縄文	12	65	1	9			
弥生							
古墳	3	16		4	1	1	1
奈良	(平安)				(奈良)		(弥生)
平安							

(註)
1．縄文時代の住居跡は敷石住居で、内１軒は廃屋墓として用いられている。
2．縄文時代の土坑には石棺墓１基、人骨を伴う土壙墓を含んでいる。

主な出土遺物

土　　器：縄文草創期・早期・前期・中期・後期土器，弥生後期・古墳・奈良・平安時代土器

石　　器：石鏃，打製石斧，磨製石斧，石匙，掻器，石錐，石錘，敲石，凹石，磨石，石皿など

土・石製品：土偶，小形土器，土製円板，石棒，棒状石製品，垂飾品

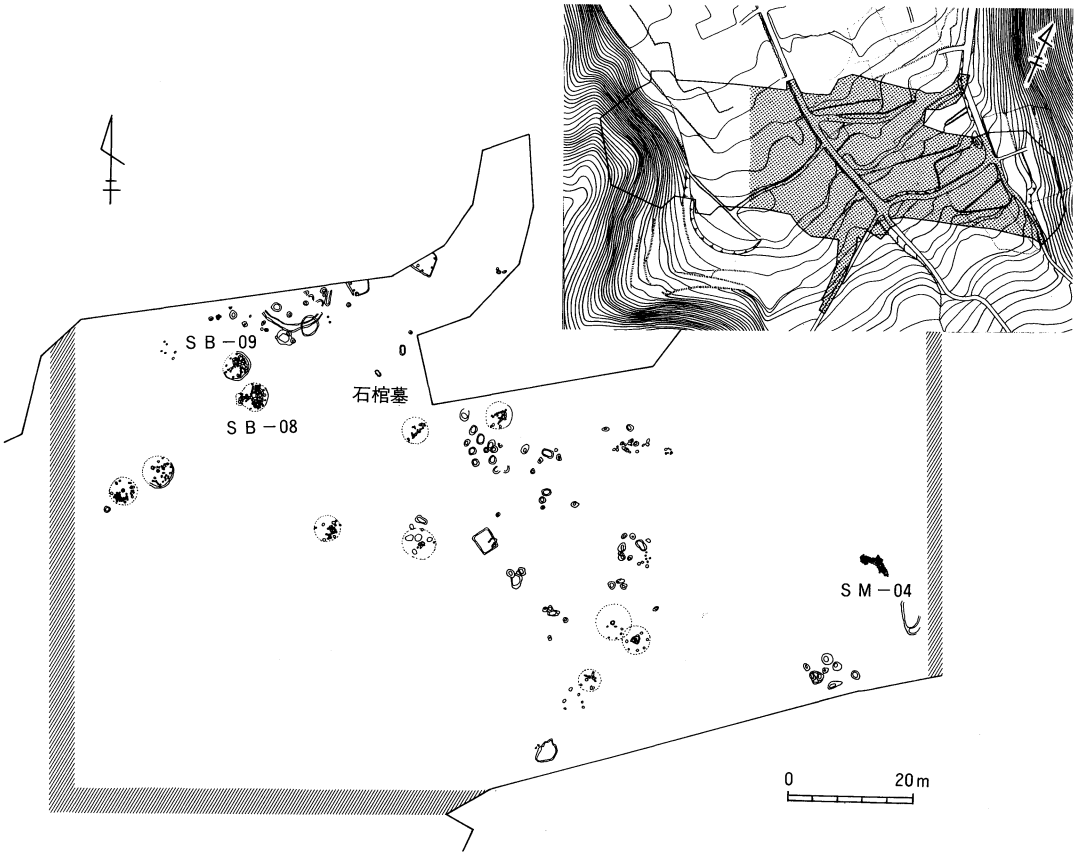
そ　の　他：人骨，獣骨

村東山手遺跡は千曲川右岸松代町大室地籍に所在し，奇妙山系の山麓に発達した崖錐地形の末端部に遺跡は立地する。遺跡範囲は尾根と尾根にはさまれた谷間の北向き斜面地で，その中は尾根状に伸びる幾分高い地区と低く沢状になった地区が組み合わさっている。前面の千曲川自然堤防上には大室集落が形成され，遺跡との間には後背湿地が広がっている。大室古墳群大室谷支群は本遺跡に重なり谷奥から山腹に広がる。

遺跡は縄文時代を主体とした集落遺跡で，弥生時代以降平安時代までの各時期の遺構も僅かずつ検出された。

縄文時代の遺構　草創期から後期までの遺物が出土しているが，遺構は中期末から後期前半が中心である。該期の敷石住居址は尾根状に伸びる高位面からやや下った地点にあり，石棺墓や土壙墓などは高位面に構築されている。このような遺構分布からみると集落中央部に「墓域」をもった環状集落が想定される。該期以外では早期の土坑が１基検出された（第28図）。

SB－08は，4.5m程の主体部に小さな張り出し部を持つ柄鏡形の住居址である（口絵・第29図）。敷石は銀杏の葉状を呈する。方形に区画された張り出し部から幅の狭い連結部敷石が通路状に伸び，主体部は奥壁に向かって鈍角で直線的に開く。連結部と張り出し部には一対ずつの立石が敷石内に立てられている。



第28図　村東山手の遺跡の調査範囲（1：5,000）と遺構配置図〈主要部〉（1：12,000）

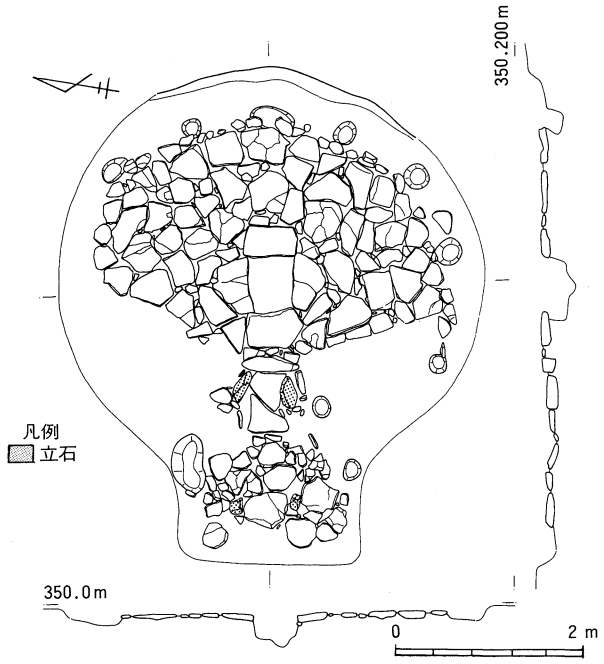
SB－09は住居廃絶後に廃屋墓として用いられている。仰臥屈葬の姿勢で抱石をされた人骨が炉の脇で検出された（第32図）。敷石は炉周辺と周縁部に僅かに残存しているだけである。住居廃絶後床面の敷石を片付け遺体を埋葬したのであろう。埋葬された遺体は壮年くらいの男性と思われ，遺存状態は良好である。

石棺墓は長軸1.2m，短軸0.6mの方形に板状の礫を組んだもので（第31図），長軸では2枚，短軸では1枚の礫を用いている。人骨の遺存状態はあまり良くなく，頭骨・大腿骨などが一部残存していただけである。土壙墓は直径1～1.5mの円形で土壙底面に遺体を埋葬している。

早期の土坑は不整円形で底面よりやや浮いて鵜ケ島台式土器が出土した。

弥生時代以降の遺構　奈良時代の墳墓は大形礫を石室状に組み，中に2遺体以上の人骨を埋葬している。床面には小形の礫が敷かれている。平安時代の住居址は3軒検出された。ほかに，時期不詳ではあるが，円形に巡る溝や土坑も検出されている。

出土遺物　縄文草創期の土器は，口縁下に「ハ」の字形爪形文が施文される。善光寺平では初見である。縄文後期ではSB－08から注口土器の完形品が出土しているほか，後期前半堀之内式期の土器が多数出土している。石器では石鏃など各種石器と共に偏平な川原石を用いた石錘が約30点出土しており，生業活動の一端が窺い知れる。古墳時代前期ではS字状口縁台付甕が出土している。



第29図　村東山手遺跡8号敷石住居跡（1：80）

第30図　8号住居跡の注口土器

第31図　村東山手遺跡の石棺墓

まとめと課題　以上の調査概要をまとめると以下のようになる。

①　崖錐地形末端に形成された縄文草創期から中世まで断続的に営まれた複合遺跡である。

②　遺跡の主体は縄文中期末から後期前半期の集落で環状を呈する居住域と，その内側に占地された墓域が明らかにされた。

③　石室状の施設を持った奈良時代の墳墓が検出された。

遺跡は調査範囲外にも広がるが，その主要部は調査されたこととなる。その結果，縄文時代後期前半期を中心とした集落が居住域と墓域を含めて明らかにされたことは意義深い。また，出土遺物も後期前半掘之内式期などがまとまっている。北信地方とりわけ善光寺平では当該期の遺跡は希薄であるので，今後の整理作業により該期に好資料を提供することとなろう。

奈良時代の石室をもった墳墓は当時の葬制の一部を明らかとした。大室古墳群との関係なども含めて今後の課題としたい。　　（広瀬　昭弘）

第32図　村東山手遺跡9号敷石住居跡の廃屋墓

第33図　村東山手遺跡の奈良時代墳墓

(8) 大室古墳群

所　在　地：長野市松代町大室村東山手448ほか
調 査 期 間：平成３年４月20日～６月20日
調 査 面 積：600㎡
遺跡の立地：大室谷扇状地の末端部分
時代と時期：古墳時代後期
遺跡の特徴：大室古墳群大室谷支群の末端部に位置する積石塚と土石混合墳
調査古墳の概要と出土遺物

昨年に続いて長野県埋蔵文化財センターと明治大学考古学研究室が合同で，平成２年４月16日から７月21日まで調査を実施した。本年は昨年からの継続調査となった第23号墳のほか，新たに第21号墳・第24号墳・第25号墳の３基を発掘調査した。

このうち第23号墳は，道路下に入っていると考えられた北側裾部の確認に主眼をおいたが，北側の裾部は検出することができず，道路を造る際に破壊されたことが想起されるほか，当初から山際のこの部分に裾石巡らせていなかった可能性が考えられる。また裾部と推定される部分の地山面に大きな礫が含まれており，この礫を裾部として利用した可能性もある。いっぽう内回りの石組みは石室主軸から90度山側へ振った部分まで比較的良好に残っていた。またさらに内側で確認された石室裏込も一部で積み重ねている状況が把握され，石室正面側は裏込基部に大きな礫を配しその上に積み上げているものの，背面では簡略し乱雑に積み上げていることが確認された。また盛土も正面部分で版築状に固く叩き締めていものの，このように北側で裾石を検出するという当初の目的は達成できず，古墳の径が（主軸）13.2m×（直交）17.8mであることからわかったに過ぎなかったが，古墳正面側と背面側で墳丘の造りが異なることが確認された。

第21号墳は墳域内に家屋が建てられていたため，石室の極く一部を残して既に失われていた。墳径は10m程度と考えられ，残存している石室北側側壁を見ると袖石を持った横穴式石室で，現在羨道と玄室を合せて5.18m残っている。遺物は石室内から鉸具・刀子・鐔・針状鉄器が出土したほか，墳丘の外より方頭大刀のものと思われる鞘尻金具が見つかった。また墳丘盛土内から土師器の甑が潰れた状態で出土したほか，椀・杯も検出された。以上の遺物から考えて７世紀の後半に造られたと考えられ，将軍塚古墳（第244号墳）が営まれた後の時代のものであることが判明した。

第24号墳も第21号墳同様径約10mの古墳で，胴張りをした全長5.74mの両袖形横穴式石室を主体部としてした。石室はかなり壊されていたが，玄室内から発見された少なくとも２体の人骨から，盗掘を受けていないものと考えられる。しかし石室内には全く副葬品が存在せず，このことから本来この古墳には副葬品が入れられなかった可能性が高いものと思われる。また墳丘羨門付近から土師器や須恵器が出土したが，これらの土器から古墳の年代は７世紀末から８世紀前半頃と考えられ，次に述べる第25号墳や第23号墳・二号墳といった古墳より後で造られ

た，古墳時代終末期のものであることがわかった。

第25号墳は径13m前後の古墳で，横穴式石室は袖石がない無袖形のものである。全長6.05mと第23号墳には及ばないが，玄室の大きさは殆ど同じで4.34mを測る。床面は2枚確認され，上の面は盗掘の被害を被っていたが，下の玉石を敷いた面からは馬具片（轡1・鉸尾金具3・留金具2）・耳環11・鈴片1・刀子3・玉類（切子玉・管玉・棗玉・臼玉・丸玉・小玉）合計600点以上などが出土した。また骨・歯片も多数検出されており，分析途中の段階だが6人前後が葬られていたのではないかと推定される。このほか羨門山側で約350片の土器片が確認され，土師器高杯や須恵器甕を中心とした伴献が想起されるが，この付近から鉸具1点が，さらに遠く山側の墳裾部から鉄鏃が見つかっており，これらの遺物が2枚あった床面のどちらに帰属するのか検討を必要とする。この古墳は鉄鏃・馬具や土器から6世紀後半に築造されたものと考えられるが，多少継続されて使用されたものと思われる。またこれら多量に出土した遺物の中で注目しなければなちないのが，径1㎜足らずの黄色のガラス小玉（粟玉）と土師器の短脚三方透かしの高杯で，前者は奥壁近くからまとまって出てきたものの，殆ど報告例は見られず何に用いられたのか分らないものである。また土器のほうは4点全て破片で，杯部が失われていたが，須恵器を模倣したものと思われ，うち1点は2段透かしをしている。あまり類例は知られていないが，今後製作地や祖形を検討していく必要があろう。

（大塚　初重・小林　三朗・安藤　道由）

第34図　大室24号古墳の横穴式石室

(9) 川田条里遺跡

所　在　地：長野市若穂川田寺前2990番地ほか

調 査 期 間：平成２年４月２日～12月20日

調 査 面 積：53,580㎡（総計136,160㎡）

遺跡の立地：縄文時代晩期～近世

遺跡の特徴：弥生時代中期～近世に至る水田跡，中世の居住域

主な検出遺構

	水田区画の枚数	大畦	杭列	溝・流路	土坑	掘立柱建物	その他
縄文				1			
弥生	約　200	3	7	3			方形周溝基・集石・井戸・土器集中
古墳	約　1,450	4	6	4			道路状遺構
奈良平安	約　480	6		6			
中・近世	22			8	3	2	石列・石垣・柱穴・暗渠
不明	2		1	2	1		

主な出土遺物

土　　器：縄文土器，弥生中期・後期，土師器，須恵器，内黒土器，中・近世陶磁器

石　　器：磨製石斧，石庖丁，石鏃，石臼，茶臼，石鉢

木 製 品：農耕具，田下駄，下駄，曲物，建築部材，弓，漆器，杭

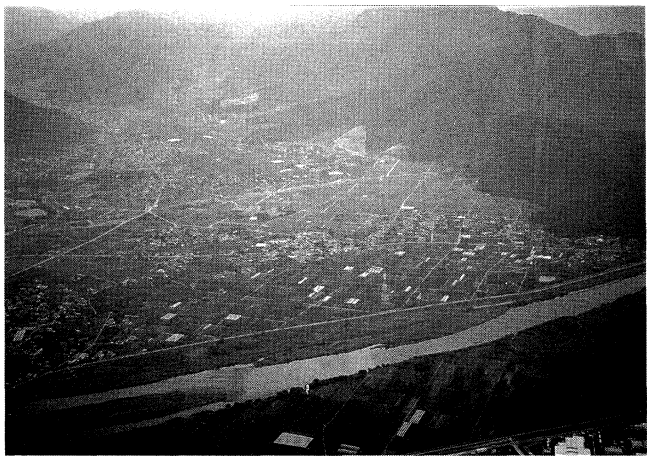
石 製 品：勾玉

金属製品：青銅鏡（珠文鏡），銭貨，笄

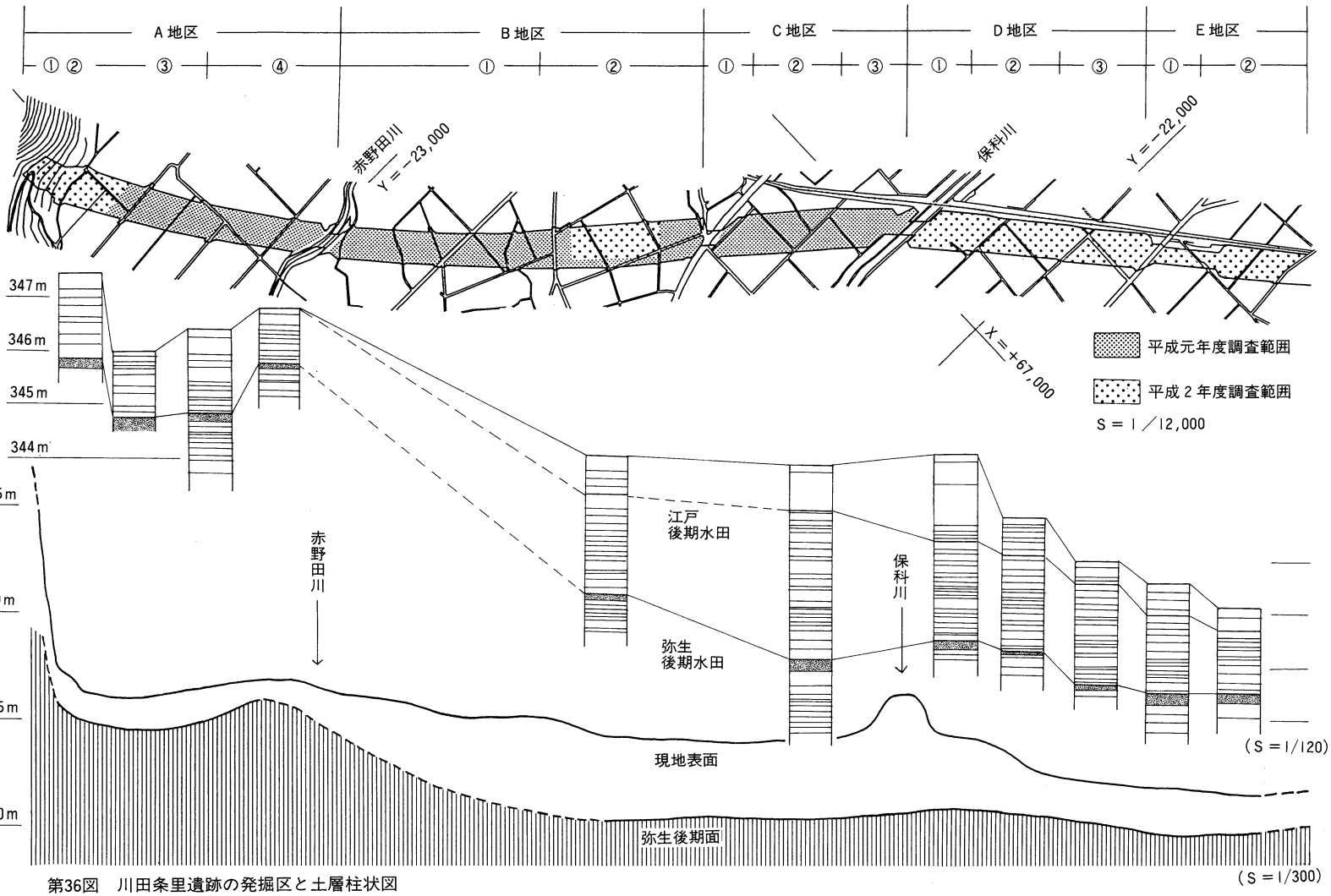
自然遺物：クルミ，ヒョウタン，モモ，獣骨，歯

遺跡の概要と調査の経過

川田条里遺跡は，長野市の東部，若穂川田に位置し，千曲川右岸の後背湿地に展開する水田跡を主体とした遺跡である。現景観が条里的地割をとどめていることから，条里遺跡として認識されていたが，過去の調査は，1982年に長野市教育委員会によって圃場整備事業に伴う緊急調査が行われただけであった。そのときの調査はトレンチによるものであったため，現水



第35図　川田条里遺跡の全景



第36図　川田条里遺跡の発掘区と土層柱状図

田下に埋没水田の存在を確認こそすれ，水田区画のあり方，時期など詳細な点は明確にはなっていなかった。遺跡の範囲も，トレンチを入れた範囲の赤野田川左岸部分しか確認することができなかった（今回地区設定したA地区がそれに当たる）。

上信越自動車道建設に伴う発掘調査が1989年度から当埋蔵文化財センターによって実施されたことによって，遺跡の範囲も後背湿地全体に広がることが明らかになり，埋没水田の時期も，弥生時代中期・後期，古墳時代前期・後期，平安時代，中世，近世と実に数多く発見できた。

本年1990年度の調査は，昨年度からの継続調査で，本年度の調査をもって調査対象面積はすべて終了した。調査地区はA～Eまで5地区に分けている（第36図）。遺跡の西端大星山山麓の斜面部から赤野田川までをA地区，赤野田川・保科川の間をB・C地区，保科川右岸，隣接する集落遺跡春山B遺跡との境までをD・E地区とした。昨年度はA・B地区の一部及びC地区を調査し，本年度はA・B地区の残りの部分及びD・E地区を調査した。

A地区の本年度調査区は地形的にみて3区分される。山の斜面部・山際の平坦部・低地部であり，特に山際の平坦面では中世末期以降の掘立柱建物や石垣が調査され，中世以降の土地利用のあり方などを考えるうえで貴重な資料といえよう。

B地区は，昨年度すでに隣接するC地区などを調査していたので，ほぼ全面にわたって水田が検出されることが予想されていた。弥生時代から平安時代までの8面の埋没水田を調査した。木製品も田下駄・建築部材・弓など多数出土している。

D・E地区は本年度初めて着手する地区で，前年度に簡単な試掘をしただけで，水田土壌があることは確認されていたものの，その詳細は明確にはなっていなかったため，先行してトレンチを入れ，土層観察，水田調査面の決定をまず最初に行った。地表面でははっきりと観察ができなかったが，弥生時代の末頃から古墳時代の前半期にかけての微高地の裾部分が調査区にわずかずつではあるが検出された。住居址こそ発見されなかったが，方形周溝墓，道路状遺構，土器集中区など，水田と集落の間の空間を検討するのに成果を上げた。（大竹憲昭・黒岩　隆）

調査の成果

A地区

この地区は原地形から山の斜面にあたるA1，山際の平坦地のA2，水田になっている低地のA3西に細分した。しかし、A2とA3西は中世末以前においては連続する地形であることが判明した。遺構が構築される以前の地形はA2，A3西共に低地であり，ここに扇状地から流れ落ちる流路が埋土に多量の礫を含んで，尾根上の盛り上がりを形成して

第37図　川田条里遺跡A2地区の中世遺構全景

いる。なお，流路の１本から縄文土器片を出土している。この地形ではまず，弥生時代に溝がつくられ，古墳時代には溝や杭列，畔が確認されるようにＡ２，Ａ３西共に水田化されていると考えられた（口絵）。次には平安時代の土師器を出土した水田が確認されたが，ここでは現在の道と合致する大畔が確認された。なお，大畔は位置を少しずらしながらも最低３回の構築が確認された。この後，中世末に至り，Ａ２に整地土が盛られ，現在に見るような地形になったことが推定された。この整地面上では掘立柱建物や石垣が確認されたが，整地上の下にも石垣が数列検出され，整地は複数回行われたと推定される。中世末以後の水田については洪水土で覆われることがなく，検出された溝や暗渠のみである。（市川隆之）

Ｂ地区

昨年度Ａ・Ｂ・Ｃ地区でのトレンチ調査，面的調査の成果により，本地区は現条里景観こそ遺存していないが，弥生時代から今日まで水田域として展開していたと推定された。それも土砂の堆積が厚いＣ地区に隣接するため，同様な状況（複数の埋没水田の存在）が予想された。調査の結果，水田面最下層の弥生中期水田が地表面下約3.5mで確認され，その間，奈良・平安時代３面，古墳時代３面，弥生時代２面の計８面を面的調査し，各時代の水田構造を捉えた。なお中世・近世の水田跡は，昨年度Ｃ地区での調査で水田区画を捉えているため面的調査は実施せず断面観察にとどめた。

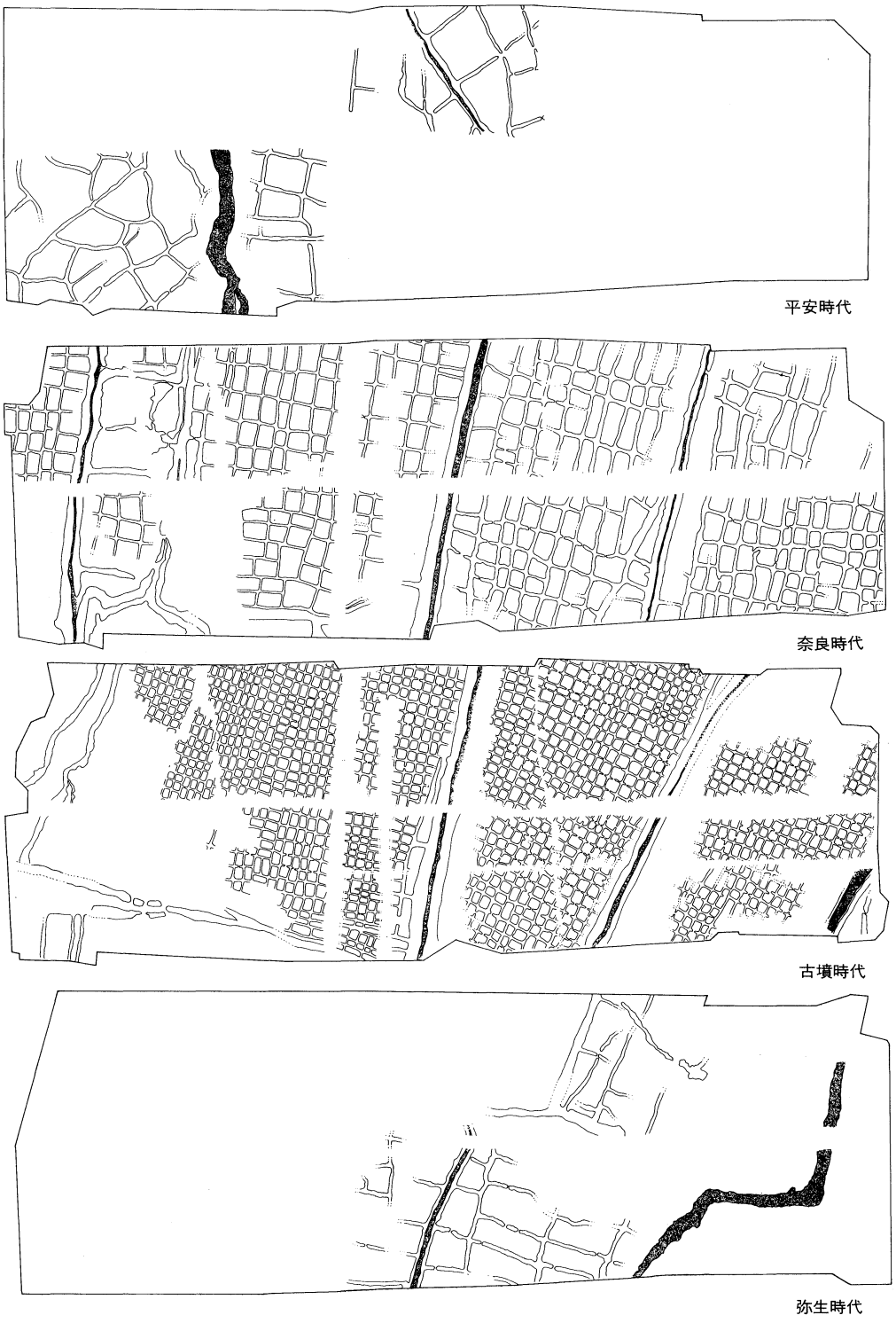
本報告では水田跡を時代ごとに概観し土地利用の変遷をたどることにするが，水田跡の年代については検討中であり，また珪藻分析・花粉分析などの科学分析の結果が得られていないため，現在までの見解を披瀝し報告することを前記しておく。

弥生時代（第７・８調査面）

水田遺構は調査区中央部から東側にかけた地域で検出された。検出遺構は２時期に分けられ，大畦内より栗林Ⅰ式の甕が出土した中期水田は北側で，水田面上面より箱清水式の土器片が出土した後期水田は南側で確認され，両者とも千曲川系と推定できる灰色の砂層により被覆されており，砂層堆積部分より畦畔が検出された。

遺構が確認された範囲が古墳面と比べて狭いため水田構造を細部にわたって明確にできないが，中期水田は芯材（木材）を多用する大畦と小畦，後期水田は水路を伴う大畦と小畦により水田区画が形成されて，小畦による区画は長方形が基本であった。

第38図　川田条里遺跡Ａ・Ｂ地区の全景
（左上　大星山古墳群，右下　調査区）



アミ部分は水路と予想される

第39図　川田条里遺跡Ｂ地区における水田区画の変遷

弥生中期・後期水田は，開発時に自然地形に大きな手を加えず地形の傾斜（基盤勾配）を利用して灌漑したことは，大畦と小畦が傾斜方向に直交・平行し配され，一筆ごとにわずかな段差がみられた状況から推測できる。また両者を比較すると，後期水田には大区画内に配水・給水をする施設と護岸施設を伴う灌漑用の水路が完備されていることから，水田経営の基本的認識は中期と変わらずとも弥生後期には水田開発技術の向上を指摘できる。

古墳時代（第４・５・６調査面）

古墳時代に帰属する水田で最も残存状況がよく，広範囲にわたり検出された第６調査面について記すこととする。

後期と考えられる本水田は調査区西端側を除きほぼ全域で水田区画が検出された。区画が確認されない西端は微高地状の高まりを呈す箇所（B_1地区）に当たるため，本水田域は高まりより東方に展開したと推定される。水田上部は薄い砂・ピート層に覆われており，洪水で埋まった埋没水田であった。検出された畦畔は弥生水田と同じく地形の傾斜を利用した区画で，基本的な区画は水路を伴う大畦を約30～40m間隔で配し，傾斜と同方向に細長い大区画（第１次区画）を形成したと推測でき，大区画内は小畦が大畦の方向に沿って「小区画」水田をつくったといえる。大区画の形成は生産の基本的単位を認識し水田経営を実施した現われと解釈できる。本水田で特記すべきは第１に大畦と小畦の機能分化が明確化しその結果顕著な「小区画水田」が出現して，それに関連して本水田一筆が一辺約1.5mと極めて小さいこと。第２に本地区では古墳水田以降，水利形態が同じ様相を示すため，土地利用の基本的形態がこの時期に形成されたことがいえる，以上２点である。

奈良・平安時代（第１・２・３調査面）

本期に帰属する水田跡を３面調査したが，ここでは第１・２調査面を平安水田，第３調査面を奈良水田と呼称する。

奈良水田は調査区全域で検出され，厚い黒色のピート層に覆われ埋没していた。またピート層上部に砂層が堆積している状況は，自然災害を被る以前に放棄したことを想定できる。基本的な水田区画は水路を伴う大畦が古墳水田とほぼ同位置で灌漑方法も類似するため，水田一筆の形状・規模に若干ことなりがあるが，土地利用の方法，水利形態に大きな変化はなく，むしろ本水田は古墳水田の大区画を踏襲したと推定される。反対に両水田の相違点を見出すと，この時期には水田域の拡大がみられ，微高地状の高まり方向にも広がっている。地形は西側から東側に傾斜し西側の高い部分を古墳水田は利用していないことに対し，本水田は整然とした「小区画」こそみられないものの大畦による不規則な配置がされている。この状況は地形の凹凸，特に高まりにあまり手を加えなかった古墳水田と高まり部分を滞水施設（註１）に利用した水田の違いを表出し，地形に多くを依存した水田から地形を改変する水田への移行などの水田開発技術の向上がここでもみられる。

また平安水田は下層水田を覆うピート層上層の水田で，東側を除く調査区のほぼ全域に展開し，場所によっては３～４回のつくり替え（復旧）が認められた。画的調査は砂層で被覆された箇所を重点的に実施したため畦畔を検出した範囲は水田域の一角に限られた。水田跡は砂で

構築された畦畔が認められ，復旧水田は砂層を耕作土に用いた状況が把握できた。さらに南側では水田一筆が方形を呈さず，不規則に走る状況がみられ，傾斜地では水田区画がみだれる一例を加えることとなった。本水田と奈良水田が明らかに違う点は畦畔の方向が東西南北を向き，大畦と小畦の機能分化が明確化しなくなることであり，傾斜を改変し畦畔の方向と水利形態まで変える背景が存在したことを指摘でき，本水田が経営された9世紀頃にB地区で大幅な土地利用の改変があったと推定される。

水田区画と土地利用の変遷（本地区調査成果のまとめ）

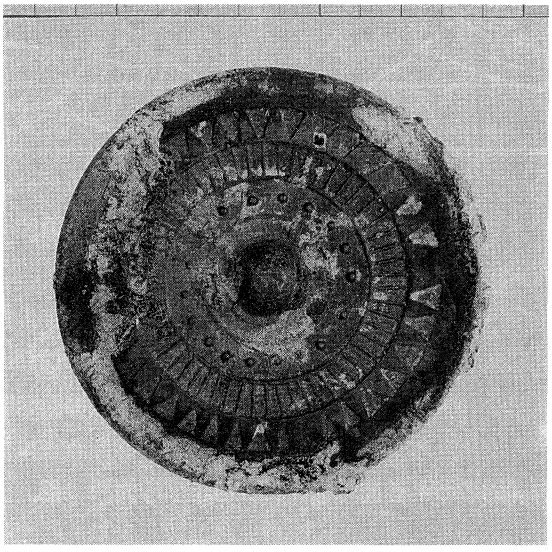
本地区の水田跡は基本的に自然地形の傾斜（基盤勾配）に依存する水田経営であるが，その依存度が時期を経るごとに減少する傾向がある。これは当然の事象であるがここで具体的に検証してみたい。

弥生時代は地形の凹凸に左右され反面これを限りなく利用する水田で，大畦・小畦は細かな傾斜変換点に配され，いまだ両者の機能分化は明確にされず大区画の形成は普遍化していないと考える。しかし古墳時代でも特に6世紀段階になると大畦による大区画の形成が水田開発時の第一義的な要素となることは，大区画が単なる灌漑用の意味でなく生産の単位をも意味することになり，さらに地形を一部改変する土木技術と大畦に芯材として自然木を用い，木製品・建築部材を転用する行為も5・6世紀に顕著に現われる事実は，水田開発の主体が地域の首長層に担われ水田経営が支配圏の一部に取り込まれた結果ではなかろうか。このことから所謂「小区画水田」出現は農業技術的側面に起因しながら水田経営の組織化による所産といえないだろうか。古墳水田と奈良水田をみると大畦が踏襲され同じ水利形態を示すなど共通する要素があり，出土遺物でも時間差があまりないことは，古墳水田埋没後比較的短期間で奈良水田がつくられたと推定され，奈良水田開田時には古墳水田の区画を踏襲しつつ，西側に水田域が拡大し古墳期には使用しなかった地形の高まりに大畦を配す状況は水田技術の向上がみられる。水田の区画方法をみると大きく①弥生時代から奈良時代の水田，②平安時代の水田の2者に分けられ，平安水田は古墳時代ほど大畦と小畦に機能分化が明確化しなく，大区画の面積が広大になる傾向がある。さらに地形の傾斜と水田経営は本来密接な関係にあるが，9世紀段階に土地利用・水利形態を大幅に変えてまで水田区画（大畦）を東西南北に向かせる要因が存在したと考えられる。

以上B地区の成果を水田区画の変遷を中心に概観した。今後検討すべき課題は多く，そのひとつに検出された水田跡と周辺の土地利用の関係を把握し，弥生時代から現在までの景観史をつくり上げ，結果として水田跡を歴史叙述の資料に位置づけることがある。

もうひとつは水田耕作の問題である。近年仙台市富沢遺跡の調査で多くの事象を指摘している（註2）が，なかでも疑似畦畔B（水田直下の自然堆積層の高まり）が今回の調査で顕著に確認された。さらに水田の連続耕作では下層水田は上層水田の耕作により破壊されることが従来原則とされていたが，B地区では意図的に連続耕作による下層水田の破壊状況を捉える調査も実施しその結果，上層水田の区画とことなる下層水田の畦畔を検出したことに代表されるが従来の原則論に再検討を必要とさせた事象がある。

以上のことは成果のほんの一端で，8面の水田跡の画的調査を実施した本地区の成果は全国各地で行われている「水田遺構」の調査に寄与する点が多い状況を考えると，本地区の成果は水田遺跡の調査・研究の指針になるようにまとめる必要があろう。　　（河西克造）



第40図　川田条里遺跡出土の珠文鏡

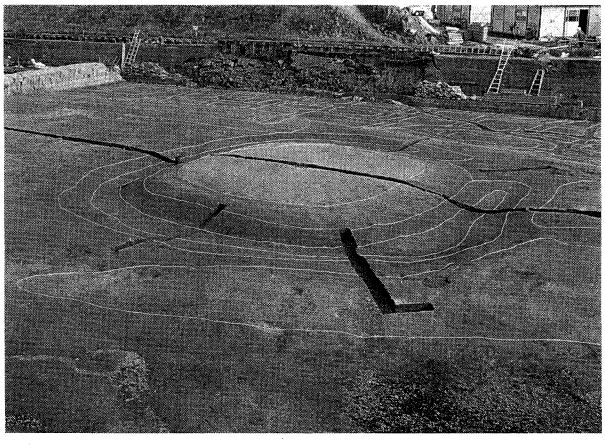
〔註〕1．この区画が滞水施設的性格を有するか否かの最終的判断は，面的に採取した試料でのプラント・オパール分析の結果を待ちたい。

2．斉野裕彦他　1987『富沢―第15次調査報告書―』で擬似畦畔の形成過程について考察しているほか，最近では『第3回　東日本の水田跡を考える会―資料集―』でまとめている。

D・E地区

本調査地区は保科川右岸から隣接する集落遺跡である春山B遺跡までの間であり，特に春山B遺跡に近いE地区において，水田域と居住域の境界部分の調査が当初予測されていた。ところが面的な調査の結果，微高地の裾部は予想以上に広域にわたっていることが明らかになった。

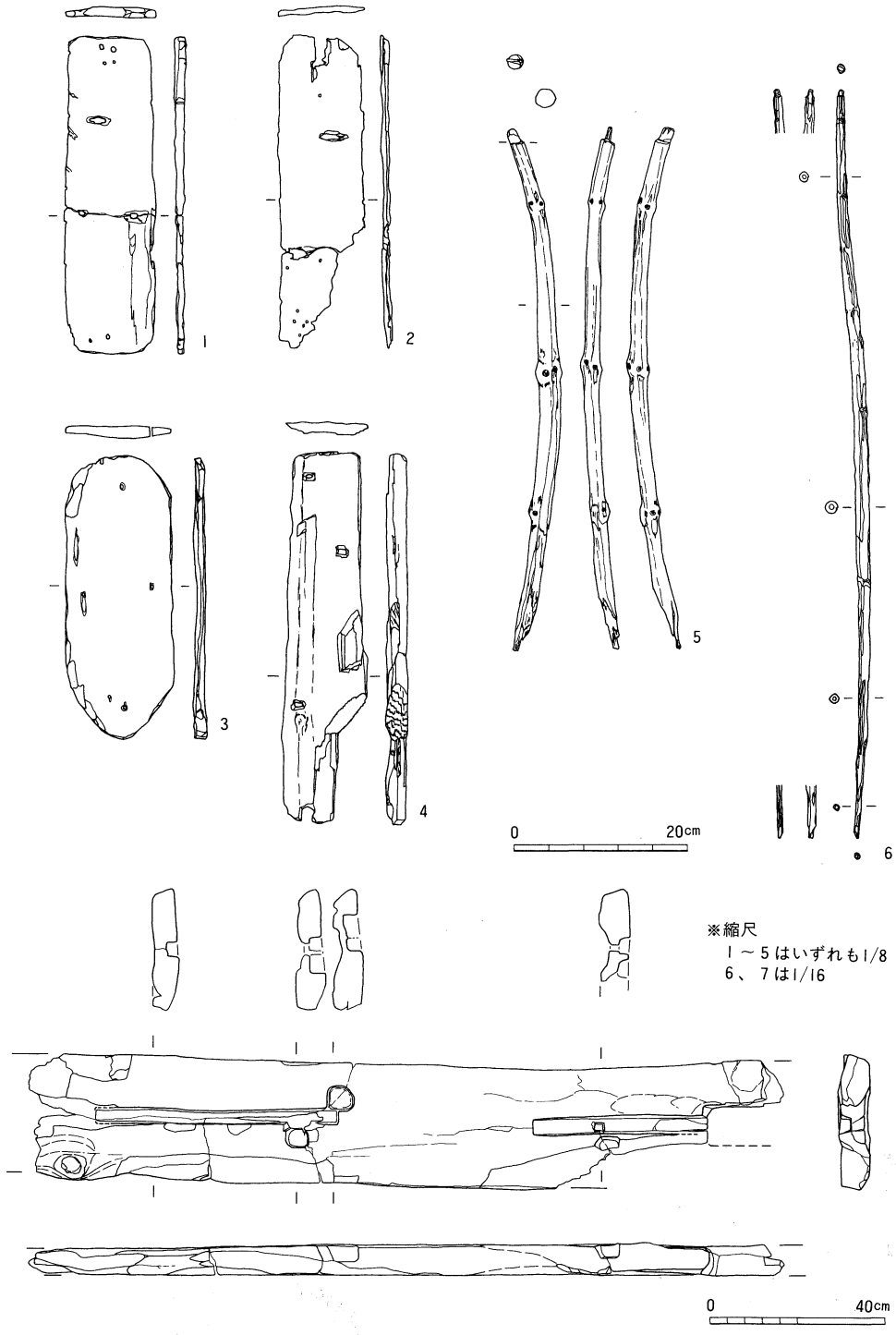
今回の調査範囲に限っていえば，土地利用の変遷ということで考えれば，3つの段階がとらえられる。まず第一段階として，弥生水田の開田時期である（口絵）。ほぼ調査範囲全域にわたって水田域が展開していたと考えられる。第二段階として，弥生時代の後期のある段階から，千曲川に沿うように微高地が展開したようである。その時期は古墳時代まで続いたようである。第三段階としてまた全面に水田域が展開する時期である。この第二段階の微高地の裾部について少しふれてみる。



第41図　川田条里遺跡D地区の方形周溝基

この微高地の裾部では住居址こそは発見できなかったが，約20ケ所の土器集中区，井戸址，方形周溝墓，道路状遺構などの遺構が発見された。

発見された方形周溝墓は，一辺約17m，周溝は曲線的で，方形と円形の中間的な平面形状を呈する。陸橋は，南コーナーに1ケ所みられる。特筆すべきは，約70cmの盛り土を確



第42図　川田条里遺跡出土の木製品実測図（1～4．田下駄　5・6．弓　7．建築部材）

認することができたことである。内部主体は中央部に１ケ所で、深さ約40cm，長幅186×(42)cmの土壙を掘り，土壙底面には木質が確認された。その木質の直上からは，ガラスの小玉も３個発見されている。時期は，伴出土器などの検討がまだなされていないが，弥生時代後期末と考えている。

道路状遺構は，やはり弥生時代から水田域と微高地との境界に蛇行しながら走り，そこからは青銅鏡（珠文鏡）なども発見されており，何か特別な祭祀のあったことも考えられる。いずれにしても水田域と居住域との境界を考える上で重要な資料と考えられる。（大竹憲昭・川崎保）

まとめと今後の課題

弥生・古墳時代水田の検出について

県内における本格的水田発掘の事例は高速道建設に伴う緊急調査ではあるものの，石川条里，そして川田条里の調査に端を発するといっても過言ではあるまい。特に川田条里遺跡でとらえられた弥生時代の水田区画，いわゆる小区画水田はおそらく県内初の事例であろう。当該期の水田開発技術・水田経営の方法と具体的事例をもとに検討することができるようになったといえるのである。

条里の問題について

遺跡の名称からも，条里的地割がどこまでさかのぼれるのかというのが調査課題のひとつでもあったわけであるが，実際には坪境にあたる部分は主要道路と重なり遺構の破壊が大きかったり，調査不可能な場所もあり，確定的な資料を得ることは今回できなかった。しかし，現在と同方向（東西南北に畦畔がそろう）の水田区画を持つようになるのは平安時代までさかのぼれそうであることが確認された。これを条里的地割と結びつけるにはまだ多くの検討を必要とするであろうが，ひとつの指針を得ることができたといえる。

木製遺物について

川田条里遺跡から発掘された木製遺物の量は２年間で4,000点を超える。その多くは杭であるがそれを除いた中で注目されるのは建築部材である。当時の建物研究の上にも貴重な資料となろう。

遺跡の範囲について

川田条里遺跡は２年間で10万㎡以上の面積を調査したことになるわけであるが，これだけ広大な面積を調査したのももちろん県内初であろう。しかしながら，川田地区に広がる後背湿地全体からすれば調査範囲は１本のトレンチをいれたにすぎない面積である。従って今回の調査で得られたことも，部分的なことであるということを十分に考慮にいれていかなくてはなるまい。（大竹憲昭）

⑽ 大星山古墳群

所　在　地：長野市若穂川田大字下和田字虚空蔵山2,419ほか
調 査 期 間：平成２年４月５日～10月５日
調 査 面 積：2,000㎡
遺跡の立地：奇妙山系から北行する尾根支脈の頂部
時代と時期：古墳時代前期～中期，中・近世
遺跡の特徴：古墳時代前・中期の古墳

主な検出遺構

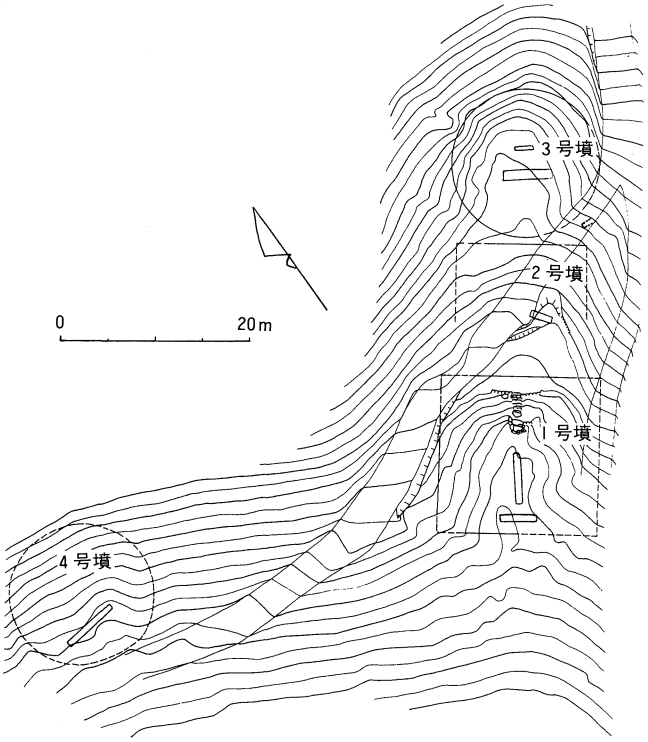
時　代	遺構
古　墳	古墳４（竪穴式石室５・合掌形石室１・組合式箱形石棺１）
中・近世	火葬墓３・石祠１

主な出土遺物
土　器：古墳時代前・中期土師器
鉄製品：鉄剣・直刀・刀子・鉄鏃・鉇・のみ・弓飾鋲
その他：砥石・ヒスイ製勾玉・滑石製臼玉・ガラス小玉・金銅製くちなし玉・石製紡錘車

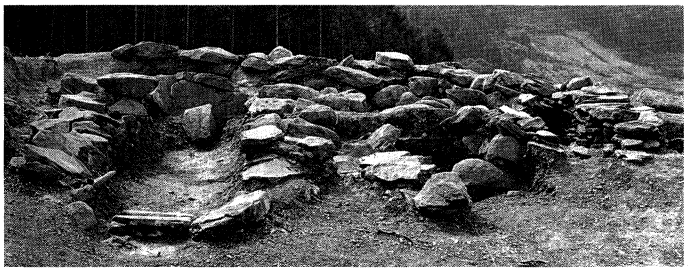
古墳群は大室谷と保科川扇状地を画して北行する尾根から東に派生する支脈上にある。標高395m前後，直下の水田面からの比高40mほどである。この尾根は保科川・赤野田川扇状地と千曲川・犀川の後背湿地の境に突出しており、若穂地域の水田・集落を一望できる（口絵）。

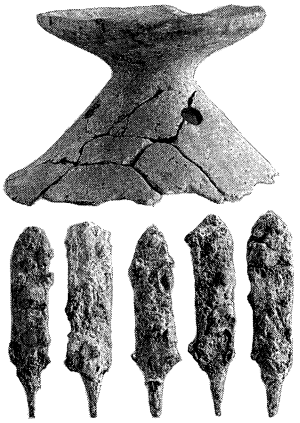
東山古墳群・大室18号墳はそれぞれ１kmほどの距離であるが，間の尾根にさえぎられて直接目視はできない。４基の古墳の年代は今のところ４世紀末から５世紀後半の間に考えておきたいが，以下，古い順に概要を記す。

３号墳　径17mの円墳。第１主体は長さ約4.7m，幅１mで床は舟底状で粘質土をたたき締めている。木棺を安置した後にある程度埋め戻し、その後石積みと埋め戻しが併行して行われたようである。石積は二段ほどで厚みのある礫塊を用い一部に平石を立てている。竪穴式石室というより石槨状の施設に見える。床から鉄剣１・鉄鏃５・鉇１・弓飾鋲１・勾玉（ヒスイ）１・小玉（ガラス）33・砥石１，主体部上から器台１，墳丘から少量の土師器片を出土し



第43図　大星山古墳群の全体図（1：800）





第44図（上）大星山３号墳の石室（左：第Ⅰ主体，右：第２主体）
第45図（右）大星山３号墳第Ⅰ主体部出土の器台・鉄鏃

た。床の形状などから棺は長さ4.4m，幅0.9mの舟底状を呈するものであったと思われる。墓壙は６×5.2mの土壙で岩盤のあるところはそれを利用し、盛土上になるところは大礫を充塡している。その結果できた長さ5.2m，幅2.5mの二次的墓壙に石積みが行われる。

第２主体は割石小口積で，長さ1.9m以上，幅0.4mで床は地山細礫敷で平坦である。現状で５段，高さ40cmほどである。壁最下段の石はさきの墓壙礫に接し，第１主体の墓壙を利用して造られている。床から鉄剣１・管玉３を出土している。

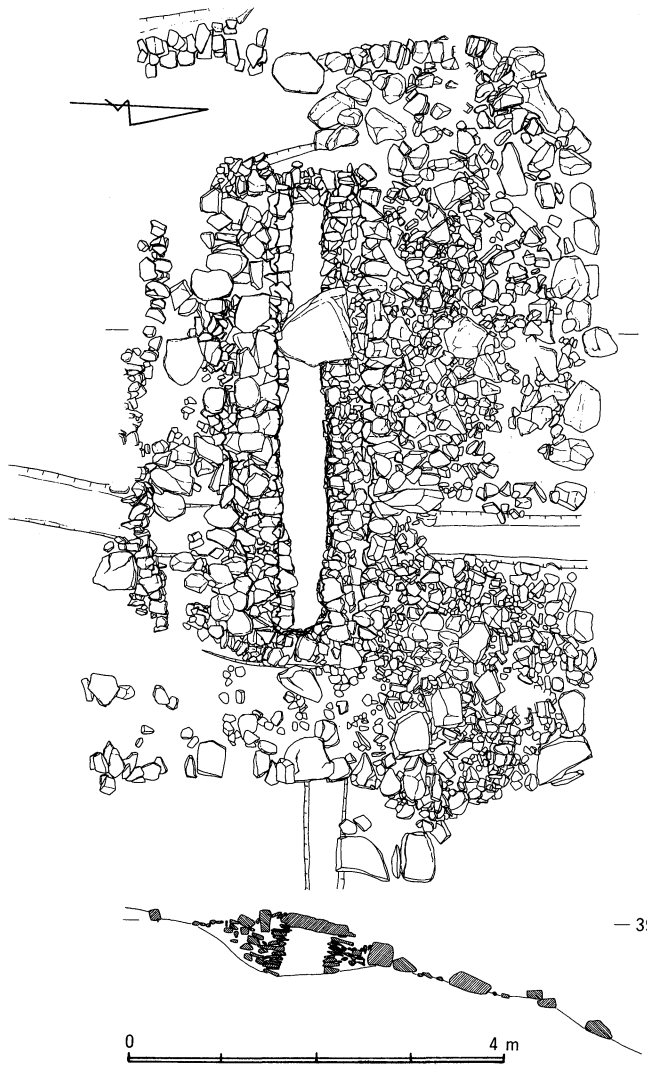
墳丘中腹には帯状に葺石が施されるが，墳丘が盛土造成されている西半部分のみで，岩盤を削りだした東半部分にはない。

Ⅰ号墳　一辺17m（周溝外縁間20m）の方墳。第１主体は長さ5.2m，幅0.8mの割石小口積で玉砂利の礫床は舟底状にくぼむ。礫を除去した跡は長さ4.6m，幅0.5mのくぼみとなった。玉砂利は一部側壁石積の下にもあり，構築順序を示している。礫床の形状は割竹形木棺を推定させる。盗掘，削平されているため石室は現状では三段ほどの石積を残すのみである。北コーナーは隅円で南コーナーは角をとっている。石２枚分ほどの控積の範囲が盛土を掘り込んだ墓壙であり，長さ6.4m，幅2.5mの長方形となる。石室内から鉄剣２・鉄鏃６・鉇１・臼玉（滑石）67などを出土した。

第２主体も盗掘を受けている。長さ４m，幅0.7m，割石小口積で主軸は第１主体に直交する。床は岩盤をU字状に掘りくぼめたもので，その上端から壁石積を行う。北西側妻の壁の前には石室の幅と同じ平石が立てられていた。石室内から刀子１・鉄剣片・臼玉（滑石）４を出土した。

墳丘は北西側中段に幅１mほどのテラス，裾に幅１～２mの周溝をもつ。それぞれから土師器高坏・底部穿孔有段口縁壺を出土した。北西周

第46図　大星山Ⅰ号墳の石室（奥：第Ⅰ主体，手前：第２主体）



第47図　大星山４号墳の石室平面図（１：100）

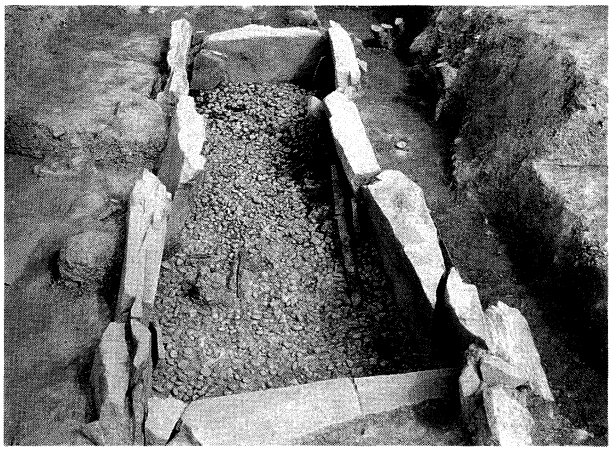
第48図　大星山4号墳の石室

溝中には葺石が崩落したと思われる礫があり，部分的にせよ葺石が存在したであろう。

４号墳　１～３号墳とは40mほど離れている。石室は割石小口積で天井石が一枚残っていた。長さ5.7m，幅0.6m，高さ0.6mで狭長である。西側妻の壁前面には１号墳第２主体同様の立石がある。側壁は東西両壁とも南壁より奥にまで１mほど続き，北壁も西壁より奥まで続く。これらのことから四壁は東・北・西・南の順に構築されたと考えられる。墓壙は地山斜面に大きく制約されながら構築されている。斜面下方（北側）は大礫の外面で，上方（南側）は小礫の石積内面，東西は石積外面によって全体として東西10m，南北６mの長方形の区画が造られる。この中を大小礫で充塡し，内面をそろえた角礫により７×２mの墓壙を造り，控積を含めて幅60cmほどの石積を行って側壁を構築する。いわゆる二重墓壙の一種ともみることができる。

石室上層からは平安時代坏・宋銭などを出土し，古く開口されたことがわかる。地山粘質土の平坦な床から鉄剣１・鉇１・臼玉（滑石）４・小玉（ガラス）１などを出土した。また墓壙外槨の外の墳丘面から石製紡錘車・土師器高坏および壺などを出土している。

墳丘は全面に角礫が散乱し，積石塚状を呈する。しかし，さきの墓壙部分を除けば，礫は墳表のみで盛土と考えられる薄い土層をはさんで地山となる。この地山面は変化なく自然斜面に続き，墳丘の成形は地山に及んでいない。そのため墳形は明瞭でないが，礫の拡



第49図　大星山２号墳石棺の遺物出土状態

がりなどから径15mほどの円墳または一辺14mほどの方墳と考えられる。

２号墳　一辺14m以上の方墳。石室の天井部は完存しないが，残存部分からみていわゆる合掌式の天井部をもち，組合式石棺にも類似するものである。側壁は三方が床面以下に達する板石を立てているが，北側は床面より高い位置に横置きされた角柱状の礫を用いており，この部分を入口とする横穴式石室的な形状を示す。石室は長さ2.1m，幅0.7mで，床は玉砂利敷で平坦である。床面から，直刀１・鉄鏃13・鉇２・のみ（？）１・くちなし玉（金銅製）３・臼玉（滑石）11を出土した。石室埋土中には土師器高坏・壺の破片があった。

墳丘は後世の変形が著しいが，３号墳側には周溝が直線的にみられ，上方から崩れ落ちた状況で多量の角礫がみられた。この礫中には土師器底部穿孔壺の破片がかなりの量散乱していた。一方，南東斜面は岩盤が露出していたが，裾の削り出しと思われる部分が認められ，北西から南にかけての裾は不明であるが，方墳と思われる。

小形石棺　２・３号墳の間の東斜面に組合式箱形石棺１基を検出した。崩落のため半分以上失われているが，幅30cm程度と小形である。残った部分からみて屋根形天井を持つ可能性があり，床は板石敷である。遺物はなかった。石棺の長軸は３号墳の推定裾に平行し，更埴市森将軍塚古墳の周囲にみられる小形埋葬施設のありかたと共通するところが多い。

祠・火葬墓　１号墳墳丘には石仏２体を納めた石祠があり，その前面の２号墳墳丘上にはかつて拝殿があったという。これらの構築により，１号墳墳頂はかなり削平され，石室の石材は祠に転用されたと考えられる。祠内の石仏は虚空蔵菩薩であり，それぞれ「安永四年」「元禄三年」の刻銘があり，周囲から寛永通宝９枚を出土した。また，２号墳墳頂には火葬骨を埋葬した小穴が３カ所あり，他にも骨片の散布がみられた。周辺から宋銭・中世土器を出土しており，中世火葬墓と考えられる。２号墳はこの中・近世の改変により墳丘を削平され北斜面には相当量の土砂が捨てられたものと思われる。

以上，考えられる築造順に述べたが，１号墳と４号墳は年代的にかなりちかいものと思われ，占地の状況からも古墳群形成のうえで，１～３号墳と４号墳は区別して考えるべきかもしれない。３号墳は小形円墳として，１号墳は方墳として，２号墳は合掌形として，それぞれ善光寺平において最古の部類である。古墳群の様相はこれまで地域において知られなかったものであり，今後の整理の進展によって位置付を明確にしたい。　（土屋　積）

⑾ 春山遺跡，春山Ｂ遺跡

所　在　地：長野市大字若穂綿内字田中7486－2ほか

調 査 期 間：平成２年４月９日～同年12月27日

調 査 面 積：春山遺跡250㎡（総計500㎡），春山Ｂ遺跡18,200㎡（総計24,800㎡）

遺跡の立地：千曲川南東側自然堤防地帯と後背湿地

時代と時期：弥生時代中期，弥生時代後期，平安時代，近世

遺跡の特徴：弥生時代中期，後期の集落と微高地境，弥生時代後期の方形周溝墓群，弥生時代後期の水田面，近世水田面

主な検出遺構

遺構／時期	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	方形周溝墓	土壙（井戸を含む）	（自然流路を含む）溝	柵列	遺物集中箇所
弥生中期	13	1		20	7		
弥生後期	27		18	60	40	2	55
平　安					1		
近　世					3		
不　明		4		20	1		

主な出土遺物

土器・陶器：弥生中期土器，弥生後期土器，土師器，須恵器，近世陶磁器

石器：石鏃，磨製石鏃，剝片，太片蛤刃石斧，扁平片刃石斧，磨製石庖丁

石製品：勾玉，管玉，ガラス小玉，砥石

土製品：紡錘車

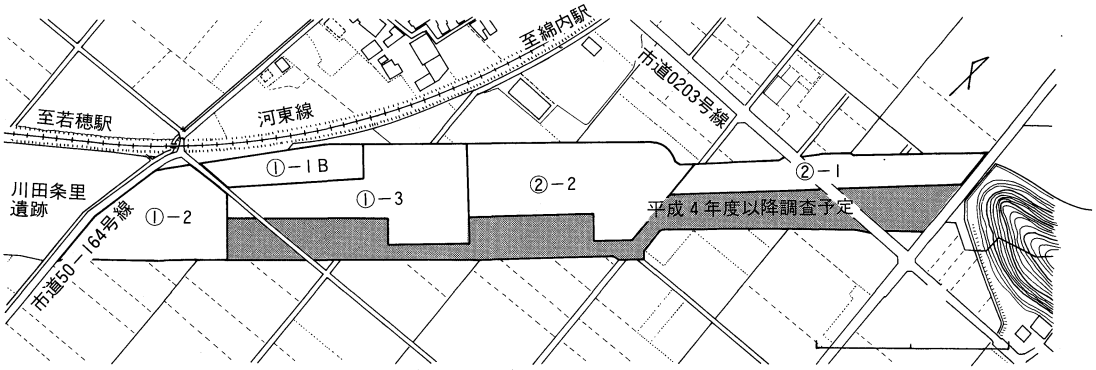
木製品：鋤，漆塗り片口鉢，杭，建築部材，井戸枠，舟，木棺，柱下部

その他：銅釧，鉄斧，鉄滓，漆布，銭貨，人骨，獣骨

はじめに　春山遺跡と春山Ｂ遺跡は，上信越自動車道の建設にともなう一連の緊急発掘調査事業として本年４月より発掘調査を行った遺跡である。本年度の発掘調査面積は，両遺跡合計で18,450㎡で，残りの6,850㎡分は平成４年度以降の継続調査予定とされる。今回の発掘調査は，道路工事工程により分割し設定した調査区の内，川田条里遺跡側より①－２，①－１Ｂ，①－３，②－２，②－１調査区を対象に実施されたものである（第50図参照）。

Ⅰ．春山Ｂ遺跡

春山Ｂ遺跡は，周知の春山遺跡（綿内春山地籍）の南西方向へ広がる遺跡として，平成元年



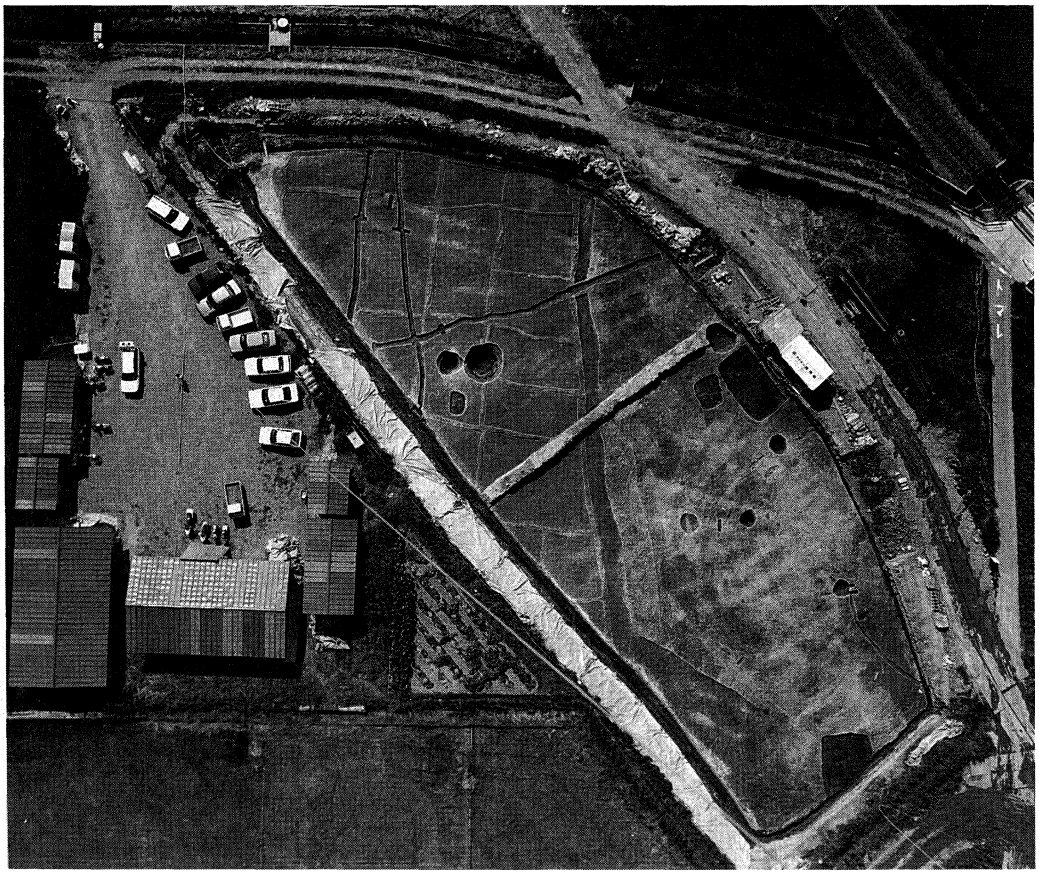
第50図　春山遺跡：春山Ｂ遺跡の発掘区（１：4000）

度長野県教育委員会文化課による試掘トレンチ調査の結果確認された。本遺跡の名称は，旧地形に位置する集落跡が春山遺跡と立地条件が異なる点を考慮し，区別して付けられたものである。

本遺跡は，千曲川右岸に形成された自然堤防地帯と東側の城ノ峰山西方の後背湿地との境界部に位置し，千曲川の氾濫源と支流の扇状地との複合により形成された結果であることが航空写真より読み取れる。このことから，千曲川や保科川が乱流していた頃の旧河川がどのような経路をたどり，また扇状地形成営力がどこまで及んだか旧地形環境を解明することが，春山B遺跡と隣接する春山遺跡や川田条里遺跡E２調査区を含めた旧地形環境下における遺跡の性格を知る上で重要な手がかりとなるはずである。

以下，今回の発掘調査により，明らかにされた本遺跡に係わる地形形成過程と微高地境に発生した弥生時代中期，後期の集落と水田や方形周溝墓群の様子を，時代ごとに簡単にまとめて概要としたい。

弥生時代中期以前　調査区全体は，自然堤防と低湿地帯の接点にあたる地形を示す。弥生時代中期～後期の遺構の存在は，弥生中期以前に自然堤防が形成期から安定期へ入っていたことを窺わせる。もっとも遺構の集中する②－１，②－２調査区の下層試掘トレンチ調査の結果によれば，現耕土面直下60～80cm程度で夾雑物をまったく含まない粗粒砂層にあたり，この砂層



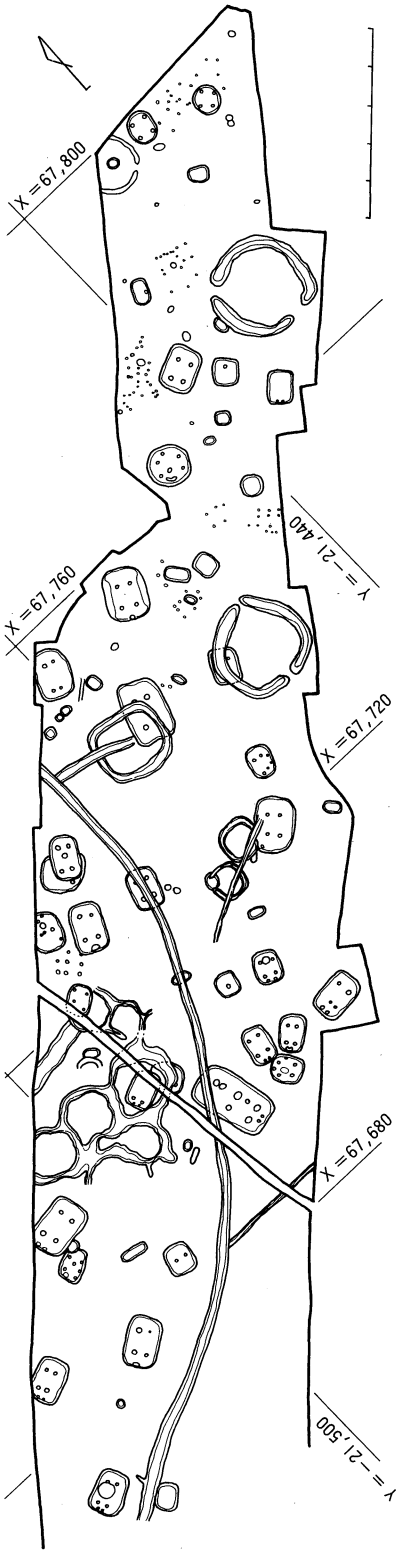
第51図　春山B遺跡①－２区の遺構分布図

は非常に厚く堆積し，①－２調査区との相互の土層の流れによれば，川田条里遺跡側と城ノ峰山側に向かって低く傾斜していることがわかってきた。またこの砂の構成要素は，周辺の河川との粒度分析比較によると千曲川と犀川に係わるもので，自然堤防を形成する砂層と判明した。これらの結果を基に現在の地形から旧地形を復元すると，この地域は千曲川と犀川の合流地点としての乱流による影響が大きく左右し，田中地籍が位置する微高地が後背湿地帯側に突出した形に形成されたものであろう。保科川については，どこをどのように乱流し扇状地の末端がどこまで及ぶのかは今回の調査では用地内の制約から結論づけるまでには至らなかった。

弥生時代中期　検出された弥生時代中期の住居跡は，13軒を数え，現田中地籍の最東端，自然堤防の末端部に位置する。これらの分布状況からして居住域は，田中地籍が位置する微高地上に広がりが想定される。これらの住居跡は，円形，方形の平面形をとり，主軸方向も異なるもので，構造においても柱の位置，数に違いが見られるなど形状に規則性はなかった。このほか，この時期にともなう遺構としては，建物跡が１棟存在し，大型土壙が数基検出されている。

特筆すべき遺構としては，弥生時代中期中葉の土器をともなう方形プランの住居跡や弥生時代中期から後期の過渡期の土器が出土した焼失住居跡からは未使用品を含む太型蛤刃石斧が８本と鉄斧が出土しており，注口土器の出土する住居跡も現われている。さらに鉄石英製の管玉やその未成品と石器，剝片を多量に含む玉造を兼ねる住居跡，紡錘車が多量に出土した住居跡からは床直より発見した石庖丁とこれより70mほど離れた別の住居跡の覆土中より出土した石庖丁とは見事に接合するなど興味が持たれる。

集落域は，川田条里遺跡側と城ノ峰山側に向かって地形が低く傾斜していく。①－２，①－１Ｂ，①－３調査区は，その傾斜した地形を示し遺構の状況からも集落域と生産域の間に位置する。遺構としては，住居跡は存在せず，隣接する川田条里遺跡Ｅ２調査区より連続する弥



第52図　春山Ｂ遺跡②－Ｉ・②－2区の遺構分布図（1：1000）

生中期の溝（川田条里遺跡の項参照）が数条検出されるのみであった。この溝は，微高地の等高線に沿って延び，集落側へ近づくほど溝と溝の距離は広くなり集落内においては確認されていない。

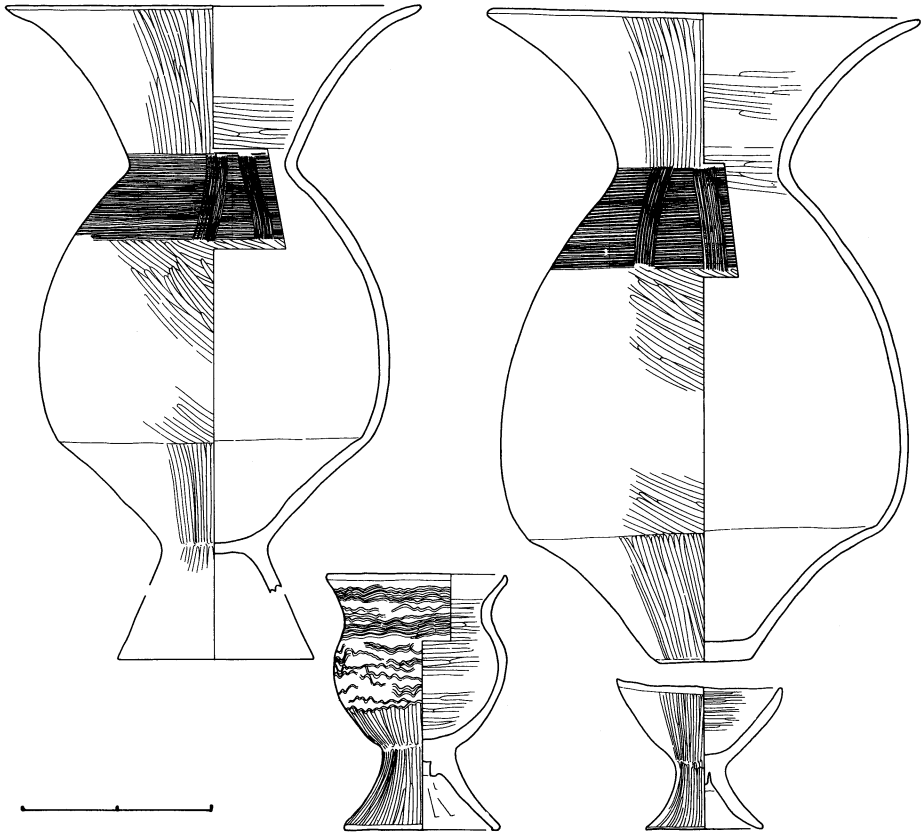
弥生時代後期　①－２調査区に見られる水田面は，川田条里遺跡Ｅ２調査区とのつながりにより弥生時代後期前半に位置づけられる。この水田面は地形に沿って細長く区画され，その中をさらに細かく分割しており，川田条里側へ向かうにつれ広がりを見せる。水田域と集落域との境は，地層によるとこの時期より意識的に区分され，弥生時代後期中頃には境界に大畦畔と溝を構築するに至り集落側より延びる道状のものにつながる。その後，洪水により水田面は土砂に覆われるとこの地域では井戸が数基造られるのみであった。弥生後期に於ける居住域の範囲は，弥生中期に比べ広がりを見せ，もっとも微高地よりの②－２調査区では住居跡の密度はより濃くなる。弥生後期の住居跡の総数は28軒を数え，この内25軒は②－１と②－２調査区より，３軒は①－２調査区の水田域と接する地域より検出された。

住居跡は，隅丸長方形の平面形式をとり主柱穴４本で出入口を南や南西側に設け，それに対した位置に炉跡と思われる炭化物が残存する状況が一般的な傾向であった。これらの住居跡は，時期により主軸方向などの制約を受けていた可能性は高く，今後土器等の詳細な検討を加えることにより正確な遺構の時期差をつかみ，集落の様子がより明らかになるものと思われる。

特筆すべき遺構としては，一辺が11ｍで柱穴６本を持った大型住居跡（口絵），長軸方向の両壁面沿いに内側へ張り出すベット状遺構の住居跡，床下施設としてＵ字形の溝を設けた例が認められた。このほか井戸が構築されるのもこの弥生後期の集落にともなうもので，数基が存在する。この内①－３調査区の集落沿いからは丸太をくり抜いた井戸枠内より多数の土器片を含むものや舟一隻を数枚の板に割ったものを井戸枠として使用しており，この時代の井戸の構築技術を知る上でも注目される。①－１Ｂ，①－２，①－３調査区からは，焼土や炭化物の広がりと土器集中箇所が50カ所にものぼり居住域と水田域境における祭祀的性格が持たれる。建物跡については，その存在を認めるが，時期差及びその性格等を明確化にするに至らなかった。特記遺物としては，祭祀用具として住居跡より出土した鉢形高坏，甑，甕のセット，床直より出土した漆の付着した布（第53図）や銅釧があげられる。また微高地と水田域境に接する住居跡からは木製工具の柄やほぼ完形の木製漆塗りの片口鉢が出土している。この鉢は赤漆で塗り，器の縁を黒漆により「鋸歯文」の模様で飾られていた（口絵）。

第53図　春山Ｂ遺跡住居跡出土の漆布

弥生時代後期末に入るとこの地域の様相は一変する。集落の姿は消え，変わって墓域が位置づけられる。検出された方形周溝墓は18基を数え，その分布状況はもっとも微高地よりに溝を共有する小規模の方形周溝墓群が存在



第54図　春山Ｂ遺跡方形周溝墓出土の弥生後期土器

し，その外回りに中規模の方形周溝墓が点在する。これらの方形周溝墓は，主体部が残らず，その埋葬方法は明らかではないが，周溝内より箱清水式の台付き甕やミニチュア土器がまとまって出土している点は注目される（第54図）。このほかガラス小玉が11点出土した壺棺墓や木棺墓が確認されている。ただこの木棺墓については副葬品に乏しく今後検討を要する。

古墳時代以降　本遺跡は，隣接する川田条里遺跡との地層の対比からすると，①－３調査区においては平安時代以降の耕作痕が認められ，①－２調査区では畦畔をともなう近世水田面を検出している。このことは，平安時代以降微高地をとりまく低地部が基本的には水田として利用していたことを示している。しかし，微高地上からはこれらに係わる建物や住居跡は検出されず，古墳時代以降の遺物の出土量も乏しかった。

２．春山遺跡

今回の発掘調査では春山遺跡の居住域は認められなかったが，春山Ｂ遺跡との境界に相当する流路跡を発見することができた。この流路跡は，②－１調査区の中央を横断する市道02103号線の北側より落ち込んでおり，多量の木製品が出土した。この流路の時期は，出土土器より弥生後期までは遡れるが，それ以前の資料を得られず，またそれ以降いつまで流路であったかは結論づけられなかった。（伊藤友久）

(12) 北ノ脇遺跡

所　在　地：長野市若穂綿内北の脇
調 査 期 間：平成２年10月６日～平成３年１月11日
調 査 面 積：6,000m²
遺跡の立地：低地に面した山際の緩斜面
時代と時期：中世末，弥生中期末
遺跡の特徴：山際の居住遺跡

主な遺構

遺構／時代	掘立柱建物	土坑	溝	その他
弥生時代		2 (pit多数)	1	土器集中３
中 世 末	14前後	22 (pit多数)	2	帯状整地土１ 畑址２ 焼土址６

主な出土遺物

土器・陶器：中近世土器陶磁器，弥生土器
石　器：石臼，茶臼，石鉢，五輪塔
木製品：柱，曲物，下駄，漆椀，鋤柄
金属製品：銅銭，刀具，鉄滓
その他：フイゴ羽口，馬骨

北ノ脇遺跡は長野市若穂地区に所在し，奇妙山系の城ノ峯北西山麓にある。ここでは中世末と弥生時代を中心とする遺構が検出された。遺跡の現状地形は前面に低地，背後に山を控えた山際の細長い緩斜面となっているが，各時代の地形は現状とやや異なっている。以下に中世末と弥生時代の遺跡の概略を記す。

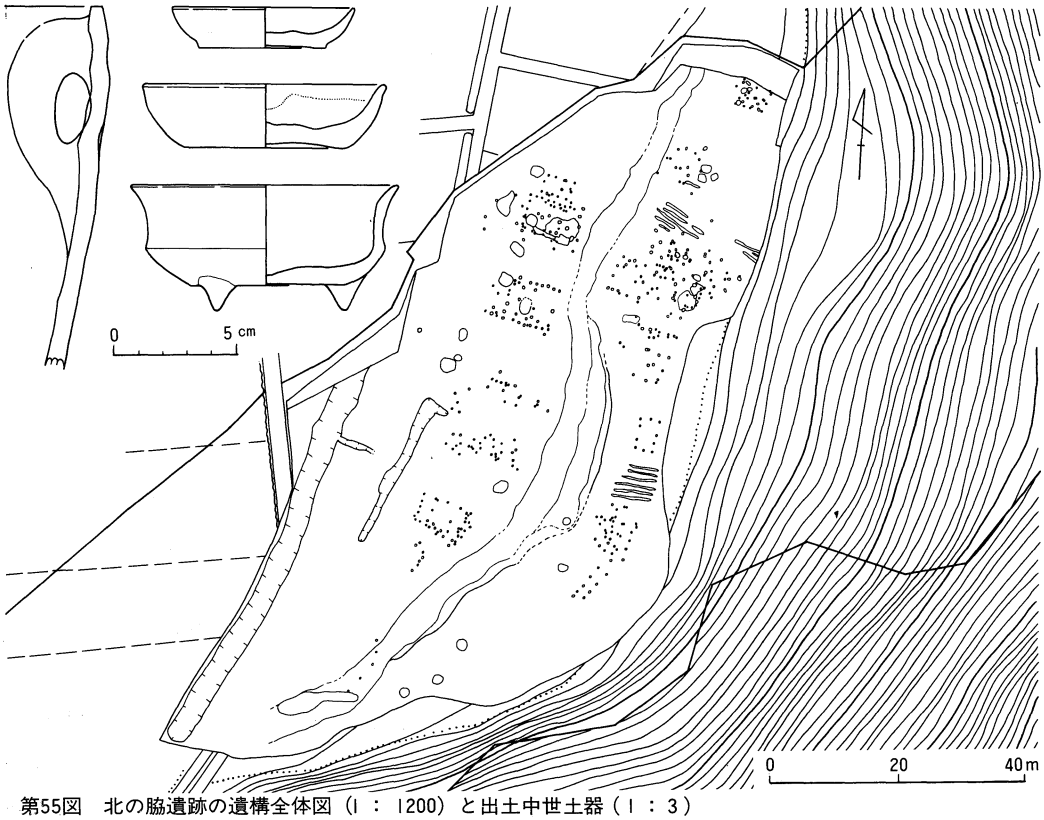
中世末の地形は現況とあまり変わらないが，東南部は緩斜面の中頃に大きな段差をもち，２段のテラスになる。遺構は緩斜面中段位を横断する帯状整地土をはさみ，その両脇に14棟前後の掘立柱建物跡や土坑等が展開している。また，低地境には南西山際から始まり調査区北側へ抜ける幅約４mの溝と，この溝に並行する短い溝が検出された。帯状整地土は浅い掘り込みに礫混じり土を充塡したもので道跡とも推定される。この両脇にある掘立柱建物は庇付きもあるが，基本的に２×５間前後と２×３間前後の２種の規模があり，これが隣接して存在する箇所がいくつかある。尚，注目される建物として，建物内部の浅い掘り込みに粘性土を貼った土間状遺構を有する建物が２棟みつかっている。両者とも柱穴や周囲から大量の焼粘土塊を出土し，１棟からは高熱を受けている焼土跡が複数検出され，もう一棟からは大量の焼粘土塊を含んだ土間状遺構の縁辺を巡る不整形の溝状の施設が検出されている。土坑は井戸と考えられるものが２基，内部にひと抱えもある石を入れる土坑が低地側を中心に数基，形状は柱穴と変わらないが，埋土に焼骨と炭化物を大量に含む土坑が山際に２基検出されている。尚，本調査範囲内では竪穴建物は確認されなかった。出土遺物では在地産土器に皿，香炉，内耳鍋があり，陶器は古瀬戸系の卸皿，大窯製品の皿，天目茶碗，丸碗，輸入青磁に雷文帯と線刻蓮弁文碗，白磁は八角杯，皿がある。木製品には曲物，漆椀，柱などの建築材，金属製品は銅銭，刀具，石製品は鉢，石臼，茶臼，五輪塔等がある。

本遺跡をめぐる中世末の環境で注目されることに遺跡背後の山が尾根続きに春山城（綿内要害）に連続することがある。春山城は文献では14世紀後半にその名がみえ（註１），落城記事を16世紀中頃にもつ（註２）。中世末の綿内要害関連の遺跡は山城の南東山麓に根小屋と推定

される館跡があり（註３），更に，この山の麓に本遺跡をはじめとする中世末の遺跡が点在しているようである。山城と周囲の居住遺跡の関係について，県内では諏訪の大熊城をはじめとして問題提起されているが（註４），この問題に係わると思われる中世末の遺跡がセンターの調査でいくつか確認されてきている。本遺跡はこのような中世末のこの地域の様相を考える上で多くの問題を含む遺跡と思われる。

弥生時代の本遺跡は河道跡に面した平坦地にあたり，この河道跡をはさんだ微高地に春山Ｂ遺跡がある。尚，この弥生時代では低地よりの堆積土が山際まで及んでいるが，この状況は古墳時代頃まで継続し，それ以後，山の崩れ土が増大して中世末には現地形に近い緩斜面地形となっているようである。本遺跡で検出された遺構は柱穴状の土坑と溝があり，河道際で，幾つかの略完形の土器が出土している。溝は山と河道跡に並行して走り，この両脇に土坑が散在している。出土遺物は河道際で出土した土器以外，全体的に少なく破片がほとんどである。木製品としては溝内より木製鋤柄の破片が出土している。本遺跡の性格については隣接する春山Ｂ遺跡や川田条里遺跡と合わせ，地域的に分析するべきと思われる。　（市川隆之）

註１）上遠野文書　註２）今清水文書　註３）井原今朝男「山城と山小屋の階級的性格」『長野110号83の４』1983　註４）岡田正彦「大熊城址　まとめ」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　諏訪市内その１・２』1973長野県教委，山田瑞穂「長野県における中世山城調査の現状と問題点」『中部高地の考古学』長野県考古学会1978



第55図　北の脇遺跡の遺構全体図（1：1200）と出土中世土器（1：3）

(13) 前山田遺跡

所　在　地：長野市若穂綿内字菱田

調 査 期 間：平成２年10月８日～平成２年12月７日

調 査 面 積：2,000㎡

遺跡の立地：千曲川の低湿地と山際の崖錐地が接する平坦部に構築された建物跡

時代と時期：室町時代末期から江戸時代及び明治時代以降

主な出土遺構：

遺構 / 時期	暗渠	建物跡	杭列	石垣	石列	テラス	石集中その他
15世紀から16世紀頃		3	4	2			2 (10C含む)
17世紀から18世紀頃		9	その他，杭は100本以上ある。	(1)	10	1	34
19世紀以降	6						

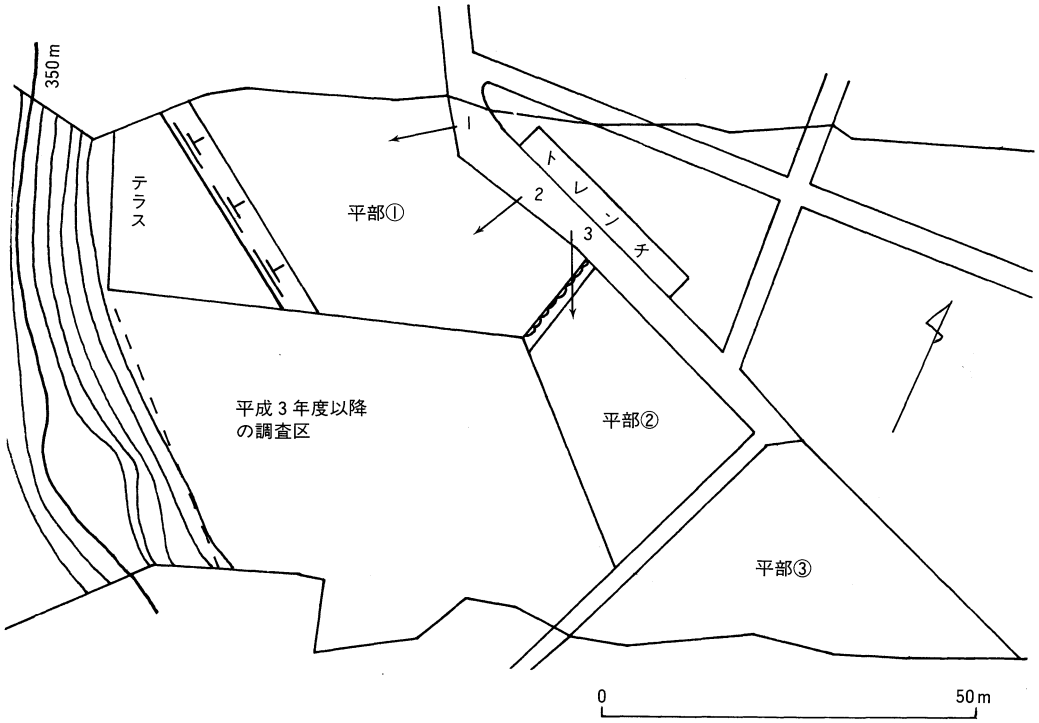
主な出土遺物

土器・陶磁器：長胴甕，内耳鍋，白磁・青磁（中国産），伊万里焼，志野焼，珠洲焼，瀬戸美濃焼（天目茶碗・香炉），唐津焼，かわらけ（燈明皿を含む）

石製品：石臼，手水鉢，片口鉢，硯

木製品：建築部材，桶，曲物，下駄，杭，柱，折敷，漆製品など

その他：銭貨，昆虫，骨，種子など



第56図　前山田遺跡の発掘区全体図（矢印は写真の撮影方向を示し，番号は写真図版の番号を示す）

はじめに　前山田遺跡は春山城という山城があった城の峰をぬくトンネルの須坂側の坑口部分の遺跡である。この遺跡は中世でも後半期（室町時代以降）から江戸時代にかけての時期の遺跡と考えられており，背後の城の峰の山上にあった春山城や現存する観音寺との関係を考えさせられるものであった。

検出された以降の時期については，15世紀から20世紀にかけてのものであるが，その中でも特に15世紀後半頃から16世紀前半頃を中心とするもの，17世紀代を中心とするもの，19世紀以降を中心とするものと３つの大きな画期をもってとらえることができるようである。

遺跡は城の峰北側斜面につくられたテラス部分と，その北側から東側にかけて広がる平坦部に限られる。今年度調査区の北側に遺跡の範囲を確認するトレンチ調査をおこなったが，遺構の検出はなかった。

この地の地山は黒褐色の粘質土であり，この地山の上に整地土が盛られ，この整地土や地山の上に遺構がつくられたり，あるいは掘り込んだ遺構が残されている。

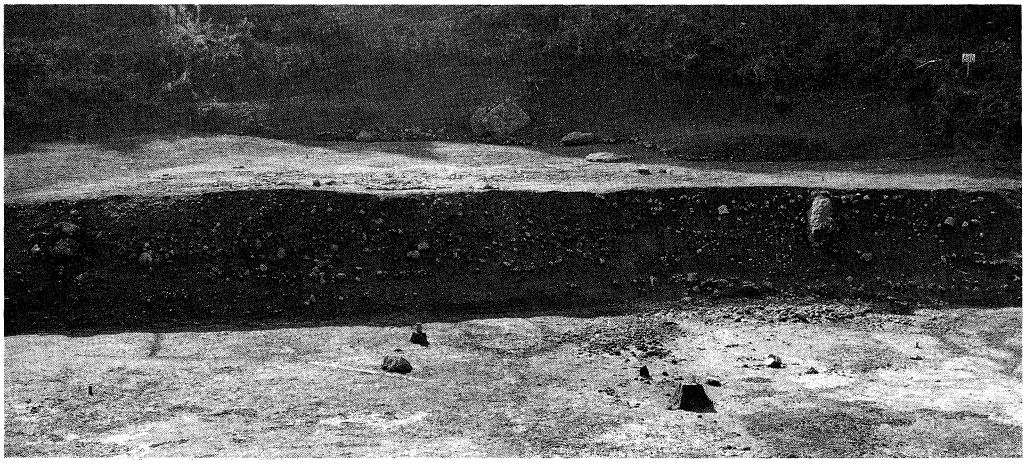
調査の都合上，調査区をテラス部・平坦部の平部①・②・③とわけて調査をおこなった。

15世紀後半頃から16世紀前半頃　この地に本格的に人の手が加えられたのはこの時期である。この時期の遺構は，人工的につくられたテラスや平部①・②の柱や杭列，そして平部②の石垣があげられる。この石垣よりも東側にはこの時期の遺構はないようである。

テラスの構築は，地山の黒褐色粘質土の上面から盛り土がなされ，その構築時期の一つの手がかりとなろう。このテラスの上面には石を四角く並べ囲んだ建物跡があり，その奥には土盛り状の小さなテラスがある。この小さなテラスのふちにはこぶし大の石が並べられており，これに続いて城の峰の山すそにそって人頭大前後の石を積んだ石垣がつくられている。検出されたテラス上の遺構がテラス構築時のものであるかどうかは判断しがたい。

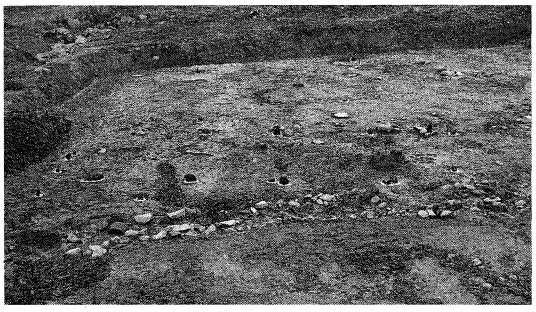
平部①では多くの柱や杭が検出されている中で，直径20cmをはかる柱による１間×４間の建物跡が検出されている。また木製品だまりや石を並べてくつった溝状の遺構も検出されている。

平部②では石垣の西側に非常に多くの柱や杭が黒褐色粘質土中に残った状況で検出されてい



第57図　前山田遺跡の人工テラスとテラス上の石垣（写真１）

る。またこの土中に建築部材が横たわった状態で出土している。



第58図　太い柱をもつ建物跡（写真２）

17世紀を中心とする頃　この頃の遺構は，平部①・②・③で石を面的に広く敷きつめた遺構や，石や石臼が投げ込まれたか入れ置かれたような状況の土坑状の遺構，そしてこぶし大前後の石を並べた建物の基礎と考えられる遺構や石列などがある。それぞれがどのような性格のものであったかはこれからの検討を要するが，それぞれが建物に関係していた状況は想定できよう。

テラス上の建物跡付近から17世紀代の唐津焼の完形品が出土している。建物跡の時期を示すものなのであろうか。

19世紀以降　攪乱によって明確な遺構の確認は少なかったが，建物の礎石や暗渠などが検出されている。また現在する観音堂の建てかえ以前のものに関係する石製旗立ても検出されている。

発掘調査が開始される間際まで，平部①には近世末頃に建てられた民家が現存していた。

その他の遺構・遺物　15世紀以前の遺構については一つだけ検出されている。それは60cm前後の石を３つ伴い完形の甕がたてに埋められたものである。当地では単発的な遺構であり，その性格は不明である。周辺遺跡との関係で理解した方がよさそうである。この甕は北信地域特有の砲弾形をしており，時期は10世紀代と考えられる。

この他にも遺物として，ごくわずかな破片類であるが，弥生時代の赤彩土器片・平安時代の灰釉陶器片・須恵器片などがある。

（西山克己・本田　真）

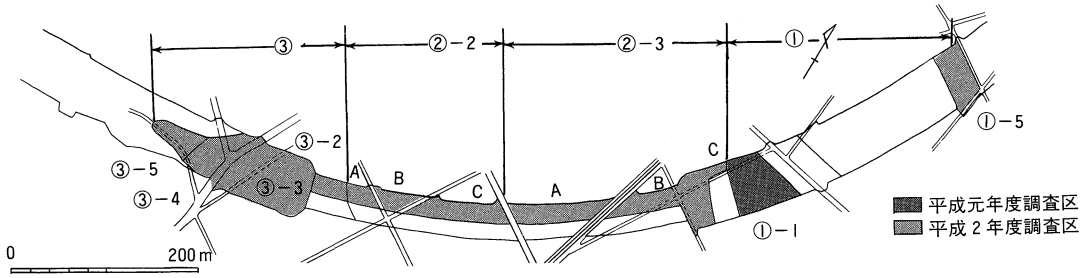
第59図　石垣と杭・柱・建築部材（写真３）

(14) 榎田（えのきだ）遺跡

所　在　地：長野市若穂綿内1952番地ほか
調 査 期 間：平成２年４月２日～平成３年１月31日
調 査 面 積：18,800㎡（総計33,200㎡）
遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防及び後背湿地
時代と時期：弥生時代中期・後期，古墳時代，奈良時代，平安時代前半，中世後半，近世末期
遺跡の特徴：弥生時代中期～古墳時代の居住域
主な検出遺構

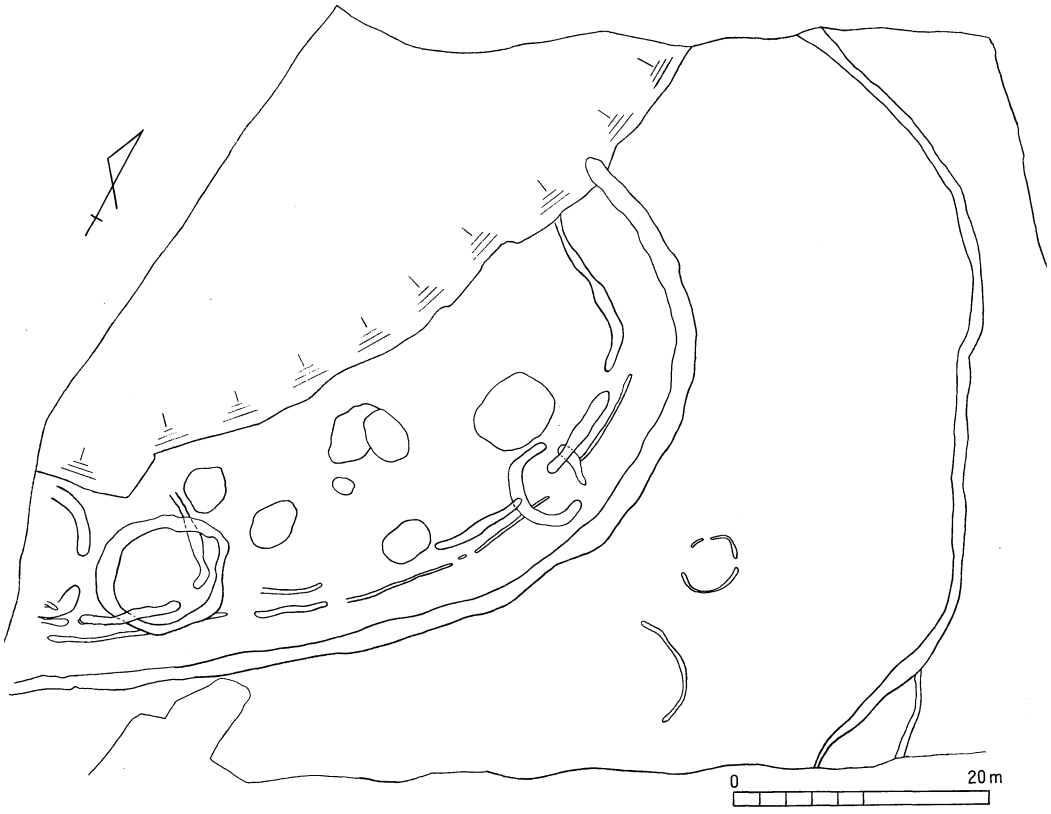
遺構 / 時期	竪穴住居址	掘立柱建物址	溝址	焼土址	土坑	土器集中	沼地	不明
弥生	47		32	3				6
古墳	337			2		4	3	
奈良・平安	2	26	127	5	2,668			5
中世以降								

主な出土遺物
土 器 ・ 土 製 品：弥生土器，土師器，須恵器，灰釉陶器，緑釉陶器，中世土器，匙形土製品，紡錘車，玉類，羽口
石 器 ・ 石 製 品：磨製石鏃，磨製石斧，紡錘車，玉類，滑石製模造品，砥石，石錘，石鉢
金属器・金属製品：鉄製鍬・鋤先，鎌，銅鏃，金環，帯金具，銭貨
木 器 ・ 木 製 品：鋤，横槌，下駄，漆椀など
そ　の　他：墨書土器，獣骨，炭化種子など



第60図　榎田遺跡の調査範囲図（１：8000）

遺跡の概要　本遺跡の調査は昨年度の調査に引き続いて実施された。昨年度調査区域では，中世遺構の調査面を終了し，一部古代面の調査を開始して中断していた。本年度は工事工程との関連から当該区域を留保したまま，それに南接する区域（②－３－Ｃ区）から遺跡の南縁部（③－５区）に至るまでと遺跡の北縁部（①－５区）の調査を行った。その結果，遺跡全体の範囲が不確定であった中にあって，遺跡の南北両端が確認できたことはひとつの成果と言える。



第61図　榎田遺跡③－3区第2検出面の遺構配置図（1：600）

南限から北限までは高速道用地内に沿って約900mを測り，本年はこのうち南北に約650m分を調査した形となる。

本遺跡の立地は，千曲川によって形成された後背湿地及び自然堤防上にあり，千曲川を起源とする運搬物の堆積や，東側にある扇状地から押し出す堆積物によってできた沖積低地に遺跡が営まれている。また東側の扇端部や山裾での湧水は豊富で，遺跡の立地する低地では保水量が多く，元来沼地の多い湿地帯であった。これを利用した蓮根栽培が江戸時代から行われ，近年まで重要な生産活動となっていた。この環境は，遺跡を理解していく上で看過できない観点となってくる。

今年度調査は，昨年度の成果から中世面と古墳～平安時代面の調査を想定して臨んだが，実際には中世の所産となる遺構はほとんど捉えることができず，また奈良・平安時代の遺構も僅少であった。古墳時代の遺構の調査に主眼が置かれることとなり，同じ検出面で弥生時代後期の遺構も調査されることとなった。さらにその下方から弥生時代中期の遺構も検出され，予想外の成果を得た。以下，各時代ごとに触れていく。

弥生時代　栗林II式期の集落が②－3－A区と③－3～4区の2カ所で検出された。前者では16軒の竪穴住居跡が確認され，後者では③－3区の西側から③－4区にかけて弧状に沼地が入り込み，それに沿うように7軒の竪穴住居跡が存在していた。これらは断面V字状の大型の

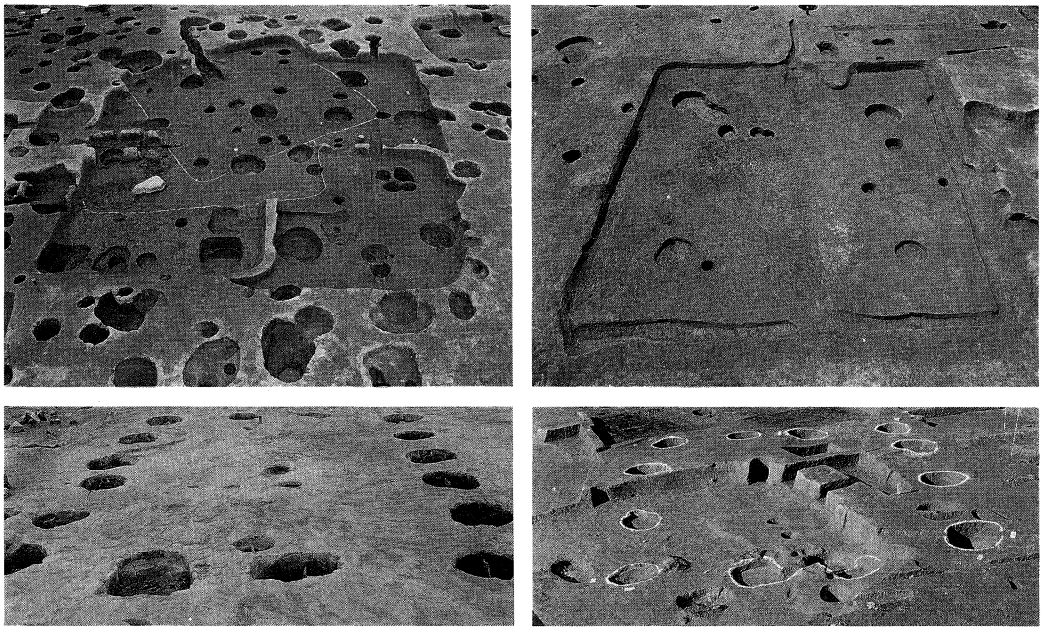
溝によって住居群が包括され，従って居住域は溝と沼に囲まれて三日月状の形を呈している（第61図）。また大型の溝に沿って，内側に浅い二本の溝が併走しており，これらは竪穴住居跡と切り合うことはない。さらに大型の溝からおよそ25m前後離れてこれらを取り巻くように小型の溝が外側に巡り，二重の溝に囲まれる環濠集落となっている。大型と小型の溝に囲まれたおよそ25m幅の区域には竪穴住居跡は存在せず，直径５ｍ近い大きさで円形に巡る浅い溝とこれに準ずる弧状となる溝のほか，小土坑が点在しているのみで，大型の溝と沼で囲まれた居住域とは純然とその意義を画している。この径５ｍを測る円形周溝については，囲まれた内側を中心にして周囲にも炭化物が一面に認められ，遺物も一定量存在することから，居住を想定することができるが，竪穴住居とは性格を異にした施設であろう。本地区で明らかにされた集落景観は貴重な類例と言える。

②－３－Ａ区の北では，中期の遺構が調査される層自体が存在せず礫層に代わっている。中期から後期へ移行していく中で，当時の表層を掃流した可能性がある。礫層の頂部は②－３－Ｃ区にある。この礫層の分布する地区からは中期の遺物は出土していない。さらに中期面や本礫堆を完全に被覆する形で細砂層が遺跡一帯を覆っている。この堆積活動は起伏のあった地形をある程度平坦にしたと思われ，その結果人間の居住・生活空間を広げることとなった。それまで痕跡の認められなかった②－３－Ａ区より北側まで遺物の分布が認められる。

後期の竪穴住居跡の分布は②－３－Ａ～②－２－Ｃ区で23軒が調査され，また③－３～４区では円形周溝が４基と完形土器をもつ土坑数基が検出された。前者の居住地域では，のちの竪穴住居跡が著しく集中して存在していることから，該期の遺構が多く破壊されていると考えられ，実際の遺構数は増加すると思われる。③－３～４区に点在する円形周溝はその性格が断定できず，墓である可能性や中期面で検出された円形状に一周する溝と同様な構築物である可能性が想定される。規模や形態，遺物出土状況からみて機能は一様ではないかもしれない。また完形土器を出土する土坑は，長軸が１～２ｍの楕円形を呈し，壺・小型甕・高杯が出土する。これらの遺構は中期にみられた環濠の内側にのみ存在しており，中期からの区画の意識が継承されたか，あるいは中期から後期に土層が被覆しているが，単に冠水の恐れのない安定した離水域を選んだ結果，同じ土地を利用することになったとも考えられる。②－３－Ａ～②－２－Ｃ区居住域と③－３～４区では性格が異なる。

古墳時代　４世紀から５世紀前半の遺構・遺物の広がる範囲は最大にみて②－３－Ａ～②－２－Ｃ区に留まる。この地域は弥生時代中期以来利用されてきた場所である。整理作業が全く行われていない現在では細かい時期区分とその量を明らかにすることは出来ないが，遺構・遺物は極めて少なく，あるいは調査範囲内では何度かの断絶があるかもしれない。弥生時代に利用されてきた遺跡南端にあたる③区では生活の痕跡を認めることができず，本地区では６世紀の後半まで暫く居住不適な地と化していたと思われる。

続く５世紀後半から６世紀にかけての時期は住居数が増えている。前代の地を継承するばかりではなく，集落がやや拡大して②－３－Ｂ区の南にもみられるようになる。該期の住居にはカマドが構築されており，新たに広がった②－３－Ｂ区では10mを越す大型の住居が存在して

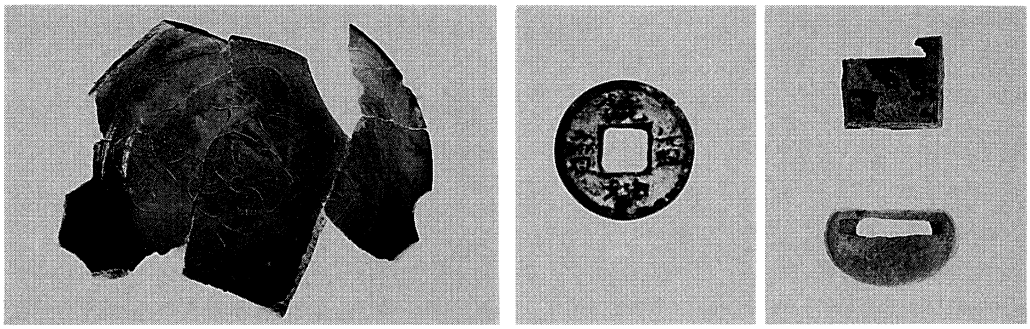


第62図　榎田遺跡の竪穴住居跡（上段）と掘立柱建物跡（下段）

いる。また少なくとも6世紀初頭には須恵器製品が搬入されているようである。6世紀代に入ってさらに②－3－C区へと北に分布を広げ，また②－2－C区へと南へも広がりをみせる。鉄製の鍬・鋤先や木製鋤などの開墾具はこの時期に属し，耕地の開拓も盛んになったのではないかと考えられる。このことは，東側の山裾に点在する古墳群の出現と時期が一致することと無縁ではないと思われ，開発を行うに当たってそれを推進する中核的な役割を果たす人格の存在が想定できる。住居跡から勾玉・管玉・臼玉・小玉などの玉類が出土するのはほとんど該期であり，特に注目されるのは子持勾玉が出土していることである。6世紀の終わり頃から7世紀前半の時期では住居跡は調査区のほぼ全域に分布し，その中では②－2－C～③区北側と②－3－C区に主にみることができる。②－3－A区からみて，より北側へと南側へ集落が移動していったことがわかる。7世紀後半では，北側へ移っていく一群は継続して②－3－C区に数軒みられる。しかし、現段階ではこのほかには明確に捉えられず，南側へ広がっていった一群は少なくとも調査範囲内では一端ここでその姿を追えなくなる。

奈良・平安時代　7世紀後半の遺構の減少傾向は8世紀に入ってもそのまま連動している。殊に8世紀前半の遺物は皆無であり，古くても半ば以降の遺物となる。その量は少なく，8世紀終わり頃から9世紀前半になって僅かに量を増すが，住居跡は確実な数を出せない。遺物の分布は②－3－C区の北側，②－2－C区で少量，②－2－B～②－2－A区にみられ，いずれも出土地点のレベルが前代のものより高い位置で得られている。あるいはそれまで静かだった堆積活動が活発となり，同時に一時冠水域が広がっていたとも考えられる。7世紀後半からの遺構減少の動きと相関があると思われる。

9世紀後半になって遺物の量は一定量が存在するものの多い量ではない。竪穴住居跡は，①



第63図　榎田遺跡出土の緑釉陶器椀（1：3）・饒益神寶（1：1）・帯金具（1：2）

－1区では昨年度確認されているが，今年度はどの地区からも検出されていない。遺物の分布は③区と，②－3－C区北側から昨年度調査区①－1区にみられる。③区では遺物の種類が豊富で，所有者の性格の一端を伺えるような遺物が出土している。一つは緑釉陶器で，破片数も多く，陰刻花文のある椀もみられた（第63図左）。また皇朝十二銭の「饒益神寶」（同図中）や，奈良時代からの伝世品と思われる帯金具2点（丸鞆・巡方：同図右），付近の土坑から出土した漆椀もこの時期に比定されるのではないかと考えられ，『卓』（判読不能）と書かれた墨書土器もまとまって出土している。近くに有力者を中心とした村落が形成されていたと想像される。

古墳時代にみられた北へと南への各々の集落の動きは7世紀後半ないし8世紀前半で途絶えるが，8世紀後半からの遺物分布域などを考え合わせると，9世紀後半まで徐々に北へと南へ各々が移っていることが理解される。しかし10世紀に入ると南の一群は遺構・遺物とも検出されなくなり，北の一群も昨年度調査範囲をみても一切認められない。北の一群は来年度調査区の方へ移っているのであろうか。古代では10世紀以降その存在を知ることができない。

中世以降　遺物については，中世前半は皆無に等しく，後半においても内耳土鍋が少量検出されている程度である。遺構については，柱配置や柱穴の規模から中世以降と考えられる掘立柱建物跡が②－2－C区で数棟調査されている。近世に入っても遺物はほとんどなく，居住域としての利用は考えられない。

概括　以上，集落の変遷を大まかに触れてみた。この中で大きな断絶が2度ある。最初は4～5世紀前半で，この時期は善光寺平でも集落の調査例が少なく，その反面古墳の導入など新たな先進的な側面もみられ，善光寺平全体の問題として捉えるべき内容を含んでいる。さらに一つは10世紀以降の様相で，全県的にみても不透明な部分でもあり，幅広い範囲で考えていかなければならない問題となろう。このほか，細かくは7世紀終わりから8世紀前半に断絶があり，本遺跡の特徴とも思われる。また集落を考える上で，直接来年度へ残された重要な課題のひとつは，今年度所属時期が明らかにできなかった掘立柱建物跡についてである。径1mに近い掘り方を持つ大型掘立柱建物跡（第62図下段）は，古墳時代の住居跡のいずれよりも新しいことは確認されているが，それ以上の追及がなされていない。調査段階で掘立柱建物跡を被覆する土層の確認が必要になると思われる。様々な点で来年度の調査でさらに肉付けされることが期待される。

（藤原直人・野村一寿）

（1・2） 西赤座遺跡・栗毛坂遺跡群

所　在　地：佐久市大字岩村田字大馬久保129－2番地ほか，字西曽根69番地ほか
調査期間：平成2年5月17日～同年6月11日（西赤座遺跡）
：　同年6月14日～同年8月7日（栗毛坂遺跡群）
調査面積：西赤座遺跡2,500m²（総計 9,200m²）
：栗毛坂遺跡群5,200m²（総計83,700m²）
遺跡の立地：浅間山南麓末端部の田切り地形に挟まれた台地
時代と時期：平安時代・中～近世・近代
遺跡の特徴：平安時代の居住域

西赤座遺跡　主な検出遺構（総計）

近　代	耕地整理跡(1)
不　明	掘立柱建物跡(1)　土坑(35)　溝跡10(38)

主な出土遺物
土　器：須恵器，土師器

栗毛坂遺跡群　主な検出遺構

	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土　坑	溝	そ　の　他
縄　文			(15)		集石(1)　土坑墓(1)
弥　生	(1)				
古　墳	(24)	2 (130)		(1)	竪穴状遺構(1)
奈　良	(8)		(38)		畑跡(3)
平　安	5 (126)		(39)	1	竪穴状遺構(3)　鍛冶跡(1)
中　世	(4)	(12)	(56)	(5)	井戸(2)　柵列(1)
不　明			13(785)	3 (49)	焼土跡(1)　土坑墓(1)

（ ）総計

主な出土遺物
土器・陶磁器：須恵器，土師器，灰釉陶器，中・近世陶磁器
鉄　製　品：刀子

西赤座遺跡　調査対象区域は遺跡の北端部にあたり，昭和62年度調査分の南側部分である。高速道用地拡張に伴い実施するはこびとなった。結果は，水田造成によって約1mの段差ができるほど削平されている西側部分を除いて，62年度調査区の地表面と地続きになる東側で溝跡が10本検出された。このうち4本は以前の調査で検出された溝跡の続きと考えられる。新たに検出された溝跡は，現畦畔区画と同方向もしくは同位置にあるものもみられ，それらについては旧水路であった可能性がある。

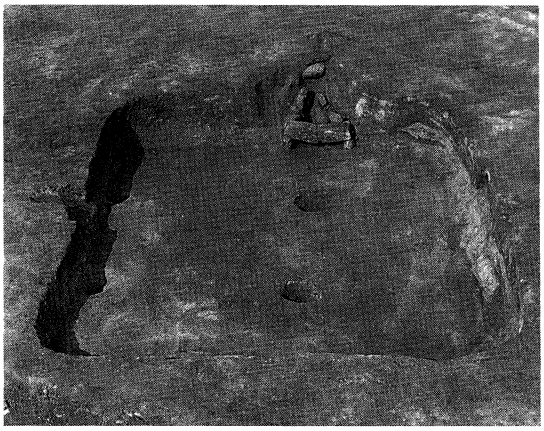
栗毛坂遺跡群　調査対象区域は本遺跡の北端部にあたる蟹沢左岸の台地上で，昭和61年度調査分の北側部分である。現状は水田で，耕土下1mほどに平安時代前半の包含層が認められた。

今回の調査で検出された遺構数は表のとおりである。これらの遺構のほとんどが，蟹沢から入り込む沢を境にした南西部で検出されたのに対して，その北東部では居住域は認められな

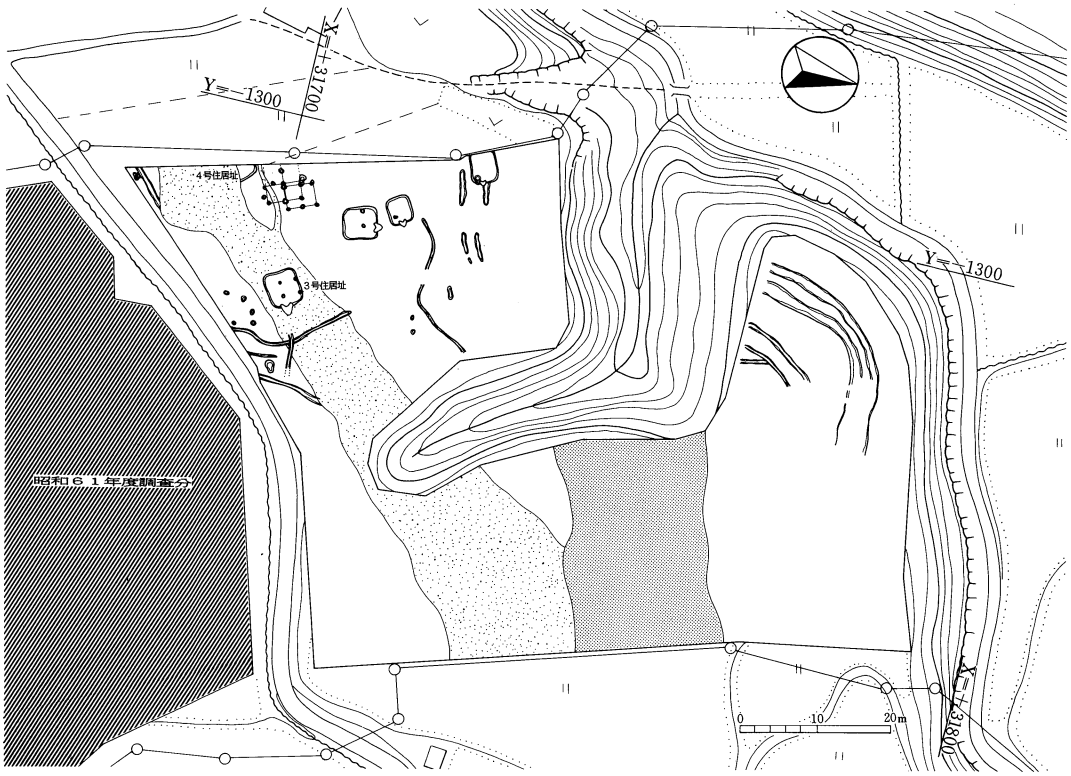
かった。特に注目されるのは，遺跡内を横切り南西方向に延びる小さな田切りにかかった３号・４号住居跡で，両跡の時間幅から，従来より形成時期が捉えにくかったこうした田切りの時期的な限定が可能となったほか，その相互関連から，本遺跡のみならず枇杷坂遺跡群など周辺遺跡における位置づけの端緒になるとも考える。また，この埋没部に構築された３号住居跡は，極めて良好な状態で検出され，煙道部に須恵器の甕片を用い直方体に成形された天井石が残るという，カマドの形態を復原するうえで貴重な資料となるほか，主柱穴が北半分のみに認められ上屋構造・室内空間の利用状況を検討するにも好材料である。さらに住居外には，同一埋土の溝がめぐり，屋外の空間についても示唆するものがある。なお，２棟の掘立柱建跡は平安時代の所産であるが、住居跡との関連については今後の課題である。

台地縁辺部沿いに検出された北東部の溝跡は，Ｖ字状の掘り込みが部分的に認められるものの土器などの出土はなく，時期・性格などに不明な点が多い。

（岡村秀雄・新海節生）



第64図　栗毛坂遺跡群Ｄ地区の３号住居跡



第65図　栗毛坂遺跡群Ｄ地区の遺構配置図（１：900）

(3) 長土呂遺跡群

所　在　地：佐久市大字長土呂字上聖原49番地ほか
調 査 期 間：平成２年４月９日～同年10月１日
調 査 面 積：11,000㎡
遺跡の立地：浅間山南麓末端部の谷に挟まれた台地
時代と時期：縄文時代早期，古墳時代後期～平安時代
遺跡の特徴：縄文時代早期の狩猟場，古墳時代後期～平安時代の居住域

主な検出遺構

遺構 / 時期	竪穴住居跡	掘建柱建物跡	土坑	溝	その他
縄　文			3		
古　墳	52	19	未整理	1	畑跡１
奈　良					小鍛冶工房跡１
平　安					井戸状遺構
不　明				4	

主な出土遺物

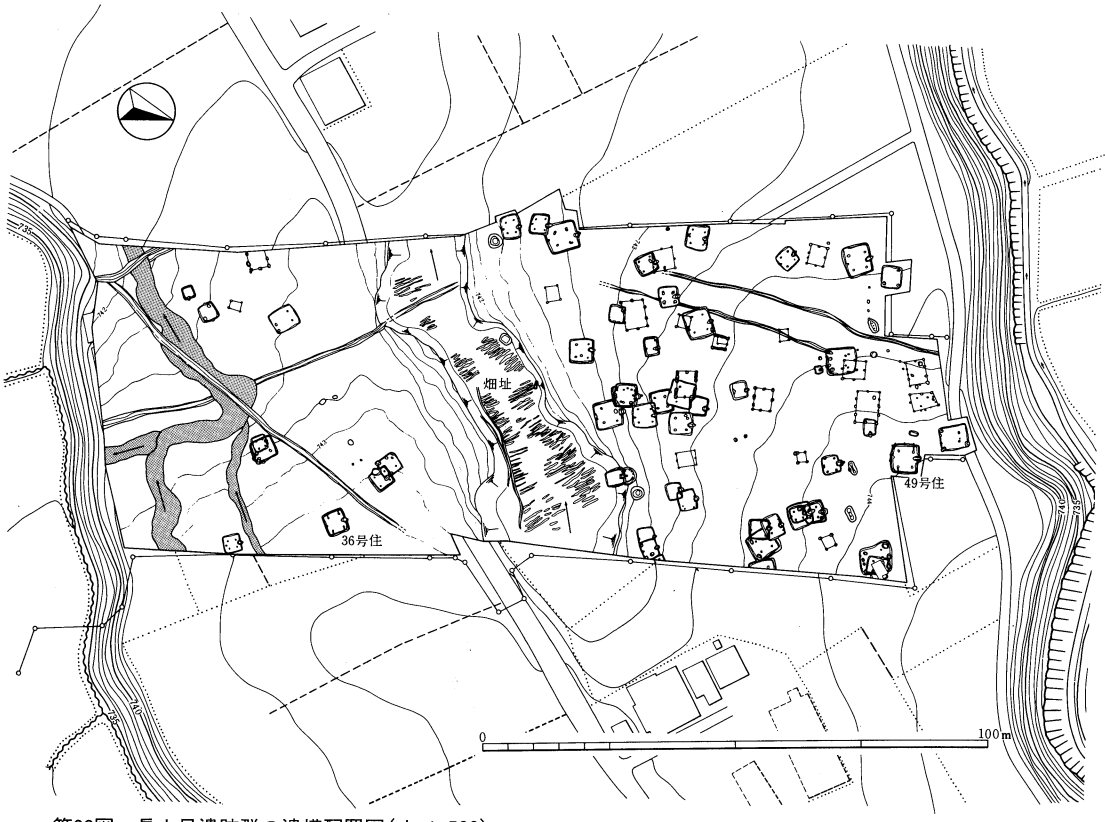
土　器：古墳時代後期～平安時代の土師器・須恵器
石製品：滑石製模造品，紡錘車，有孔軽石
鉄　器：鉄鏃，刀子，鋤先，鎌，鉄斧
その他：金環，袴帯，鉄滓，羽口，馬骨

浅間山南麓の末端部一帯は，軽石流堆積物が厚く覆っているため，小河川の浸食によって形成された小規模な谷地形が発達している。長土呂遺跡群は，その谷に挟まれた狭長な台地上に営まれており，長さは４km余りにも及んでいる。上信越自動車道は，遺跡群の中央やや北寄りの地点を横断することとなった。この西側を佐久埋蔵文化財調査センターが「聖原遺跡」として昭和63年から継続調査しているが，これによって付近一帯が古墳時代後期後半から平安時代にかけての大規模集落であったことが判明している。

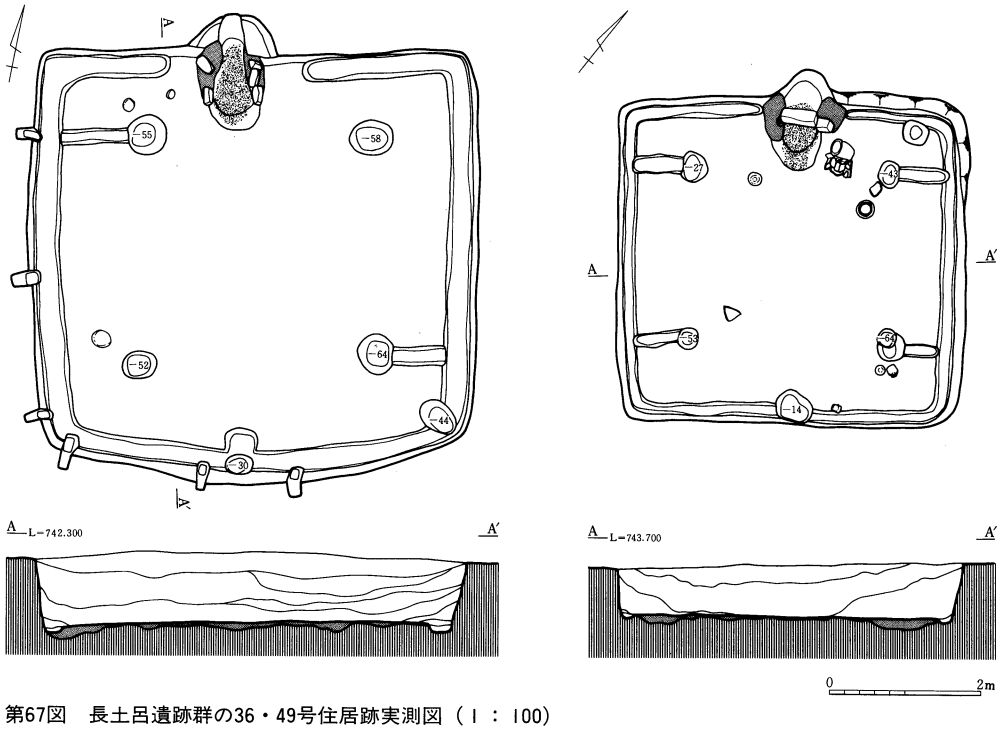
今回の調査で検出した遺構数は表のとおりである。ほかに，南側縁辺部から古墳時代と平安時代の，また中央部から古墳時代後期後半直前に埋没が始まった旧河川を確認した。帰属時期を確定できない溝を含むが，縄文時代の「陥し穴」３基を除いて，みな古墳時代後期後半から平安時代の所産であり，聖原遺跡などで調査された集落が当地にも及んでいることが判明した。ただし，遺構の分布状況はまばらとなっており，個々の遺構規模についても総じてひとまわり小さいといえる。その他，掘建柱建物跡の占める割合，遺物そのものの質・量なども劣っている状況であった。全期を通して集落の中心から免れていたと考えられるが，遺跡全体でみるならば，中心部と縁辺部の差が明瞭であることから，集落構造をより具体化できる資料となろう。

その他特記すべき成果としては，古墳時代後期後半の竪穴住居跡に，小形住居でありながらいわゆる「間仕切り溝」を具えるもの（36号住）と，「間仕切り溝」に加えて壁体に角材を埋め込んだ跡と思われる壁溝をもつもの（49号住）が含まれていたことが挙げられる。住居構造や構築技術の系譜を探る上で興味深い。また，同期の畑跡を旧河川内の埋没土中から検出し得たことは，新たな畑作技術の発見と，さらには水田経営だけに頼っていたのではないことを改めて確認することとなり，これも大きな成果といえよう。

（宇賀神誠司）



第66図　長土呂遺跡群の遺構配置図(１:1,500)



第67図　長土呂遺跡群の36・49号住居跡実測図（１：100）

II　普及・研究活動

1．現地説明会

(1)　大星山古墳群，川田条里遺跡Ａ・Ｂ区（長野市若穂）

平成２年６月10日（日），晴天のもと今年度最初の現地説明会を開催した。大星山古墳群は，東山古墳群の隣の尾根にあたる大星山のはりだした部分に存在する４基の古墳から成り立っている。その古墳の石室や石棺を中心に公開した。いっぽう，プレハブにおいては，鉄剣・鉄鏃・やりがんな・勾玉・臼玉・ガラス小玉・土器などの出土品を展示し，調査研究員が説明にあたった。

埋文センターが善光寺平で初めて調査した古墳の公開だったため，説明会に地元の人が多かったことはもちろん，長野市をはじめ広く北信一帯から見学者があり，有力者のお墓の規模の大きさに驚いていた。見学者310名。

千曲川東岸若穂地区に広がる沖積地に位置する川田条里遺跡のＡ地区は，遺跡の西端にあたり，山から水田にかかる場所になっている。ここでは，戦国時代の屋敷跡の石垣や基壇，平安時代の水田跡を中心に公開した。またプレハブでは，内耳鍋とよばれる土なべや土器の皿・石臼・中国産や国内産の各種の陶磁器などを展示し，調査研究員が説明にあたった。

山ぎわのゆるやかに傾斜した場所に石垣をつくり，土や石を埋めて整地した大規模な屋敷跡に，見学者はびっくりしていた。見学者170名。

第68図　大星山古墳群の現地説明会風景

川田条里遺跡Ｂ地区は，広大な遺跡のほぼ中央部に位置しており，弥生･古墳･古墳～平安の各時代の水田跡を中心に公開した。またプレハブでは，水田から出土した墨書土器・杭・建築部材・田下駄などの木製品を展示し，調査研究員が説明にあたった。

平安時代の水田は，大畦・小畦が東西南北の方向につくられているのに対し，古墳時代では東西南北にあまり関係なく地形の傾斜にあわせて大畦がつくられ，その内側に小区画水田をつくっているという水田のちがいを見学者は熱心に見入っていた。見学者220名。

(2) 松原遺跡（長野市松代）

平成２年７月８日（日），千曲川によって形成された自然堤防上に位置する松原遺跡では，弥生時代中期の集落跡，古代の河川跡などを中心に公開した。いっぽうプレハブにおいて，食器，煮炊具，貯蔵具および磬の鋳型などの土製品，石製品，炭化米などを展示し，調査研究員が説明にあたった。

猛暑にもかかわらず地元の人を中心に長野市周辺，遠くは松本市や県外から非常に大勢の見学者があり，約3,500㎡におよぶ遺跡のようすを熱心に見てあるいた。見学者670名。

(3) 大室古墳群・村東山手遺跡（長野市松代）

平成２年７月16日（月）の午後，地元大室地区の住民を対象に縄文時代の敷石住居跡，廃屋墓，古代の住居跡，また明治大学が昨年に引き続いて発掘調査をしている古墳２基を公開した。いっぽうプレハブにおいて，縄文時代の注口土器・深鉢・石器，古墳から出土した土器・鉄器・装身具などを展示した。

広く呼びかけをせず，短時間だったにもかかわらず見学者が50名にものぼり，関心の高さを示した。

(4) 向六工遺跡（東筑摩郡坂北村）

平成２年９月７日（金）の午後，東条川にそってできた河岸段丘上に位置する向六工遺跡では，縄文時代や平安時代の住居跡，中世の火葬施設などを中心に公開した。またプレハブにおいて，土器・石器・陶器などを展示し，調査研究員が説明にあたった。

現地説明会の時間がたった１時間だったが，地元から51名の見学者があり，郷土の歴史にたいする関心の強さを感じた。

(5) 松原遺跡（長野市松代）

平成２年10月21日（日），秋晴れのもと今年度２回目の説明会を行なった。縄文時代中期の生活跡，弥生時代中期の住居跡・環濠・掘立建物跡などを中心に公開した。いっぽうプレハブにおいて，各時代の土器群，石器類，漆塗り櫛・斎串などの木製品，中世の五輪塔などを展示し，調査研究員が説明にあたった。見学者463名。

(6) 春山Ｂ・北の脇・前山田・榎田遺跡（長野市若穂）

平成２年10月28日（日），千曲川によって形成された後背湿地や自然堤防上に位置し，川田条里遺跡に隣接している春山Ｂ遺跡では，弥生時代中・後期の住居跡を中心に公開した。いっぽうプレハブでは，石斧・石庖丁・石鏃などの石器類，紡錘車，管玉・ガラス小玉などの装身具，弥生時代の土器，片口鉢などの木製品を展示した。

地元の人が多く参加したが，中でも小学生が熱心にメモをとりながら見学している姿が印象的だった。見学者150名。

春山城（城の峰）の北西側の山麓に位置する北の脇遺跡では，戦国時代の住居跡を中心に公開し，調査研究員が説明にあたった。いっぽうプレハブにおいて，内耳鍋・かわらけなどの土器類，中国産や国内産の陶磁器，石臼などを展示した。見学者58名。

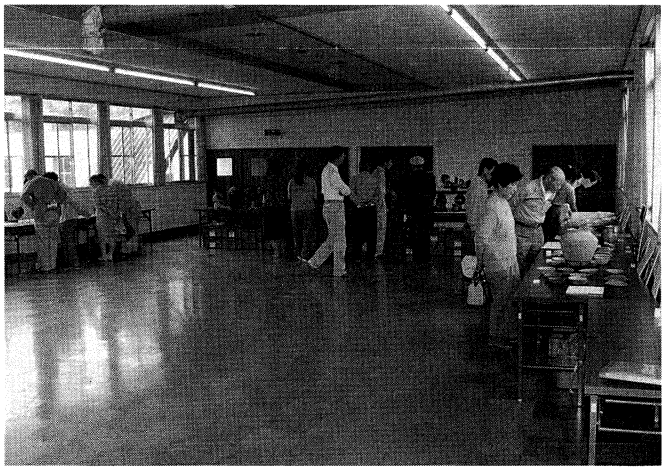
春山城（城の峰）の北側の山麓に存在する前山田遺跡では，室町時代から江戸時代にかけての石垣・礎石・石だまりなどを中心に公開した。またプレハブでは，かわらけ・内耳鍋などの土器類，中国産や国内産の陶磁器，石臼，木製品，桃の種などを展示した。見学者50名。

千曲川東岸の自然堤防上に位置する榎田遺跡では，弥生時代・古墳時代の住居跡を中心に公開した。いっぽうプレハブにおいては，各時代の土器類，石器類，剣，臼玉・管玉・有孔円板などの滑石製模造品，金環，銭貨，陶磁器などを展示した。見学者120名。

2．展示会

(1) 篠ノ井遺跡出土品展

平成2年9月16日(日)，塩崎連絡所を会場にして「篠ノ井遺跡出土品展」をおこなった。本来なら現地説明会を開催したかったが，分割調査のため発掘現場を公開することが難しく，そこで昭和63年度から平成2年度までの3年間にわたる出土品を展示し，公開した。会場には，縄文時代晩期から奈良・平安時代にかけての遺物，写真パネル，速報などを展示した。その主な遺物をあげてみると，



第69図　篠ノ井遺跡の展示会風景

○　縄文時代晩期―浅鉢形土器，深鉢形土器，石鏃

○　弥生時代中期―小型壺形土器，人面付土器の人面部分，石鏃，磨製石斧，打製石斧

○　弥生時代後期～古墳時代前期―器台，坩，壺，甕，高坏，管玉，勾玉，ガラス小玉，コハク玉，メノウ，玉の原石，銅鏃，漆製品，木製高坏，小型銅鏡

○　奈良・平安時代―灰釉陶器，須恵器，土師器，墨書土器，刻書土器，麻引金具，土錘，フイゴの羽口，紡錘車

などになる。また地震による液状化現象の墳砂跡の土層剝ぎとりや噴砂も展示した。

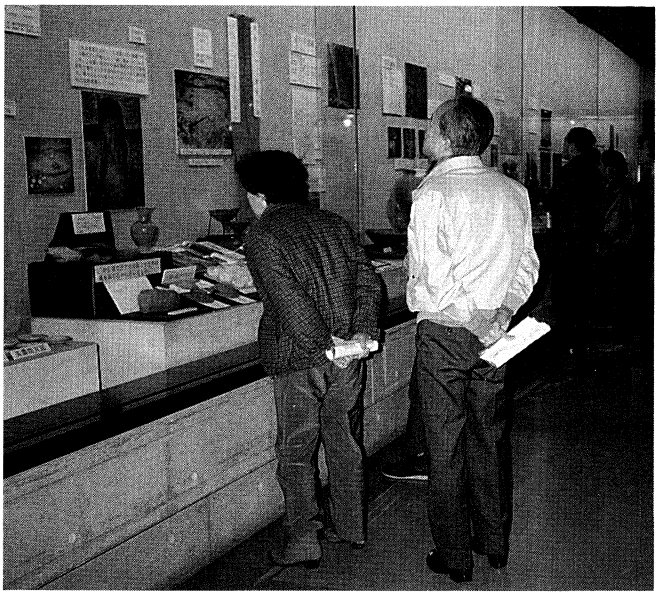
たった1日だけの出土品展であったが，地元の人を中心に須坂市，更埴市からも見学者がありその数221名にものぼり，篠ノ井遺跡から出土した貴重な遺物を熱心に見学し，盛

んに質問していた。

(2) 若穂地区遺跡発掘出土品展

11月23日（金），24日（土）の両日，若穂農協の依頼によって農協祭とあわせて「若穂地区遺跡発掘出土品展」を川田支所でおこなった。

会場には，川田条里，大星山古墳群，春山B，北の脇，前山田，榎田の各遺跡の代表的遺物や写真パネルを展示し，見学者になかなか好評だった。



第70図 「善光寺平を掘る」展示会風景

(3) 長野自動車道・上信越自動車道建設に伴う出土品展

平成3年2月17日（日）から24日（日）までの1週間，「善光寺平を掘る」というテーマで出土品展を実施した。昨年同様，長野市立博物館の後援をえて，会場はじめ備品の一切を借用し，平成2年度の発掘調査の概要と遺物資料を中間報告のかたちで公開した。

各遺跡では，縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世と時代の変遷がわかるように，パネル・イラストなどを用い工夫をこらした。

まず歴史年表でいままでの調査の成果を示し，続いて各遺跡の代表的遺物を展示した。向六工遺跡の縄文時代早期の土器や石器，篠ノ井遺跡の土壙墓から出土した古墳時代のコハク玉と珠文鏡，窪河原遺跡の平安時代末の大甕，松原遺跡の縄文時代中期の完形土器・弥生時代中期の人面付土器・平安時代のサイコロ，村東山手遺跡の縄文時代の注口土器・土偶・敷石住居，大星山古墳群の副葬品の鉄器類・装身具類，川田条里遺跡の弥生人の足跡，春山B遺跡の土器や石器，北の脇遺跡の石臼・茶臼，前山田遺跡の中国からの渡来銭，榎田遺跡の金環・切子玉・平安時代の帯金具・饒益神宝・緑釉陶器などが注目を集めた。また「器のうつりかわり」や「埋葬のうつりかわり」のコーナーでは，北村遺跡の縄文時代の成人女性人骨，大星山古墳群の復原した合掌式石室，松原遺跡の五輪塔群などを興味深げに見ている人が多かった。「各遺跡からみつかった木製品」コーナーでは，弓・臼・田下駄・下駄などを熱心に見ている姿が目についた。

参観者は小学生からお年寄りまで幅広く，特に初日におこなった全体説明会には雪が盛んに降りしきる中120名の参加者があり，期間中の入場者数は2013名にのぼった。アンケートからは「大変参考になった」，「地域の歴史を見直すことができた」，「1週間だけでなく，もっと長くやってほしい」などの感想がめだった。この展示会が，埋蔵文化財保護

の重要性，地域に刻まれた過去の歴史を再認識するよい機会になったのではないかといえる。

なお，この展示会を開催するにあたり，多大なご支援，ご協力をいただいた長野市立博物館に対し深く感謝の意を表したい。

3．指導・研究会・学習会

期　日	講　師	指導内容ほか
2．4．9	箕輪町教育委員会　赤松　茂	川田条里遺跡の調査について
4．25	東大赤沢助教授　独協医大茂原講師	北村遺跡出土人骨について
5．9	文化庁岡村調査官　森嶋理事	松原遺跡の調査について
5．10	信州新町教育委員会　松永　満夫	松原遺跡の調査について
5．16	古環境研究所　松田　隆二	川田条里遺跡について
5．18	センター理事　神村　透	松原・榎田遺跡の調査について
5．30	明治大学教授　大塚　初重 小林　三郎	大星山古墳群の調査について
2．6．8	広島大学　藤野　次史	中島Ｂ遺跡の石器について
6．11	群馬県埋文センター相京調査研究員他２名	石川条里，川田条里遺跡の調査について
6．14	パリノ・サーベー　辻本研究員	川田条里遺跡の調査について
6．20	文化庁美術工芸課　原田技官	吉田川西遺跡の出土品について
6．30	愛知大学講師　加納　俊介 愛知県埋文センター　赤塚　次郎	大星山古墳群の調査について
7．3	筑波大学教授　岩崎　卓也	大星山古墳群の調査について
7．4	橿原考古学研究所技師　清水　康二 他１名	松原遺跡の調査について
7．12	飯島町誌刊行会　友野　良一 他	松原・川田条里遺跡の調査について
7．20	明治大学教授　戸沢　充則	北村遺跡・村東山手遺跡の調査について
2．7．31	長野県遺跡調査指導委員会　田中会長 他３名	松原遺跡の調査について
8．6	センター理事　森嶋　稔	大星山古墳群の調査について
8．27	中央大学講師　合田　芳正 東京都埋文センター　及川　良彦	長野県出土の鉄器について
8．28	福島市教育文化財団	篠ノ井遺跡他の調査について
	宮田村中越遺跡調査団　小池　孝 他９名	松原遺跡他の調査について
8．29	奈良大学　西山助教授 他３名	松原遺跡の調査について

8．30	東京都教育委員会学芸員	大谷　猛	大星山古墳群の調査について
9．3	橿原考古学研究所	橋本　武	大星山古墳群の調査について
	通産省地質調査所主任研究官	寒川　旭	篠ノ井遺跡の調査について
9．14	名古屋市立博物館学芸員	水谷栄太郎	吉田川西遺跡の出土品について
9．21	愛知県埋文センター課長補佐	森　勇一	松原，川田条里遺跡の調査について
2．10．3	京都大学	高橋　徹	吉田川西遺跡他出土の平安時代の土器について
10．18	東京都埋文センター調査員	西沢　明	川田条里遺跡他の調査について
10．19	多賀城市埋文センター技師	相沢　清利	川田条里遺跡の調査について
10．21	長野県考古学会弥生研究部会	小山　岳夫 他８名	松原遺跡の調査について
10．22	奈文研集落研究室長	工楽　善通	松原・春山Ｂ・川田条里遺跡他の調査について
10．25	愛知県埋文センター研究員	石黒　立人	榎田遺跡の調査について
11．1	センター理事	神村　透	松原・春山Ｂ遺跡の調査について
11．7	印旛郡市文化財センター調査研究員	大澤　孝	川田条里遺跡他の調査について
11．16	鹿児島大学助教授	西中川　駿	石川条里遺跡他出土の牛骨について
11．27	東京大学助教授	千々　和到	松原・北の脇遺跡他の調査について
2．11．28	群馬県埋蔵文化財調査事業団 主任調査研究員	石坂　茂 他１名	北村遺跡出土土器について
11．29	立命館大学講師 山梨文化財研究所古植物・地理研究室長	高橋　学 外山　秀一	松原遺跡他の地形について
2．12．6	国立歴史民俗博物館漆器研究会	工楽　善通 他６名	春山Ｂ遺跡他出土の木器の調査について
12．7	埼玉県埋文センター主任調査員	中島　宏	中島Ｂ遺跡他出土の木器の調査について
12．13	国学院大学教授	小林　達雄	中島Ｂ遺跡の縄文土器について
12．14	センター理事	森嶋　稔	松原遺跡の調査について
12．19	国学院大学教授 日本大学助教授	永峯　光一 鈴木　保彦	松原遺跡の調査について
12．20	奈文研建造物室長	宮本長二郎	松原遺跡の調査について
3．2．13	栃木県文化振興事業団主査	岩上　照朗 他１名	松原遺跡の調査について
2．18	石川県立埋文センター主事	中屋　克彦	〃
3．11	愛知県立埋文センター主事	樋上　昇 他３名	石川条里遺跡他木器について
3．15	独協医科大学講師	茂原　信生	村東山手遺跡他出土の人骨について

4．刊行物

『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書―佐久市内その2』

『長野県埋蔵文化財センター年報7』(1990年度)

『長野県埋蔵文化財ニュース』31～34

III　機構・事業の概要

1．機　構

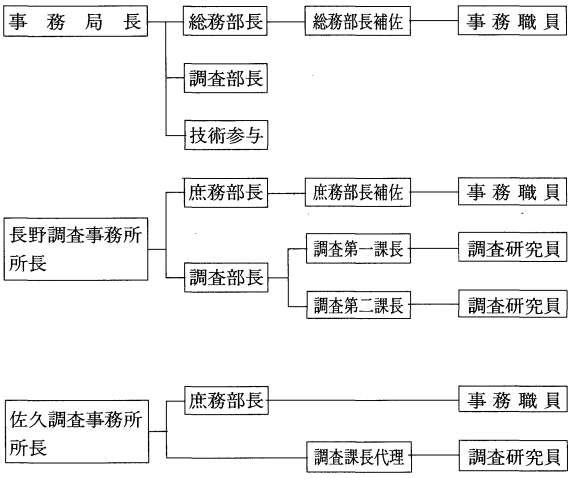
(1)　組織　　（3．3．31現在）

○理事会

理 事 長(県教育長)
副理事長
専務理事(1名)
理　　事(県企画局長)
〃　(県高速道局長)
〃　(県教委文化課長)
〃　(県考古学会長)
〃　(市町村長代表)
〃　(市町村教育長代表)
〃　(考古学研究者代表)

監　　事(県会計局会計課長)
〃　(県教委総務課長)

○事務局



(2)　事務所所在地

本　　部　　長野市大字南長野字幅下692－2　長野県教育委員会事務局文化課内

長野調査事務所　　長野市篠ノ井布施高田字佃963－4

佐久調査事務所　　佐久市大字安原字蛇塚1367

2．事　業

(1)　理事会および会計監査

理事会

○第19回理事会　平成2年5月31日　会場　長野市　山王共済会館

第1号議案　平成元年度事業報告書について

第2号議案　平成元年度決算報告書について

○第20回理事会　平成２年11月19日　会場　長野市　サトウ会館

第１号議案　平成２年度事業変更計画書（案）について

第２号議案　平成２年度収支補正予算書（案）について

○第21回理事会　平成３年３月26日　会場　長野市　山王共済会館

第１号議案　平成３年度事業計画書（案）について

第２号議案　平成３年度収支予算書（案）について

第３号議案　平成２年度収支補正予算書（案）について

会計監査

平成２年５月16日実施　平成元年度事業報告書および収支決算書について

(2)　調査事業

長野自動車道および上信越自動車道に係る埋蔵文化財発掘調査―長野県教育委員会および長野市教育委員会からの委託

ア　調査遺跡および面積

長野自動車道関係　　坂北村・長野市地域内３遺跡　6,700㎡

上信越自動車道関係　　佐久市・更埴市・長野市地域内14遺跡　182,810㎡

イ　整理事業

長野自動車道関係　　明科町・麻績村・坂北村・長野市および更埴市の12遺跡の整理事業

上信越自動車道関係　　佐久市・更埴市・長野市地域36遺跡の整理作業

(3)　事業費

長野自動車道関係　　147,096千円

上信越自動車道関係　2,661,598千円

(4)　普及活動（71ページ参照）

(5)　職員研修

ア．講師招へい及び来所による指導・講習会等（75ページ参照）

イ．奈良国立文化財研究所関係

期　間	日　数	課　程	参　加　者
平成２．４．17～４．27	11	保存科学基礎	鶴　田　典　昭
7．24～８．29	37	一般	宮　脇　正　実
９．５～10．４	30	遺跡測量	黒　岩　　隆
10．11～10．31	21	環境考古	町　田　勝　則
11．20～11．30	11	水田遺跡調査	河　西　克　造
３．１．22～１．25	4	写真測量外注管理	臼　田　武　正

ウ．海外研修

期　日	内　容	参加者
平成３．２．20 ～３．２	我国古代文化の源流となった中国の古代文化遺跡の研究 ・万里の長城，明の十三陵，故宮，兵馬俑坑，秦始皇帝陵，茂陵，乾陵などの中国の歴史を象徴する史跡 ・中国歴史博物館の原始から清の時代に至る展示資料	寺島　俊郎 臼居　直之 綿田　弘実 平林　彰

エ．その他の学会関係研究会・研修会

期　日	内　容
平成２．４．29	諏訪考古学研究会総会「石川条里，川田条里遺跡の調査の成果」（３名）
	東日本の水田を考える会（仙台市）（２名）
9．30	長野県考古学会研究発表会「大星山古墳群の調査」（１名）
10．21	長野県考古学会大会「松原遺跡の調査」（１名）
10．27～10．28	「縄文セミナー縄文後期の諸問題」（群馬県）（１名）
10．29	「古代豪族と居館」国立歴史民俗学博物館フォーラム（佐倉市）（２名）
	愛知考古学談話会　（名古屋市）（１名）
11．23～11．24	「シンポジウム縄文時代屋外配石の変遷」（山梨県）（３名）
12．１～12．２	「東海埋蔵文化財研究会」（三重県）（３名）
12．１～12．２	「シンポジウム土器からみた中世社会の成立」（京都府）（１名）

オ．県外埋蔵文化財施設・遺跡等視察および資料調査

期　日	視　察　・　調　査　地	参加者
平成３．１．29～31	展示施設および木製品の保存処理施設等の調査（奈良・広島）	２名
この他，他県埋文センター，博物館・研究施設・調査現場の視察・資料調査を行った。 延べ56カ所　34名		

カ．全埋文協などへの参加

期　日	会　議　名	開催地	参　加　者
平成２．５．11	埋文協関東・中部ブロック会議	名古屋市	峯村　忠司 小林　秀夫 佐藤　今雄 青島　重子
６．14 ～15	埋文協総会	大阪市	伊藤　万寿雄 塚田　次夫 柳沢　洋良
11．14 ～15	関越自動車道関係群馬長野連絡協議会	戸倉町	伊藤　万寿雄 峯村　忠司 畑　幹雄 小林　秀夫 寺島　俊郎
９．19 ～20	埋文協連絡協議会研修会	会津若松市	塚原　隆明 松本　忠己 関　次郎
９．11～12	関東甲信越静埋文行政担当者会議	越生町	臼田　武正
10．24	埋文協関東・中部ブロック会議	石和町	伊藤　万寿雄 小林　秀夫
９．20 ～21	関越自動車道関係４県連絡会議	水上町	永田　伸男 峯村　忠司 畑　幹雄 宮下　建司 寺島　俊郎

キ．長野県教育センター・産業教育センター研修

期　日	学校別	分　野	講　座　名	参加者
教育センター（※印　企画研修・△印　公開講座）				
平成2．5．30～31	小	生涯教育	生涯教育と学校教育	松岡忠一郎
6．6～7	小	技　術	草花栽培	伊藤　克己
8．1～2	小	理　科	四季の自然観察法	小林　秀行
8．1～3	高	社　会	地域と教材開発	稲場　隆
8．22～24	小	技　術	金属加工	中村　敏生
9．4～5	小	教育機器	パソコンと学習指導	越　修一
10．3～5	小	美　術	描画指導基礎	出河　裕典
5．31	※	算　数	楽しい算数・数学の授業	小林　秀行
7．12	〃	教職教養	教育と国際化	武居　公明
8．24	〃	〃	道一筋に生きる	山崎　光顕 入沢　昌基 越　修一
9．11	〃	〃	身近な自然観察	甲田　圭吾 小林　秀行 岡村　秀雄
11．6	〃	〃	生きるということ	伊藤　克己
11．20	〃	〃	子供の本の世界	越　修一
12．6	〃	〃	自然の神秘を探る	稲場　隆
3．1．17	〃	教育相談	教育相談	松岡忠一郎
産業教育センター				
平成2．8．2		情報処理	パソコン入門(1)	池田　哲 渡辺　敏泰 伴　信夫
10．29		〃	BASICプログラミング	吉沢　信幸
11．5		〃	システム開発	山岸　清一
3．1．9		〃	パソコン入門(4)	宇賀神誠司

ク．姉妹校制度研修

期　日	訪問学校	研修内容	参加者
平成3．2．12	通明小学校	授業参観・講話	中村　寛　越　修一
2．27	長野南高校	〃	夏目　大助　本田　真
2．28	稲荷山養護学校	〃	山岸　清一　越　修一 中村　寛

ケ．県内市町村および関係機関への協力・指導等

期　日	市町村等	協力・指導内容等
平成2年4月 ～ 平成3年3月	茅野市他3市4町2村 長野県教育委員会他 信濃教育会他9カ所	市町村教委の発掘調査，整理作業 報告書刊行等 近世社寺等調査，市町村誌関係 考古学講座等

平成２年度役員及び職員

理　事　会

理　事　会	樋口　太郎（県教育長）	
副理事会	伊藤万寿雄	
専務理事	塚原　隆明	
理　　事	山極　達郎（県企画局長） 山下　四郎（県教委文化課長） 宮坂　博敏（更埴市長） 奥村　秀雄（長野市教育長）	佐藤　一郎（県高速道局長） 森嶋　　稔（県考古学会長） 神村　　透（考古学研究者）
監　　事	石井　俊雄（県会計局会計課長）	島田　勝治（県教委総務課長）

事　務　局

事務局長	塚原　隆明
総務部長	塚田　次夫
調査部長	小林　秀夫
技術参与	佐藤　今雄
総務部長補佐	松本　忠巳
主　　査	永田　伸男　　青島　重子
主　　任	柳沢　洋良

調査事務所

	長野調査事務所	佐久調査事務所
所　　長	峯村忠司	畑　　幹雄
庶務部長	塚田次夫（兼）	〃　（兼）
庶務部長補佐	松本忠巳（兼）	
事務職員	青島重子（兼）永田伸男（兼） 柳沢洋良（〃）	関　　次郎
調査部長	小林秀夫	
調査課長	臼田武正　宮下健司	寺島　俊郎（代理）
調査研究員	福島　厚利　駒津　武茂 池田　哲　飯島　明孝 山極　充　木伴　英一 岡沢　康夫　松山内　信夫 深沢　重夫　岡崎　忠一郎 伊藤　克己　山藤　光顕 中村　寛　沢辺　袈裟一 田中　正　渡吉　敏泰 越　修一　澤甲　信幸 中原　村敏　松臼　圭吾 大平　竹林　明憲　岡居　昭彦之 上出　田河　典裕　脇木　直実男 土屋　瀬山　昭克　岸上　正一也 廣西　藤川　友隆　内目　清徹夫 伊市　川西　克典　田田　隆助 河鶴　田山　美智　村島　大実則 内中　下武　山平　昭彦　岩林　弘寿 中下　島居　浩公　伸明　沢場　勝裕 川赤　塩沢　保仁　田保　昌隆 中白　沢沢　道勝　彦彦　久藤　邦若　原林　直関　全真 西　香子　人卓 寿	興水　太仲　小林　秀行 近藤　尚義　新海　節生 百瀬　忠幸　宇賀神誠司 岡村　秀雄　田中正治郎

長野県埋蔵文化財センター年報7　1990

発行日　平成3年3月31日

編集発行　(財)長野県埋蔵文化財センター

〒388 長野市篠ノ井布施高田字佃963の4

TEL　0262－93－5926

印　刷　信毎書籍印刷株式会社

長野市西和田470

TEL　0262－43－2105